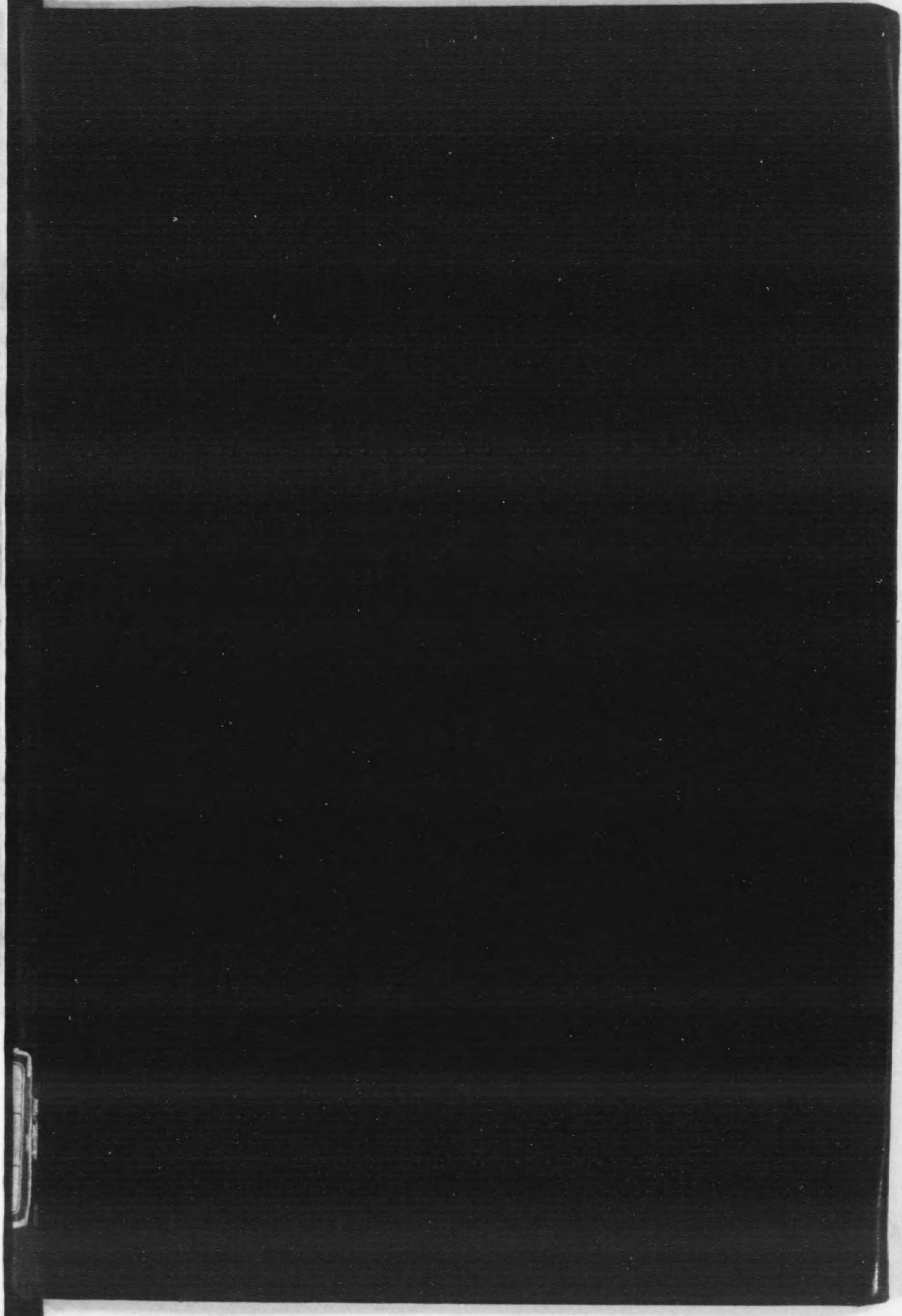




始



589
120

908
E37

WORLD'S CLASSICS IN ENGLISH

A CHRISTMAS CAROL

BY

CHARLES DICKENS

WITH TRANSLATION AND NOTES

BY

E. HORI



1928



CHARLES DICKENS

589120

Charles
Dickens

序 言

Charles Dickens は千八百十二年二月七日ハムズシヤイヤーのランドポートで、八人の子供の中の二番目の子供として生れた。彼の父 John Dickens はボーツマウスの海軍主計局の一書記であつた。彼の二才の時に両親は London に移り、三年にして、Chatham へ移つた。其處では、幼き Dickens は幸福な五年間を過した。そして、物淋しい、どちらかと言へば蒲柳の質の彼は父のもつ僅かばかりの書籍の中に友を見出して楽しんで居た。Smollet や Defoe や Goldsmith は先づ彼のお氣に入りとなつた。然しながら十才の時、彼の一家に一大變動が起つた。彼の両親は心優しくはあつたが、しまりがなかつたと見え父は負債の爲めに遂に取り押へられて、Marshalsea 監獄に投ぜられた。母は本や家具等を質に入れて僅かに生計を支へて行くと言つた具合でひどく生活に苦しんだ。こんな有様であつたから子供等は各々自分で生活をして行かねばならなくなつた。従つて、幼き、Dickens はある靴墨製造所へ、一週六シリングで、奉公にやられた。此處で約二年間雇はれてゐる間に感じたる零落と不幸は彼の魂に深く刻みついた。此子供時代の傷しい經驗は David Copperfield 中に描かれて讀者を感動せしむること甚しい。漸くにして遺贈と言つた形で幾らかの金が這入つて來たので、父は Marshalsea の監獄を出で、Dickens は靴墨製造所から暇を貰つて、當時未だ十二才であつたので學校へ行くことになつた。こんな有様で殆ど教育を受けて居なかつた彼は飛び飛び讀みで澤山の色々な智識を頭に入れたのであつた。十五才の時學校を去り、暫らくの間、一代言人の事務所に雇はれた。彼が自ら生計の道を立てだしたのは此頃からであつた。彼の野心は、當時父のやつて居た通信員となることであつた。従

つて、彼は速記術を學び、やがて、Morning Chronicle の議會通信員の地位を得た。下院の傍聴席に於ては、彼は最も敏速で正確なる通信員だと言ふ噂が専らであつた。此政治演述の報道の仕事は大概夜の仕事であつたので、閑な午前中を利用して、London 市中を漫歩し、その市中生活の種々なる状態を見て非常に興味を感じてゐた。かくして彼の見たる處は遂にあの有名な Sketches by Boz となつて、Evening Chronicle 及び The Old Monthly Magazine に現はれ始めた。彼はもう一週間に七ギニー儲けてゐた。1836年にその Sketches は本の形となつて出版された。それより希望に燃えたる Dickens は成功の見込がついて勵まされ、同三十八年には The Pickwick Papers を出した。挿繪として Hablot Browne 作の漫畫を入れた此 Pickwick は直ちに大成功であつた。矢繼早に Oliver Twist を出した。此は Dickens が編輯を引受けて居た Bentley's Miscellany に發表されたものであつた。次に出たのは Nicholas Nickleby であつた。1840年には Master Humphrey's Clock, The Old Curiosity Shop, Barnaby Rudge を書いた。Master Humphrey's Clock の如きは七萬冊も賣れたと言ふことである。彼はスコットランドを訪れ、エジンバラでは公に愛戀された。其後1842年に America を遊歴し、歸り來つて後、Martin Chuzzlewit を作つた。此はアメリカのある特徴を手ひどく取扱つたものだけに、遠く大西洋の彼方より作者に對する大へんな騒ぎが起つた。彼の有名なクリスマス物語を書き始めたのは此頃であつた。その内でも情深く、ユーモアに富んで居る爲めに特に世人に知られてゐるのは、この A Christmas Carol (1843) と The Chimes (1844) 及び The Cricket on the Hearth (1845) とである。1846年に彼は伊太利を訪れ、同年 The Daily

News を編輯したがその仕事は面倒くさかつたので、僅か數ヶ月間やつただけで、止してしまつた。Dombey and Son は次に出た本であつた。それから、1848年には一般に彼の傑作とみなされて居る彼の自叙傳的な物語、David Copperfield に筆を染め始めた。1852年には Bleak House を書いた。その頃、彼は Household Words の編輯をやつて居た。Hard Times はその雑誌の爲めに書いたものであつた。此 Household Words を廢刊して、その代りに自分一人で定期刊行の All the Year Round を發行し、それに、A Tale of Two Cities (此はフランス革命物語である) 及び Great Expectations を書いた。1867年には、再び、アメリカへ渡つて、自分の作品を読み聴衆から熱狂的に歡迎された。(彼は此より以前既に England 及び Scotland に於ても自作を朗讀して、劇的再現の著しい力を顯して居たのであつた。)彼は此朗讀によつて莫大なる金額を得たが、肉體的にも精神的にも疲勞をとまひ、餘りにも、精力を使ひ過ぎたのであつた。彼の最後の作品は Our Mutual Friend 及び The Mystery of Edwin Drood とであつたが、後者は未完成の儘に終つた。彼は Thackeray と同じく、過勞の爲めに腦溢血を起して死んだのであつた。此恐しくも豫期せざる出來事が起つたのは、1870年の六月の始め、Rochester の God's Hill に於ける自宅に於てであつた。彼の遺骸は Westminster Abbey に葬られた。

Dickens の作品は大抵、縦横自在、平明にして、豊富なる云はば、journalist 風なものであつて、美しく書かうと試みた所もなく、culture の跡にもとほしい。蓋し、彼自身殆んど教育を受けてゐなかつたし、小さい時から随分と苦しんで來た人だけに、上流社會よりも下層社會に對する深き同情を持ち、又、

その事情に通じてゐたので、今の言葉を以てすれば、大衆を目當てに書いたのであつて、學者や上流社會のものを目當てに書いたのではなかつたのである。

然も、彼の言葉は常に表現的であつて、或時は命ずるが如き力をさへ持ち、人の魂を魅し去るのである。かく筆が巧みに走りすぎて居るだけに、眞面目な藝術が許す以上に描く人物の個性や境遇を誇張し過ぎて居る傾があるとの批評は免かれないであらうが、然も尙ほ、彼の描く人物の個性は生きて居る如く大なる成功を贏ち得てゐるのである。其等の人物は實生活に於て本當の人物を見る様に個性がはつきりと生々と描かれてゐる。彼の描いた人物はかく生々としてしゐると共に種々雑多にして、その種類の數を數へ上げることは容易でない。Pickwick や Sam Weller の様なのもあれば、Pecksniff や Tom Pinch の様なのもあり、又、the Cheeryble Brothers, Mark Tapley, Dick Swiveller, Bill Sikes, Fagin, Quilp, Squeers, Sarah Gamp, Uncle Dick, Agnes, Little Nell, Micawber, Paul Dombey などがある。

彼の天才の著しい特色はその温き同情である。虐げられたる者、殊に、幼き者や弱き者に對するやさしき同情である。それから、Smollet の時代以來小説には未だ書かれた事のない程な無邪氣な冗談、とても鼎の湧くが如く打ち興じ騒ぐ處を輕妙に描いた點は作家としての Dickens の他の著しい特質であらう。彼の小説は「目的のある小説」と言はれる種類のものであることがよくある。彼は自分の目的成就に於ては非常に成功した。彼は如何なる政治家よりも遙かによく、貧民の境遇を改善したと正しく言はれるのである。此 A Christmas Carol の如きも、特にクリスマスの讀物として作られただけに、その好一例とさ

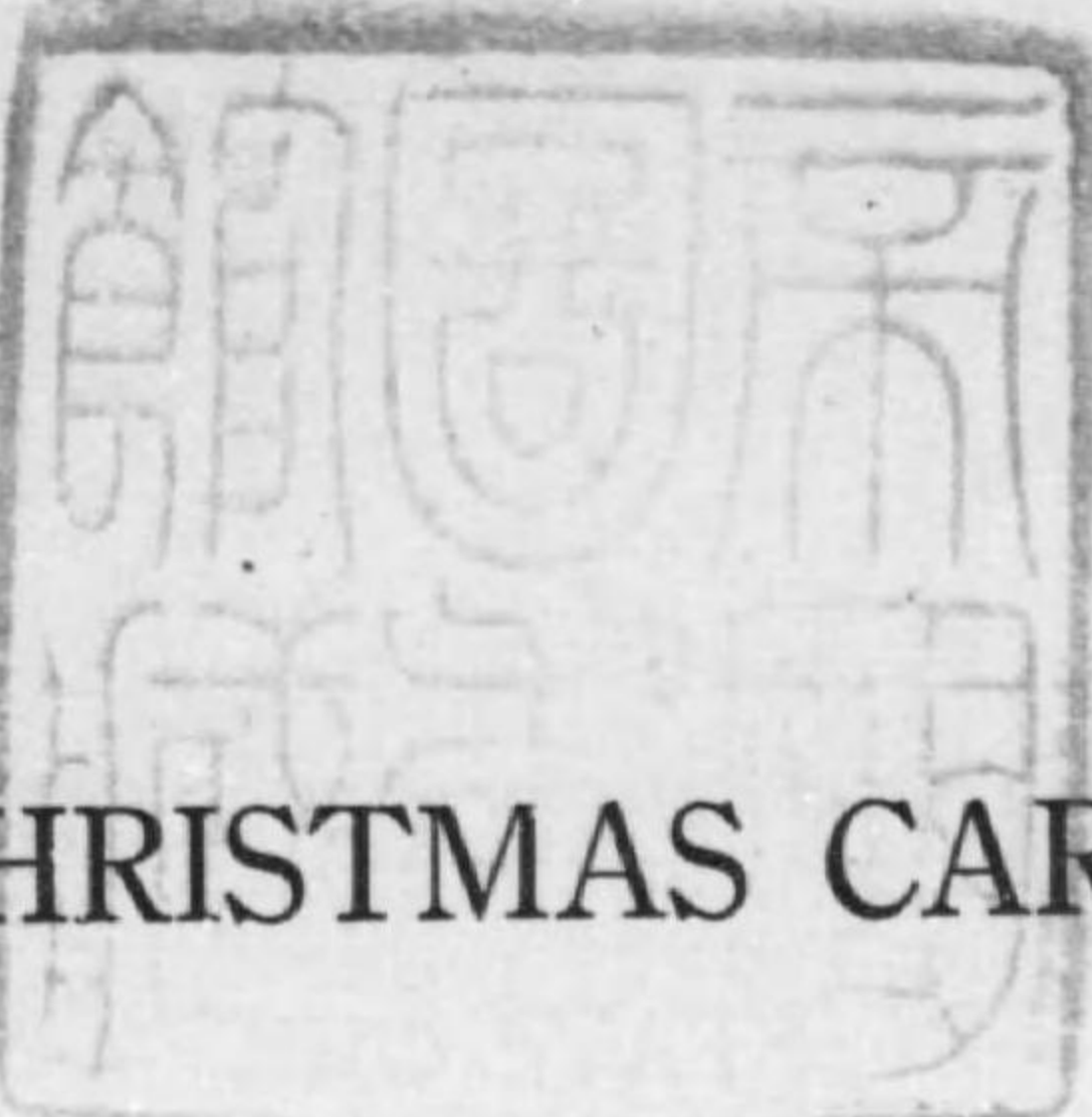
れるであらう。スクルウチと言ふ強慾張で情知らずの爺さんが七年以前に死んだ仲間のマアレイの幽靈の仲立て過去、現在、未來のクリスマスの幽靈に導かれて、自分自身の過去、現在、未來の姿をありありと見せられ、現在の自分が如何に誤れる醜惡なる姿をしてゐるかを悟らされて、遂に、善良にして、情ある人間になつたと言ふ物語である。だから、唯、この様な筋書だけを讀めば、如何にも、勸善懲惡式なもの様であるが、然も本文を讀めば、そんな dry な感じは決して起させず、人をして或時はスクルウチの貪慾な情知らずに憤怒の念を否寧ろ深き憐みの念を起さしめ、或時はカンツリー・ダンスの仲間入りをさせて、讀者たることを忘れしめ、又或時は、ちびちやんのチムのいたいけな姿に涙をそらしめるのである。かくして、笑と涙、諧謔と慎言との中に人の心をして、自ら醇化せしめ、如何に迷へる羊をもクリスマスの鐘の音と共に、情ある本心に立ち歸らしめ、教會へと急がしめるのである。

昭和三年六月九日

譯註者誌す

CONTENTS

STAVE ONE	2
STAVE TWO	69
STAVE THREE.	127
STAVE FOUR	207
STAVE FIVE	262



A CHRISTMAS CAROL

A CHRISTMAS CAROL

STAVE ONE

MARLEY'S GHOST.

1) Marley was dead, to begin with. There is no doubt whatever about that. The register of his burial was signed by the clergyman, the clerk, the undertaker, and the chief mourner. Scrooge signed it. And Scrooge's name was good upon 'Change, for anything he chose to put his hand to.

Old Marley was as dead as a door-nail.

Christmas ('krɪsməs) は基督降誕祭 十二月二十五日に行ふ。此の日は日本のお正月の様に一年中で一番の祭日である。

Carol ('kærəl) クリスマスに歌ふ讚美歌。(元は歌に合せて多数の人が環になつて行つたダンスの事を言つたが、殊に其の歌を指して言ふ様になり、更に其後特にクリスマスに歌はれる歌のことを言ふ様になつた。此言葉の由來を尋ねると中世紀に於て廣く行はれた基督降誕に關する宗教劇から出たものである。デイキンズの此一篇は別に歌ではないけれども、クリスマスの讀物として特に書いたものであるからこの名を付けたものであらう)。

stave (steiv) (=stanza; musical staff) 詩歌の一節、或は一譜表。(Dickens は此の物語を carol と名付けた故に、普通なれば Chapter one と言ふべき處を特に Stave one としたのである)。

1. **to begin with** = in the first place. [獨立句] 先づ第一に(言つて置くが)。*To begin with, I hate her face.* (第一顔が氣に喰はない)。
register ('redʒɪstə) 帳簿、(殊に) 登録簿、戸籍簿。The register of his burial ('berɪəl) 彼の埋葬登録簿。

clergyman ('kle:dʒɪmən) [普名] (a member of the clergy.) 僧、牧師、(the clergy 僧職、通常 pl. verb をとる、a clergy 即ち某國、某寺の僧のときは通常 sing. verb をとる、clergy-woman. 僧の妻、嬖等)。

clerk (klɜ:k) (a layman who performs some minor ecclesiastical office.) 教會の書記、(一寸した教會の事務を取扱ふ俗人)。

クリスマス キャロル

第一章

マアレイの亡靈

1. 第一マアレイは死んで居たのであつて、それについては疑ふべき餘地が少しもありません。彼の埋葬登録簿には、牧師教會の書記、葬儀屋、及び喪主が署名して居ました。スクルウヂがそれに署名したのであります。處でスクルウヂの名前は取引所では仲々通りが好く、彼が認めて署名した物は何でも信用がありました。

マアレイ老人は扉釘の様に確かに死んで居たのであります。

undertaker 葬儀屋。

the chief mourner ('mɔ:nə) 喪主。(mourn 悲む mourner 悲む人)。
signed it. 其(登録簿)に署名した。to sign one's work 作に署名する。銘を打つ。

was good upon 'Change = was good on the Exchange. 取引所で信用があつた。good = reliable 信用がある。幅が利く。'Change = Exchange (ɪks'tʃeɪndʒ) 取引所。A stock exchange 株式取引所、(歐州諸國の株式取引所は佛語で bourse (buʊs) と言ふ)。(Scrooge は取引場では仲々幅が利いて居たので、彼の署名した手形などは何處へ出しても信用されたのであるから、彼の署名した Marley の埋葬登録簿も信用すべきであると言ふことを面白く言つたもの)。

to put his hand to = to sign. 署名する。hand = signature. 署名。
to put one's hand to an instrument. 證券に署名する。
to put one's hand to the plough. 事業に着手する。(此の場合の to put one's hand to は to engage in; to undertake. の意)。

chose choose の past. **choose** = think proper. 適當と思ふ、認める。

as dead as a door-nail = also 'tely dead 全く死んで居る。確に死んで居る。**door-nail** = 戸に打つてある鉄釘。as deaf as a door-nail = 金鑼の、(所も意味も異ふが同じ處から出た喩へ)。

2). Mind! I don't mean to say that I know, of my own knowledge, what there is particularly dead about a door-nail, I might have been inclined, myself, to regard, a coffin-nail as the dearest piece of ironmongery in the trade. But the wisdom of our ancestors is in the simile; and my unhallowed hands shall not disturb it, or the Country's done for. You will therefore permit me to repeat, emphatically, that Marley was as dead as a door-nail.

3) Scrooge knew he was dead? Of course he did. How could it be otherwise? Scrooge and he were partners for I don't know how many years. Scrooge was his sole executor, his sole administrator, his sole assign, his sole residuary legatee, his sole friend, and sole mourner. And even Scrooge was not so dreadfully cut up by the sad event, but that he was an excellent man of business on the very day of the funeral,

2. **Mind!**=Pay attention! よく氣をつけよ。御注意致しますが。
of my own knowledge=from my experience. 私の経験する處では。私の知つて居る處では。

what there is=for what reason there is=why there is.

I might have been inclined to regardIf I had had my own simile. と云ふ文句を入れて考へてみるとよい。(私自身の言葉で喩へてみれば、.....とみなすであらう。)

But the wisdom of our ancestors is in the simile 吾々の祖先とは英人の祖先。the simile は as dead as a door-nail を指す。此 simile は既に 1350 年頃から用ひられてゐる。Shakespeare の文中にもある。(例) 'Come then and they five men, and if I do not leave you all as dead as a door-nail, I pray God I may never eat grass more.' (2 Henry VII. IV. 10) (さあやつて来い五人連、若し俺がお前等をすつかり片附けてしまはなければ、最う草は決して喰ひやしない。) 尙 the wisdom of our ancestors と云ふ言葉は Edmund Burke (1729—97) が 1775 年 3 月 22 日下院に於て試みた "Conciliation with America" 「アメリカとの和解」と云ふ演説でこの句を初めて使つてから後諺の様になつて居る。

unhallowed hands 神聖にされざる手、即、穢らはしき手、(hallow, vt. 神聖にする。)

shall not disturb it 第二人称第三人称の shall は第一人称の意志裏面、即、換言すれば、此は、I will not disturb it with my unhallowed

2. 此處で御注意願ひ度いのですが、私は、なにも、扉の釘が、何う言ふ譯で特に死んでるかと言ふことにつきまして、自分の経験で、知つて居ることを申し上げ様とするのではありません。自分一人の考では、賣つて居る金物の中で、棺桶の釘が一番死物だと言ひ度い處です。が然し、此譬喩には、吾々の祖先の智慧が籠つて居るのだから、其を自分の穢らはしい手で、壞はす様なことは致しますまい。さもなければ、國が亡んで仕舞ひます。そこで御免蒙つて、マアレイは扉釘の様に死んで終つてると、語呂を強めて繰返ませう。

3. 處でスクルウヂは彼の死んだことを知つて居たのだらうと言へば、其は勿論で、知らずに居る筈がなかつたのであります。スクルウヂと彼とは何年とも知れぬ長年間の相棒であつた。スクルウヂは彼の唯一の遺言執行人であり、唯一の遺産管理者であり、唯一の遺産譲受人であり、唯一の殘餘受遺者であり、唯一の友人であり、また唯一の會葬者でもありました。然も尙ほこのスクルウヂはこの不幸の爲めに、たいして悲しみもせず、葬式の當日でさへ、商賣の妻腕を振つて、間違ない處を一

hands.

or the Country's done for さもなければ國が亡びる。(They have done for me at last—I am done for. たうとうやられた。)

3. **he did**=he knew.

partners (苦樂などを) 共にする人、(合資の) 組合員。

executor ('eksikju:tə) 遺言執行人、遺言に依つて遺言の處置を任せられた人。

administrator 死者に適當な後繼者、親類等のない場合其遺産處置の爲に法廷より任命された人。遺産管理者。

assign 遺産を譲り受けた人。

residuary legatee=the person to whom the remainder of estate is bequeathed. 殘餘受遺者。residuary (ri'zidjuəri) (遺産などの) 殘餘の、即、借金等を拂つた後に残つて居る財産の、の意。legatee (legə'ti:) 遺言遺産 (legacy ['legəsi]) を受ける人。

cut up=distressed; afflicted; grieved. (例) He was much cut up by the death of his wife. (彼は妻が死んだので大層落膽した。)

.....not so....., but that he was=..... not so....., that he was not.でない程に.....ではなかつた。=あまり.....でなかつたので...であつた。

an excellent man of business 金儲が秀れて上手な男、cf. 'a man of letters (文士), 'a man of characters' (人格者)。

and solemnized it with an undoubted bargain.

4) The mention of Marley's funeral brings me back to the point I started from. There is no doubt that Marley was dead. This must be distinctly understood, or nothing wonderful can come of the story I am going to relate. If we were not perfectly convinced that Hamlet's Father died before the play began, there would be nothing more remarkable in his taking a stroll at night, in an easterly wind, upon his own ramparts, than there would be in any other middle-aged gentleman rashly turning out after dark in a breezy spot—say Saint Paul's Churchyard for instance—literally to astonish his son's weak mind.

5) Scrooge never painted out Old Marley's name. There it stood, years afterwards, above the warehouse door: Scrooge and Marley. The firm was known as Scrooge and Marley. Sometimes people new to the business called Scrooge-Scrooge, and sometimes Marley, but he answered to both names. It was all the same to him.

6) Oh! But he was a tight-fisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutch-

solemnize ('sələmnaiz) solemn にする。厳かにする。

undoubted bargain 必ず儲かる見込のある取引。

4. **Hamlet** Shakespeare の四大悲劇の一、1602 年初演。父王の亡霊が現はれるのは、第一幕第四場、第五場。

than there would be = than there would be anything remarkable.

turn out (家を) 出掛ける。The people *turned out* to see the procession. (人々はその行列を出て見た。)

say = suppose; for instance 例へば、假に。

rashly 向ふ見ずに。

Saint Paul's London の cathedral 1673 年に起工、1710 年完成。

churchyard = burial ground attached to a church.

5. **painted out** 塗り消す。

Scrooge and Marley 看板に書いてある字で、二人が設立して居た合名會社の名前。

儲けして、それで式に勿體をつけたと言ふ位でありました。

4. マアレイの葬式のことを言つたので話はまた元へ戻りますが、マアレイが死んだことは最早少しも疑のないことで、此事ははつきり承知して置いて貰はなければなりません。さもないと、これからお話しようとする物語は、何の變哲もないものになつて終ふのであります。例へば、ハムレットの御父君はお亡くなりになつたのだと言ふことを其のお芝居が始まる前に充分承知して居ないと、この父君が、東風の吹く夜に、御自分の城壁の上を歩かせられると言つた處で、別段變つた事でもなく、何處かの中年の紳士が唯臆病息子の度膽を抜いてやらうと言ふ所から、——セイント、ボールの墓場と言つた様な——風の吹く場所へ、無謀にも日が暮れてから出掛けて行くのと、餘り變りがないことになるでせう。

5. スクルウヂはマアレイ老爺の名前を塗り消すことは決してしませんでした。幾年か経つた後までも、商會の門口には、「スクルウヂ、マアレイ商會」と言ふ風にその名前が出て居た。この商會は「スクルウヂ、マアレイ」で通つて居たので、時とすると、始めて取引せる人などは、スクルウヂと呼んだり、また、時には、マアレイと呼んだりしました、が然し、彼は何ちらの名前にも返事をしました。彼にとつてはどちらでも同じ事だつたのです。

6. おう、然し、此スクルウヂと言ふ男は、轉んでも只は起きぬ大の吝嗇坊で、金を絞るやら、振り取るやら、攔むやら、

6. **was a tight-fisted hand at the grindstone** = was miserly and grasping to the last degree; was a regular miser and thought nothing but grasping. 吝嗇で轉んでも只は起きなかつた。tight-fisted = close-fisted: miserly 吝嗇な (圓砥石で刃物でも磨ぐ時の様に固く握つて放さず、無慈悲、強慾な吝嗇家る言ふ。)

squeezing, wrenching, scraping, clutching は各々次の字に *ing* がついて形容詞の用をなせるもの。squeeze (金を) 絞る。wrench (人の持つてる物を) 振り取る。scrape (刃のない物で) 搔く、削る。clutch 握つてはなさぬ。

ing, covetous, old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin. He carried his own low temperature always about with him; he iced his office in the dog-days; and didn't thaw it one degree at Christmas.

7) External heat and cold had little influence on Scrooge. No warmth could warm, no wintry weather chill him. No wind that blew was bitterer than he, no falling snow was more intent upon its purpose, no pelting rain less open to entreaty. Foul weather didn't know where to have him. The heaviest rain, and snow, and hail, and sleet, could boast of the advantage over him in only one respect. They often "came down" handsomely, and Scrooge never did.

flint 燧石、(より) かたくな、無情なものをも言ふ。a heart of flint 無情な心。to skin a flint (吝嗇家が) 爪に火をとぼす。

self-contained 話し嫌ひな。

rime (rain)=hoar-frost 霜 (hoar (老年の爲) 白き、白髪)。

the dog-days 土用、普通七月三日より始まり八月十一日に終るとされてゐる。the Dog Star (=Sirius 天狼星) が出る頃の期間。昔の人は其期間の暑くて、健康に悪い事と、Egypt の Nile 河の水が一番高まるのを其 Dog Star のせいだと考へた。そして、長い間一般人には此の dog days は犬が狂氣になりかちな時期だとみなされてゐた。

thaw (融:) (凍れる物が) 溶ける。〇度以上に昇る。冷淡でなくなる。

7. **external heat and cold** 外界の暑さ寒さ、即、時候の寒暑。external (internal に対し) 外部の、外界の。

no falling snow.....purpose 何んなに降る雪も金をためるのに専心な Scrooge 程に搦まず倦まず降りはせぬと言ふ humour。

to be intent upon one's purpose=to be intent on doing something, one's object 一心不亂なる、餘念なき。

引つ掻くやら、握つてはなさぬやら、それは貪慾な罪作り爺でありました。其硬くて鋭いことといつたら、どんな鋼鐵で打つても碌な火も出さぬ燧石そのまんまで、他人と交際もせず、口を利くのも嫌がつて、一人ほつちて暮して居る様は牡蠣宜しくでありました。彼の心の冷たさは年取つた容貌を冷淡極りなく見せ、尖つた鼻は霜枯れ、頬は皺くちやに、歩きつき迄鯁鉾張り、眼を眞紅に血走らせて、薄つべらな唇は紫色にしてゐる、然も、鹽辛聲でがみがみ文句を並べ立てました。白い霜は頭の上にも、眉にも、倔強な針金鬚のある顎にも、降りてゐた。彼は何處へ行つても、身の周りにはこの冷たい空氣がつきまとひ、土用中でも彼の店は氷の様に冷され、クリスマスだつて氷點以上には唯の一度も温くしやしない。

7. スクルウヂには外界の暑さ寒さなどは少しも影響しなかつた。どんなに暑いと言つても暖まらなきや、どんなに寒いと言つても冷えもしなかつた。如何な風でも彼奴位冷たいのはなく、如何な降る雪でも彼奴位根氣のよいのはなく、また如何な篠衝く雨でさへも彼奴程に無慈悲ではなかつた。意地悪い天候も彼に對しては手の出し様がなかつた。が唯一つ、はげしい雨や、雪や、霰や、霰が彼に優つてると自慢されることがありました。其は折々氣前よく「撒き散らした」ことで、此ばつかりはスクルウヂには決して出来なかつた。

no pelting rain less open to entreaty rain の次に was が略されてゐる。open to entreaty 歎願を聞き入れる。即、情ある。

to have him=to possess an advantage over him. 彼に優る。

in only one respect 唯此一點に於て。

"**came down**" **handsomely**. come down には二つの意味がある。それによつて洒落れを言つてゐる。(1) fall (2) contribute そこで (1) (雨や雪が) 激しく「降つた」と言ふのと、(2) 氣前よく(金を)「ふりまいた」との二意となる。handsomely ('hænsəmli) 氣前よく、手厚く。

Scrooge never did=Scrooge never came down handsomely. (雨や霰が澤山まきちらす様に) Scrooge は氣前よく金を出すことをしなかつた。

8) Nobody ever stopped him in the street to say, with gladsome looks, "My dear Scrooge, how are you? When will you come to see me?" No beggars implored him to bestow a trifle, no children asked him what it was o'clock, no man or woman ever once in all his life inquired the way to such and such a place, of Scrooge. Even the blind men's dogs appeared to know him; and when they saw him coming on, would tug their owners into doorways and up courts; and then would wag their tails as though they said, "No eye at all is better than an evil eye, dark master!"

But what did Scrooge care! It was the very thing he liked. To edge his way along the crowded paths of life, warning all human sympathy to keep its distance, was what the knowing ones call "nuts" to Scrooge.

9) Once upon a time—of all the good days in the year, on Christmas Eve—old Scrooge sat busy in his counting-house. It was cold, bleak, biting weather: foggy withal: and he could hear the people in the court outside, go wheezing up and down, beating their hands upon their breasts, and stamping their feet upon the pavement stones to warm them. The city clocks had only just gone three, but it was quite dark already—it had not been light all day—and candles were

8. what it was o'clock. what o'clock it was.

blind men's dogs 盲人の手引きする犬。

evil eye 邪悪な眼、(嫉妬心や、執念をもつ人や、意地悪い人に睨まれると病気になる、運が悪くなると言はれてゐ、Scroogeの眼はこんな眼だつたと言ふのだ。)

dark master=blind master.

to edge one's way=to force or push one's way. (to edge one's way through the crowd 人込みの中を押し分けて進む。)

what the knowing ones call "nuts" 物識達が「クルミ」と稱する處のもの。

the knowing ones=the people who are up to what's what. 物識、通人。

8. 誰一人として、往來で彼を呼び止めて、「やあ、スクルウヂさん、何うですか、些と御出でなさいよ。」などと愛想よく言ふ者はなかつた。乞食だつて彼にどうか一文などと取纏つたものではなく、小供だつて彼に何時ですかと問ふ様なものではなく、男だつて女だつて、何處其處へは何う行きますかなどとスクルウヂに路を尋ねるなんてなことは一生涯に一度だつてありやしなかつた。盲人のつれてる犬でさへ彼の顔は覚えてるらしく、彼がやつてくるのを見ると、よく、主人の裾をくはへて、門口やら路やらへ引つ張り込んだものです。そしてそれから「盲目の旦那、あんな邪悪な目よりは全々見えない方がましですよ。」とでも言つてる様に尾を振るのでした。

然し、スクルウヂはそんなことに頓着するどころか、其はかへつて彼の好む處でありました。人情なんてなものはてんでそつちのけにして、世の人込みの中を押し分けて行くのが、スクルウヂにとつては何より好む處であつたのでした。

9. 今は昔、——一年中で一番目出度いクリスマスの前夜のことでしたが——スクルウヂ老人は自分の帳場に居坐つて忙しくしてゐました。寒氣は肌をさき、身を刺す様で、其の上霧が深く、路往く人はふうふう息をしながら、兩の手で胸をばたばたたゝいたり、また身體を暖めようと、敷石の上を力を入れた足どりでふんでゆく音が聞えて來ました。市の大時計はたつた今三時を打つたばかりであつた。然し最うすつかり暗くなつて仕舞ひました。尤も今日は終日陽が照りませんでした。——で

nuts=a great pleasure: a fine treat. 會心事、大好物。

9. of all the good days in the year 一年中での目出度い日の中で。

Christmas Eve. 降誕祭の前夜。十二月廿四日の晩のこと。Eve. (祭日などの) 前夜。New Year's Eve. 大晦日。

light=full of light; bright.

flaring in the windows of the neighboring offices, like ruddy smears upon the palpable brown air. The fog came pouring in at every chink and keyhole, and was so dense without, that although the court was of the narrowest, the houses opposite were mere phantoms. To see the dingy cloud come drooping down, obscuring everything, one might have thought that Nature lived hard by and was brewing on a large scale.

10) The door of Scrooge's counting-house was open that he might keep his eye upon his clerk, who in a dismal little cell beyond, a sort of tank, was copying letters. Scrooge had a very small fire, but the clerk's fire was so very much smaller that it looked like one coal. But he couldn't replenish it, for Scrooge kept the coal-box in his own room; and so surely as the clerk came in with the shovel, the master predicted that it would be necessary for them to part. Wherefore the clerk put on his white comforter, and tried to warm himself at the candle; in which effort, not being a man of a strong imagination, he failed.

11) "A merry Christmas, uncle! God save you!" cried a cheerful voice. It was the voice of Scrooge's nephew, who came upon him so quickly that this was the first intimation he had of his approach.

palpable=perceptible by the touch. 觸知し得可き。

to see=when seeing.

Nature 造化の神。

hard by=near by (*hard by* the bridge 橋の直き近くに。)

brewing on a large scale 大仕掛に酒を醸して居る。

10. **that he might keep his eye upon his clerk** 番頭の見張が出来る様に。

replenish=fill up again つぐ。

so surely as=whenever 何時も乾度。

necessary for them to part 彼等(スクルウヂと番頭)にとって

cheerful
cheerful
cheerful

近所の店々の窓には蠟燭の火がちらほらともつて、肌さわりの覺ゆる黄褐色の空中に赤い汚點の様に見えました。霧は扉の隙間からも鍵穴からも流れ込んで来るし、外は非常に霧深く、此邊の路地は一等狭いのだけれど、向側の家々はまるで幻の様に見えました。薄黒い雲が垂れ下つて萬物を蔽ひ隠して居ると、造化の神が近くに住んで、大仕掛に酒を醸して居るのではないかと言ふ様なことが想はれました。

10. スクルウヂの帳場の扉は開け放しにして、向ふの槽みた様な、陰氣な狭い部屋で、番頭が書きものをして居るのが見張る様にしてありました。スクルウヂの處には極く僅か乍ら少々の火があつたが、番頭の處の火はそれよりずつと少くて、まるで一塊の石炭にしか見えなかつた。さればとて、番頭は火をつぐ譯には行かなかつた。と言ふのはスクルウヂは石炭箱をちやんと、自分の部屋に置いて居たので、番頭が火斗でも持つて行かうものなら、直ぐ主人から解雇を申し渡されること必定であつたからです。そこで番頭は白の襟巻を頸に捲きつけ蠟燭に手を翳して暖まらうともしてみたが、あまり想像力の強い人間でもなかつたので、それ位のことでは駄目でした。

11. 「叔父さん、クリスマスお目出度う！」といさましい聲がしました。それはスクルウヂの甥の聲でした。餘程だしぬけにやつて來たので、スクルウヂは斯く呼びかけられる迄は氣づかずになりました。

分れる必要がある。即ち、解雇しなければならぬの意。

in which effort さうしてみた處で(蠟燭の火で身體を暖めようとした處で。) a man of a strong imagination 想像力の強い人。(想像力が強かつたら、蠟燭の火斗でも温いストーブとも感じ得たであらうが、番頭にはさうは行かないの意。)

11 **A merry Christmas** 前に I wish you をつけてみるとよい。例 (I wish you) a happy New Year.

God save you! 幸を祈る言葉。

came upon him 突然にやつて來た。

"Bah!" said Scrooge, "Humbug!"

He had so heated himself with rapid walking in the fog and frost, this nephew of Scrooge's, that he was all in a glow; his face was ruddy and handsome; his eyes sparkled, and his breath smoked again.

12) "Christmas, a humbug, uncle!" said Scrooge's nephew. "You don't mean that, I am sure?"

"I do," said Scrooge. "Merry Christmas! What right have you to be merry? What reason have you to be merry? You're poor enough."

"Come, then," returned the nephew gayly. "What right have you to be dismal? What reason have you to be morose? You're rich enough."

Scrooge having no better answer ready on the spur of the moment, said "Bah!" again; and followed it up with "Humbug."

13) "Don't be cross, uncle!" said the nephew.

"What else can I be," returned the uncle, "when I live in such a world of fools as this? Merry Christmas! Out upon Merry Christmas! What's Christmas time to you but a time for paying bills without money; a time for finding yourself a year older, but not an hour richer; a time for balancing your books and having every item in 'em through

Bah! (bɑː) = pooh! nonsense! 何だい! とか、篋棒め! とか言つた非常に輕蔑を表はす言葉。

Humbug! 何んだ詰らん。何んだ馬鹿々々しい。

to be (all) in a glow (運動などして) 顔を眞赤にして居る。

smoked again again は烈しくの意 (即ハツハツと繰返せる様を表はす。)

12. **You don't mean that, I am sure?** まさか、さう仰有つたんぢやないでせうね?

You're poor enough 一文なしの癖に。

morose (mɔːrɒs) 不愛想な、不機嫌な。

「何だい! 馬鹿らしい!」と、スクルウヂは言ひました。

霧やら霜やらの中を急ぎ足で來たのでスクルウヂの甥は餘程温まつたものと見えて、ほてつた顔は、赤々と、美しく、眼は輝き、はつはつと息烟を吐いてゐました。

12. 「叔父さん、クリスマスが馬鹿らしいんですつて! まさか、本気で仰有つたんぢや無いのでせうね?」と、スクルウヂの甥は言ひました。

「馬鹿らしいとも、クリスマスお目出度う! なんて、お前等が何んで目出度されるんだい? 目出度される理由が何處にあるんだい? 貧乏人の癖に。」

「ぢや、うかがいますがね、叔父さんは何んで不景氣な顔がされるんですか? 苦蟲をつぶして居る理由が何處にありますか? お金持の癖に。」と甥は元氣よく言ひ返しました。

スクルウヂは差當り、巧い返事が出なかつたので、もう一度「何んだい!」と繰返し、その後から「馬鹿々々しい」と、二の句をつぎました。

13. 「叔父さん、そんなに怒るものぢやありませんよ、」と、甥は言ひました。

すると、叔父は其に對して言ひました。「怒らねえで居られるものかい! こんな馬鹿者ぞろひの世の中に住んで居りや。クリスマスお目出度うだつて! 何がクリスマスだい! お前等にとつては、クリスマスと言ふ時は、掛取が來ても拂ふ金はなし、といふ時ぢやねいか、年齢ばかりは一つとつても、一時も金持にはならねえ時ぢやないか、帳簿の差引勘定してみれや丸

on the spur of the moment = impromptu 即座に、差當つて、(spur 拍車、(又此の意より) 刺戟)。

followed it up with "Humbug" it は Bah! をさす。「馬鹿々々しい」と二の句をついだ。

13. **out upon** (クリスマスが目出度いなどは) 馬鹿々々しい、糞でも食への意。

What's.....but..... に過ぎぬぢやないか。

balancing your books 帳簿の差引勘定する。

item ('aitem) 各項目の締高。

in 'em = in them = in your books.

a round dozen of months presented dead against you? If I could work my will," said Scrooge, indignantly, "every idiot who goes about with 'Merry Christmas' on his lips, should be boiled with his own pudding, and buried with a stake of holly through his heart. He should!"

14) "Uncle!" pleaded the nephew.

"Nephew!" returned the uncle, sternly, "keep Christmas in your own way, and let me keep it in mine."

"Keep it!" repeated Scrooge's nephew. "But you don't keep it."

"Let me leave it alone, then," said Scrooge. "Much good may it do you! Much good it has ever done you!"

15) "There are many things from which I might have derived good, by which I have not profited, I dare say," returned the nephew. "Christmas among the rest. But I am sure I have always thought of Christmas time, when it has come round—apart from the veneration due to its sacred name and origin if anything belonging to it can be apart from that—as a good time; a kind, forgiving, charitable, pleasant

a round dozen of months=the whole year. 一年十二箇月。

dead against=decidedly against; entirely against 全々消失せる。全々損失になつてゐる。

work my will=do as I like. 自分勝手にする。

his own pudding 奴の食ふプデン、プデンは肉や果物に飽麵の皮を掛けて焼いた菓子、或ひは、小麦粉に牛乳卵子等を混ぜて作つた蒸團子の類。七面鳥と共にクリスマスにはなくてならぬもの。

holly 柵(ひひらぎ)クリスマスの飾に用ふ。

stake 柵。(殊に火炙りにする罪人を縛る柵。)

He should 是非さうしてやる。

14. **in your own way** お前自身のやり方で。

Keep it! (クリスマスな) 祝ひますつて!

Much good may it do you 其は(クリスマス) 餘程御利益があるのだらうな。(裏面には何だ何のよい事もない辯に、と言ふ反對の意味を含んだ皮肉な言ひ方。)

一年十二ヶ月中の何れを締めても、残るは借金許りといふ時ぢやないか、俺の勝手になるものなら、」と、スクルウヂは、腹立たしげに言ひました。「クリスマスお目出度うだなど言つて歩き廻る奴等は、奴等の食ふプデンと一緒に煮た上で、胸を貫き通して柵(ひひらぎ)の杖ごと埋め込んでやるんだ。是非さうしてやるんだ!」

14. 「叔父さん!」と甥は抗論しかけました。

すると叔父は非常な權幕で言ひました。「やい甥の野郎、お前はお前の好きにクリスマスをするならしろ、俺は俺でやるんだ。」

「やるんですつて!」とスクルウヂの甥は鸚鵡返しに言ひました。「だが貴方がなすつたことはないぢやありませんか。」

「それならそれで、ほつておけ、お前にはクリスマスが餘つ程御利益があるのだらうよ!今までも随分御爲めになつてるのだからね!」とスクルウヂが言ひました。

15. 「お金は儲からなくつたつて、爲になることは澤山ありませうからね。」と、甥は言ひ返しました。「クリスマスもそれですよ、ですから、クリスマスが来る度に、結構な時だと思はないこととてありませんよ。——その神聖な名前と由來とから起る尊敬の念を離れて考へても、まあ假りに離すことが出来るとしてですね。——やはり、結構な時ですよ。人々は親切に

15. **derive good from (anything)** (何かより) 利益を得る(精神的に)。

profit 利する、儲ける。(物質的に)

among the rest=being one of them クリスマスはその一つだ。

the veneration due to.origin クリスマスの神聖な名と由來に基く處の尊敬の念。

if anything.that クリスマスの際に起す尊敬の念は、或は其名前や由來より離し得ぬかも知れぬが、若し離し得るとすれば。

time, the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys. And therefore, uncle, though it has never put a scrap of gold or silver in my pocket, I believe that it has done me good, and will do me good; and I say, God bless it!"

16) The clerk in the tank involuntarily applauded. Becoming immediately sensible of the impropriety, he poked the fire, and extinguished the last frail spark for ever.

"Let me hear another sound from you," said Scrooge, "and you'll keep your Christmas by losing your situation! You're quite a powerful speaker, sir," he added, turning to his nephew. "I wonder you don't go into Parliament."

"Don't be angry, uncle. Come! Dine with us to-morrow."

17) Scrooge said that he would see him—yes, indeed he did. He went the whole length of the expression, and said that he would see him in that extremity first.

"But why?" cried Scrooge's nephew. "Why?"

by one consent 異口同音に、一つ心に。

bound=destined (何處)行きの。(何處行などと)豫定せる。運命を定めたる。

God bless it!=May God bless Christmas time!

16. **sensible of**に感づく。

Let me hear another sound from you も一度言つて見ろ。

you'll keep.....situation クリスマスするならせよ、お首だから。(お前はお前の地位(即番頭の職)を失ふ事になつて、クリスマスが祝へる。)

I wonder.....Parliament 何うして、議員様に出ないのだい。(皮肉な言ひ方である。Parliament 英國の國會、米國のは Congress; 日本のは Diet)。

17. **Scrooge said that he would see him**——=Scrooge said "I will see you ——" —— は damned を略したるもの、damn は呪詛

し、罪を恕してやり、窮乏してゐるものは助けてやる、愉快な時なんですよ。男も女も皆んな一つの心に、隔て勝な胸を開いて、眼下の者だつて、決して、別な旅路を行く生違ひの畜生ぢやなくて、つまりは、同じ墓の下へ行く道連だと思ふらしいのは、一年と言ふ長い月日の内でも、唯此時だけだと思ひます。それですから、叔父さん、私はクリスマスに鑑一文儲けた譯ぢやないですが、この時節は私の爲めになつて居るのです。また、これから後々も御利益があるだらうと信じて居ります。そこで私は申しますよ、お目出度う！」

16. その槽の中に居た番頭は思はず知らず喝采はしたものの、直ぐと、これはよろしくないことをしたと感づいて、火をつきまはし、蛙ほどの火種をたうとう消して終ひました。

「もう一度言つて見ろ、クリスマスが祝ひたけりや、祝ふがいに、その代りお拂箱にしてやるから。」とスクルウヂは言つて、今度は甥の方に向き直つて、續けた。「お前さんは全くお口達者なお方だ。何うして、議員様にならないのだい。」

「叔父さん、お腹を立てちや可けませんよ。どうです明日食事にはいらつしやいませんか？」

17. 何んで行くもんか——！とスクルウヂは言ひました。全くさう言ひました。彼は言ふだけ言つて終ひました。なんで行くものか、それより地獄でもお目に掛からうかいと。

「だが何故？何故です？」とスクルウヂの甥は言ひました。

の語故、d——又は唯、——とすることが往々ある。即、スクルウヂは彼にくたばつて仕舞へと言つた、の意。

indeed he did まさしくさう言つた。

He went.....the expression スクルウヂは —— の處即 damned と言ふ言葉迄も全部言つて終つた。

he would see him in that extremity first (甥の家へ行くよりは) 先づ地獄でも過はう。即決してお前の家へなんぞ行くものかの意。

"Why did you get married?" said Scrooge.

"Because I fell in love."

"Because you fell in love!" growled Scrooge, as if that were the only one thing in the world more ridiculous than a merry Christmas. "Good-afternoon!"

"Nay, uncle, but you never came to see me before that happened. Why give it as a reason for not coming now?"

"Good-afternoon," said Scrooge.

18) "I want nothing from you; I ask nothing of you; why cannot we be friends?"

"Good-afternoon," said Scrooge.

"I am sorry, with all my heart, to find you so resolute. We have never had any quarrel, to which I have been a party. But I have made the trial in homage to Christmas, and I'll keep my Christmas humor to the last. So A Merry Christmas, uncle!"

"Good-afternoon!" said Scrooge.

"And a Happy New Year!"

"Good-afternoon!" said Scrooge.

19) His nephew left the room without an angry word, notwithstanding. He stopped at the outer door to bestow the greetings of the season on the clerk, who, cold as he

as if that の that は惚れて結婚したこと。

before that happened 結婚しない中。

Good-afternoon! (お歸りと言はんばかり) さよなら。

18. with all my heart 衷心より。

to which.....a party=in which I have been concerned. 私が相手になつてゐる。

trial=trying to be friends.

Christmas humour クリスマス気分。

humour=mood.

to the last 何處迄も。

and a Happy New Year. クリスマス祝ひの言葉と一緒に新年の

「何故お前は女房なんでもつたんだい？」とスクルウヂは言つた。

「そりや惚れちやつたからですよ。」

「惚れたからだつて！」と、スクルウヂは、夫が、クリスマス祝ひに輪を掛けた天下一品の痴言と言はんばかりに怒つて、「さよなら、」と言つた。

「いや、然し、叔父さん、貴方は私が結婚しない内でも御出下すつたことは未だないぢやありませんか、してみれば、今それが爲に御出になれないと言ふ譯はないぢやありませんか？」

「さよならだよ」とスクルウヂは言ひました。

18. 「貴方にお強請りしようと言ふのでもなし、願ひするのでもありません。何故御互に打解けられないのですかね？」

「さよならだよ！」とスクルウヂは言つた。

「さうまで意地を御張りになつちや全く困つて終ひますね。今迄に一度だつて私が相手になつて喧嘩などした事はありません。だが私はクリスマスをお祝ひしようと思つて御招きしてゐるのですから、何處までもクリスマス気分は失ひ度くありません。そこで叔父さん、クリスマスお目出度う御座います！」

「さよならだよ！」とスクルウヂは言つた。

「それから新年お目出度う御座います！」

「さよならだよ！」とスクルウヂは言つた。

19. これ位言はれても、彼の甥は一言も怒らずに部屋を出て行きました。出口の處で立止つて、番頭にクリスマスの挨拶をすると、寒さには震へてゐたものの、丁寧に挨拶を返したと

祝辭を述べるのが習慣。

19. cold as he was=though he was cold. (番頭は身體こそ寒さで冷えてても心は温かだつたが Scrooge の方は火で温めてゐても心は冷たかつたと皮肉に對照した處に面白みがある)。

was, was warmer than Scrooge; for he returned them cordially.

"There's another fellow," muttered Scrooge; who overheard him: "my clerk, with fifteen shillings a-week, and a wife and family, talking about a merry Christmas. I'll retire to Bedlam."

20) This lunatic, in letting Scrooge's nephew out, had let two other people in. They were portly gentleman, pleasant to behold, and now stood, with their hats off, in Scrooge's office. They had books and papers in their hands, and bowed to him.

"Scrooge and Marley's, I believe," said one of the gentlemen, referring to his list. "Have I the pleasure of addressing Mr. Scrooge, or Mr. Marley?"

"Mr. Marley has been dead these seven years," Scrooge replied. "He died seven years ago, this very night."

"We have no doubt his liberality is well represented by his surviving partner," said the gentleman, presenting his credentials.

21) It certainly was; for they had been two kindred spirits. At the ominous word "liberality," Scrooge frowned, and shook his head, and handed the credentials back.

Bedlam=madhouse. 元來 Bedlam は Bethlem or Bethlehem の轉訛。London の Bethlehem; St. Mary 修道院 (1247 創立) は 1330 年より病院として用ひられ、1403 年よりは Madhouse として用ひられた。それ以來 Bedlam は Madhouse と同じ意味に用ひられてる。現今では通常 uproar; a state of wild confusion を意味する。(スクルウチは皆んなが Christmas を祝ふのを馬鹿らしく思ひ、いつそ Bedlam へでも引込んだ方がましだと言つたのだ)。

20. in letting Scrooge's nephew out スクルウチの甥を送り出して。

referring to his list 名簿を繰り乍ら。

言ふ風で、スクルウチよりは遙かに温かな心をもつて居たのでありました。

此を聞きつけたスクルウチはぶつぶつ獨言を言ひました。「あそこにもお仲間が居やがる、番頭、一週十五志で、女房も子供もある癖に、クリスマスお目出度うだなんどと言つて居やがる、いつそ癲狂院にでも引込たくならあ。」

20. 此癲狂番頭はスクルウチの甥を送り出して、入違ひに二人の人を案内して入つて來た。二人はでつぷりと人品があつて、見るから感じのよい紳士で、帽子をとつて、早や、スクルウチの帳場に立つてゐました。彼等は帳簿と紙とを手にして、スクルウチにお辭儀をしました。

一人の紳士は名簿を繰り乍ら、「こちらさまは、確かスクルウチ・マアレイ商會で御座いましたね、失禮ですが、貴方様が、スクルウチさんですか、それともマアレイさんで御座いますか？」

「マアレイは死んで七年になりますよ、丁度七年前の今夜です。」

「その方がおなくなりになつても後にお残りになつたお方が屹度同じ様に慈善に御賛成して下さいませうね？」とその紳士は言つて寄附帳を出しました。

21. 全くその通り。スクルウチとマアレイとは似たり寄つたりの人間だつたからね。「慈善」と言ふ不吉な言葉を聞いてスクルウチは顔を顰め、頭を振つて、その寄附帳を突き返しました。

Have I the pleasure of addressing.....? 失禮で御座いますが...
...さんで御座いますか?

this very night 丁度今夜。

his liberality is.....partner.

"liberality=freeness in giving よく施すこと、マアレイさんは快く出して下さいましたが生残つた貴方もやつぱり同じ様だと信じます。

21. **two kindred** 好一對の。

“At this festive season of the year, Mr. Scrooge,” said the gentleman, taking up a pen, “it is more than usually desirable that we should make some slight provision for the Poor and destitute, who suffer greatly at the present time. Many thousands are in want of common necessities; hundreds of thousands are in want of common comforts, sir.”

22) “Are there no prisons?” asked Scrooge.

“Plenty of prisons,” said the gentleman, laying down the pen again.

“And the Union workhouses?” demanded Scrooge. “Are they still in operation?”

“They are. Still,” returned the gentleman, “I wish I could say they were not.”

“The Treadmill and the Poor Law are in full vigor, then?” said Scrooge.

“Both very busy, sir.”

“Oh! I was afraid, from what you said at first, that something had occurred to stop them in their useful course,” said Scrooge. “I’m very glad to hear it.”

23) “Under the impression that they scarcely furnish Christian cheer of mind or body to the multitude,” returned

this festive season of the year=Christmas tide. 十二月二十四日から一月六日まで。festive 祝祭の、喜ばしき。

who=for they.

at the present time 差し當り。

common necessities 普通の必需品。

common comforts 普通の楽しみ。

22. **Are there no prisons** そんなに困つてゐるものは獄舎へぶち込めばよからうとの意、如何にスクルウヂが冷酷であるかを表はす。

Union workhouse 聯合貧民救済所、共同授産所。教區の貧困者救済の爲めに設けられたもの。1843年の貧民法修正案で二つ以上の教區で一つの Union を作り、貧民法委員會が處理することとなつた。

紳士はペンを取りながら言ひました。「スクルウヂさん、一年中でも此お祭時季には、さし當り非常に難儀してゐるのですから貧乏人や困窮者へは、平素よりも特に、幾分の施しを致しては遣したう御座います。衣食にも困つてゐるものが何千人とありますし、人並の楽しみも出来ないものは何十萬と御座いますからね、貴方。」

22. 「牢屋は無いのですか？」とスクルウヂは尋ねました。

「牢屋は澤山あります。」その紳士はペンをまた擱きながら言つた。

「それから聯合養育院は？やつぱりやつて居りますか？」とスクルウヂは尋ねました。

「やつてゐます、やはり。がそんなものはないと申し上げられる様になればと思つてゐます。」と紳士は答へました。

「それぢや懲役や貧民法もよく勵行されてゐますな？」とスクルウヂは言つた。

「どちらも仲々いそがしいのです、貴方。」

「お！氣が氣でなかつた。最初の御話ぢや、何か故障が起つて、大事な機關が止つたかと思つた。それを聞いて安心、安心。」とスクルウヂは言つた。

23. 「そんなものでは到底、大勢のものへ、クリスチャンとしての心身の糧をあてがふことは出来ないと感じまして、」とその紳士は答へました。「吾々有志のものが、寄附を募り、貧

Treadmill 踏車（昔英國の獄舎では囚人殊に、乞食や浮浪人には懲罰として、踏車を用ひた。そこで此處では懲役の意）。

Poor Law 貧民法、（英國の貧民法はその起源古く、エリザベス朝に一大改革があり、現今の該法の基礎が出来、其後も色々變つたが1834年の今日に及んでゐる）。

are in full vigour 大に行はれてゐる。

course=work.

the gentleman, "a few of us are endeavoring to raise a fund to buy the Poor some meat and drink, and means of warmth. We choose this time, because it is a time, of all others, when Want is keenly felt, and Abundance rejoices. What shall I put you down for?"

"Nothing!" Scrooge replied.

"You wish to be anonymous?"

"I wish to be left alone," said Scrooge. "Since you ask me what I wish, gentlemen, that is my answer. I don't make merry myself at Christmas and I can't afford to make idle people merry. I help to support the establishments I have mentioned—they cost enough; and those who are badly off must go there."

24) "Many can't go there; and many would rather die."

"If they would rather die," said Scrooge, "they had better do it, and decrease the surplus population. Besides—excuse me—I don't know that." 11-29 ST

"But you might know it," observed the gentleman.

"It's not my business," Scrooge returned. "It's enough for a man to understand his own business, and not to interfere with other people's. Mine occupies me constantly. Good-afternoon, gentlemen!"

Seeing clearly that it would be useless to pursue their

23. **means of warmth** 寒さを凌ぐ材料、即薪炭の類。

Want is keenly felt クリスマスの時は日本の大晦日の様に大支拂時だし、お祝もし度いので平素よりは特に貧乏が身に泌みて辛い。

What shall I put you down for? 貴方の御寄附は幾らと附けませうか。what=what sum of money. put down=write down.

nothing 何も附けないで貰ひ度い。

I wish to be left alone 捨てゝおいて貰ひ度い。

make merry myself 楽しむ。

I can't afford=I am not rich enough.

民の爲に飲食物や寒さを凌ぐ物を買つてやりたいと、盡力致してゐるので御座います。そして、殊にこの時節を選びましたのは、窮乏が他の何時よりもしみじみと辛く感ぜられ、豊かなことが喜ばしい時だからで御座います。それでこちら様は如何程と書いて置きませうか？」

「御無用です！」とスクルウヂは答へた。

「では匿名を御望みですか？」

「仲間外れを望みます。」とスクルウヂは言つた。「私の望みと聞かれたからさう御答へしたのです。私だつて、クリスマスだとして、別にお祝もしないのに世間の怠け者を祝はせる様なのんきなことはして居られません。今申した様な施設を維持する爲めには御助けしてゐますよ。それだけでも随分金がかゝるのだ、で貧乏で困るものはそこへ行かなければいけませんね。」

24. 「多勢のものが其處へ行く事は出来ませんし、それに多くの者はそんな處へ行く位なら死んだがましだと思ひます。」

「死んだがましと言ふなら、さうすればいゝさ、餘計な穀潰しが減つて、その上、——失禮ですが——そんなことがあるとは思ひませんのだ。」とスクルウヂは言ひました。

「ですが、御分りになる筈ですが」と紳士は意見を述べました。

「そんなことは私の仕事ぢやありません。」とスクルウヂは答へた。「人間は自分の仕事だけ知つて居ればそれで結構です。他人の仕事にまで干渉せんでも。私は自分の仕事で年中閑なしですよ。さよなら、皆様。」

こんな男を何時迄追求して居ても無駄だとすつかり見切をつ

badly off 困窮せる。(well off 裕福な)。

24. **would rather die than to go there** を入れてみるとよい。其處へ行く位なら死んだ方がましだと思ふ。

It's not my business 俺の仕事ぢやない。俺の知つた事ぢやない。

point, the gentlemen withdrew. Scrooge resumed his labors with an improved opinion of himself, and in a more facetious temper than was usual with him.

25) Meanwhile the fog and darkness thickened so, that people ran about with flaring links, proffering their services to go before horses in carriages, and conduct them on their way. The ancient tower of a church, whose gruff old bell was always peeping slyly down at Scrooge out of a gothic window in the wall, became invisible, and struck the hours and quarters in the clouds, with tremulous vibrations afterwards as if its teeth were chattering in its frozen head up there. The cold became intense. In the main street, at the corner of the court, some laborers were repairing the gas-pipes, and had lighted a great fire in a brazier, round which a party of ragged men and boys were gathered: warming their hands and winking their eyes before the blaze in rapture. The water-plug being left in solitude, its overflowings sullenly congealed, and turned to misanthropic ice. The brightness of the shops where holly sprigs and berries crackled in the lamp heat of the windows, made pale faces ruddy as they passed. Poulterers' and grocers' trades became a splendid joke: a glorious pageant, with which it was next to impossible to believe that such dull principles as bargain

with an improved opinion 一層得意になつて。

facetious temper 上機嫌。

25. **links** 往時街燈に代へて用ひられた松明。London が霧に包まれて眞闇になつた時は、Dickens の時代には炬火を手にして道案内する "link-boy" なるものが多く居たものだ。また、link は街燈代りにされたので、多くの家の戸の外には鐵の燭架が置かれて居たものと言ふ。

proffer their services 雇つて下さいと言ふ。

the hours and quarters 一時間毎及び十五分毎に。

けて、紳士達は出て行つた。スクルウヂは自ら一層得意になつて、何時になく上機嫌で又仕事を始めました。

25. その間に霧と闇とは非常に深くなつて來たので、燃え上る松明をもつた者共が、馬車馬の前について道案内するから雇つて貰ひ度いと駈け廻つて居た。教會の古い塔の壁についてゐるゴシック式の窓からはいつも其處の音の粗い古鐘が狭さうにスクルウヂを見下して居たが、今日はその古塔も見えなかつた、そして雲の中で時間時間に鳴つて居たが、その餘韻が後まで顫ふさまはまるで頭が凍えて齒をがちやがちやさせてゐる様であつた。寒さはますますひどくなつて來た。大通では路次角で瓦斯管を修繕してゐる工夫が幾人かゐて、火鉢に盛んに火を起してゐた。その周圍には大人やら小供やらの襤褸着達が寄つて來て、手を焙り、眼をぎよろつかせて、その焔の前で嬉しさうにしてゐた。水道栓はほりつばなしにされて、溢れた水は不平さうに凍り、いかにも冷たさうな氷になつて居た。店の處の柵の嫩枝や漿果は窓のランプの熱でバチバチ裂けて居り、その店の明りは路行く人の蒼白い顔を赤くして居た。烏屋と八百屋の商賣はすばらしく面白いものとなり、こんな華やかな裝飾と、商賣だ

as if its teeth.....frozen head? まるで頭が凍えて齒ががちやがちや顔ふ様な。

in rapture 有頂天になつて。

left=deserted.

Poulterers' and grocers' trades 馬屋や八百屋の店。(' が s の外にあるのは複數だから)。

pageant ['pædʒənt or 'peɪɡənt] 華かなる見世物、盛観。

next to impossible=almost impossible.

principles=businesses 仕事。

and sale had anything to do. The Lord Mayor, in the stronghold of the mighty Mansion House, gave orders to his fifty cooks and butlers to keep Christmas as a Lord Mayor's household should; and even the little tailor, whom he had fined five shillings on the previous Monday for being drunk and bloodthirsty in the streets, stirred up to-morrow's pudding in his garret, while his lean wife and the baby sallied out to buy the beef.

26) Foggier yet, and colder! Piercing, searching, biting cold. If the good Saint Dunstan had but nipped the Evil Spirit's nose with a touch of such weather as that, instead of using his familiar weapons, then indeed he would have roared to lusty purpose. The owner of one scant young nose, gnawed and mumbled by the hungry cold as bones are gnawed by dogs, stooped down at Scrooge's keyhole, to regale him with a Christmas carol: but at the first sound of

"God bless you merry gentleman!

May nothing you dismay!"

Scrooge seized the ruler with such energy of action, that the singer fled in terror, leaving the keyhole to the fog and even more congenial frost.

had anything to do 何か関係ある。

Mansion House 市長官邸。

The Lord Mayor 倫敦の市長様。(Lordの尊稱は大都市の市長のみにつける)。

fifty 澤山の意味に使つてゐる。

butlers 食事方、大膳職。

bloodthirsty 惨酷な。

26. Saint Dunstan 924 (或は5)年—988年、サクソンの一貴族として生れ、後にカンタベリーの大僧正となつた人。彼は學者、政治實、畫家、音樂家、としても秀れて居たし、又金細工も巧みであつた。故に金細工の守護者であつた。傳ふる處によると、王に追はれて、彼が Glanstonbury Abbey の近くの洞窟内で聖餐盃を造つてゐると、美人に化けた悪魔が窓から誘惑しようとしたので、彼は眞赤になつた火箸(familiar weapons とは此の事)、で悪魔の鼻をはさんだ、すると悪魔は

なんてなほだるつこい仕事が出来ると怪しまれる程であつた。倫敦市長閣下は宏大なる大官邸で、市長として恥かしからぬクリスマスの祝賀をする様に五十人の料理方に命じて居た。また、先週月曜日に酔つぱらつて往來で喧嘩した爲め、五志の科料に處せられた小さな仕立屋さへも、その屋根裏の部屋で明日のプデンの仕度にかかり、その瘦せつぼちの女房は赤ん坊を抱いて牛肉を買ひにかけ出して行つた。

26. 霧は殊に深く、寒さは益々烈しく、刺す様な抉る様な、噛む様な寒さ。若し、あの善良な聖ダンスタンが例の武器を用ひないで、この様な寒さで悪魔の鼻を摘みでもしたら、いかな悪魔もほんとに大勢あげて荒々しく喚くであらう。折から鹽をつまんだ様な鼻低の一人の小僧さんが、犬にしゃぶられた骨の様に、飢えた「寒さ」さにしゃぶられながら、クリスマスの歌の御馳走をしてやらうと、身をかがめて、スクルウヂの店の鍵穴をのぞき込んだ。然し、

「目出度やな、目出度やな、旦那よ！お家は大繁昌！」

と歌ひかけると、スクルウヂは大へんな權幕で簿記棒を掴んだので、その歌ひ手は震ひ上がり鍵穴を霧や、また、スクルウヂとは更に性のよく合つた霜の入り込む儘に捨て、逃げ出した。

最う決して来ないと言つて逃げた。この事あつて以來彼は鍛冶の守護神となり、右の手には常に火箸を持つてゐることとされてゐる。

Evil Spirit=Satan 悪魔。

familiar weapons 例の武器即、火箸をさす。

to lusty purpose=with vigorous effect. 荒々しく。

The owner of one scant young nose 年の行かぬ鹽をつまんだ様な鼻の持主。あるかないかわからぬ様に鼻の低い小僧さんのことを面白く表現したもの。

regale 御馳走する。(此處では喜ばす位の意味)。

May nothing you dismay=May nothing dismay you. 何の禍もない様に祈る。

ruler 簿記棒。

with such energy of action 大へんな權幕で。

27) At length the hour of shutting up the counting-house arrived. With an ill-will Scrooge dismounted from his stool, and tacitly admitted the fact to the expectant clerk in the Tank, who instantly snuffed his candle out, and put on his hat.

"You'll want all day to-morrow, I suppose?" said Scrooge.

"If quite convenient, sir."

"It's not convenient," said Scrooge, "and it's not fair. If I was to stop half-a-crown for it, you'd think yourself ill-used, I'll be bound?"

The clerk smiled faintly.

"And yet," said Scrooge, "you don't think me ill-used, when I pay a day's wages for no work."

28) The clerk observed that it was only once a year.

"A poor excuse for picking a man's pocket every twenty-fifth of December!" said Scrooge, buttoning his great-coat to the chin. "But I suppose you must have the whole day. Be here all the earlier next morning."

The clerk promised that he would: and Scrooge walked out with a growl. The office was closed in a twinkling, and the clerk, with the long ends of his white comforter dangling below his waist (for he boasted no great-coat), went down a slide on Cornhill, at the end of a lane of boys, twenty times,

27. with an ill-will = unwillingly いやいや乍ら、澁々。
tacitly admitted the fact 黙つてその事を許した。
half-a-crown 半クラウン。crown は英國の銀貨(五志)。邦貨の約二圓四五十錢に相當、王冠がついてゐるのでかく言ふ。

ill-used = ill-treated 虐待された。冷遇された。
I'll be bound = I am sure. 確に受合つて、(誓を表はす言葉)。

28. a poor excuse くだらぬ言譯。

great-coat = overcoat 外套。
Be here all the earlier next morning 次の朝はそれだけ早く出てくるんだぞ。the はそれ丈の意。即 demonstrative adverb.

27. その中に愈々帳場を閉ぢる時刻が來た。スクルウチはいやいや乍ら、腰掛を離れて、槽の中で待ち構へてゐた番頭に退出の許可を眼で知らせると、番頭は直ぐに蠟燭の火を消して、帽子を冠つた。

「明日は一日中暇が欲しいのだらうね？」とスクルウチは言つた。

「旦那、御都合さへつきますれば、」

「都合はよく無いさ、それに割に合ひやしない。其れで半クラウン差引いたら、虐待しやがると思ふだらう、屹度。」とスクルウチは言つた。

番頭は氣のなささうに微笑んだ。

「その癖、仕事せんでも一日の給金をやれば、貴様の方ぢや、俺が酷い目に遇つてるとは思はんのだらう。」とスクルウチは言つた。

28. それもたつた年に一度ですよと番頭は言つた。

「くだらん言ひ譯をしやがつて、いつも十二月の二十五日には人の懐中へ手を入れやがるんだな。」と外套のボタンを顎の處迄かけながらスクルウチは言つた。「だが、まる一日暇が欲しいんだらう。ぢや、その次の朝は特別早く出てくるんだぜ！」

番頭はさうしますと言つた。とスクルウチはぶつぶつ言ひ乍ら出て行つた。帳場は瞬く間に閉され、書記は(自慢しようにも外套なしで)白い襟卷の長い兩端を腰の下まで垂らし、クリスマスの前夜だと言ふので、コオンヒルでは子供達の後について

in a twinkling = in the twinkling of an eye. 瞬く間に、速に、直に。
for he boasted no great-coat 見せびらかす程の外套をもたぬので。
a slide = smooth, slippery surface. 滑り處。

Cornhill 倫敦の中央にあつて、鞍物の市が立つのでこの名が出來た。

lane = line. (人の列)。

in honor of its being Christmas Eve, and then ran home to Camden Town as hard as he could pelt, to play at blindman's-buff.

29) Scrooge took his melancholy dinner in his usual melancholy tavern; and having read all the newspapers, and beguiled the rest of the evening with his banker's-book, went home to bed. He lived in chambers which had once belonged to his deceased partner. They were a gloomy suite of rooms, in a lowering pile of building up a yard, where it had so little business to be, that one could scarcely help fancying it must have run there when it was a young house, playing at hide-and-peek with other houses, and forgotten the way out again. It was old enough now, and dreary enough, for nobody lived in it but Scrooge, the other rooms being all let out as offices. The yard was so dark that even Scrooge, who knew its every stone, was fain to grope with his hands. The fog and frost so hung about the black old gateway of the house, that it seemed as if the Genius of the Weather sat in mournful meditation on the threshold.

30) Now, it is a fact, that there was nothing at all particular about the knocker on the door, except that it was very large. It is also a fact, that Scrooge had seen it, night and morning, during his whole residence in that place; also that

in honor of を祝して。

Camden Town 今では倫敦市の一部となつてゐるが、19世紀年頃迄は効外の Regent Park の東にある一小村であつた。Dickens の一家は此處に住んで居た事がある。

pelt=move on rapidly; hurry on. いそぎ走る。

29. **usual melancholy tavern** いつも行く不景氣な居酒屋。

beguile [bi'gail] 憂さを晴らす。

banker's-book 銀行の通帳。

his deceased partner=Marley.

suite of rooms 続きの部屋。

て、二十遍も滑りつこをし、それから、鬼ゴツコをして遊ぶと言ふので宙を飛んで、カムデンの吾家へと駈けて行きました。

29. スクルウヂはいつも行きつけの不景氣な飯屋でいつもの不景氣な夕飯をすまし、有りつたけの新聞を積み、後は退屈凌ぎに銀行の通帳を出して見てから、吾住居へと寝に歸りました。彼の住んでた住居と言ふのは以前彼の亡くなつた仲間がもつて居たもので、とある中庭に建つてゐる屈んだ様に低い建物の一部分を占めてゐる陰氣な部屋で、一體こんな處にあつても何んにもならぬ様な建物で、これはどうしても、此の家がまだ小供だつた時に、他の家達と隠れんほでもして、其處へ走り込んだなり、出口を忘れ、それなりになつてゐるに違ひないと想はれる様な有様であつた。今ではもう随分年寄になつて全く薄氣味悪い程だ。何しろ其の内に住むものと言つてはスクルウヂだけで、他の部屋は皆んな事務所^{オフィス}に貸してあるのですから。で庭の暗いことと言つたら、一一石の所在^{ありか}さへ知つてゐたスクルウヂでさへ、手さぐりして歩かなければならぬと言つた位。霧と霜とが此の家の黒く煤けた古い門口にひどく垂れ込めて居たので、宛然天氣を司る神様が、敷居の上に腰を下して悲しさうにしてゐるのではないかと想はれるのであります。

30. さて、實際の處、この家の戸口の扉^{ノッカー}槌は別段變つた所は少しもなかつたが、唯其は非常に大きい奴でありました。また實際の處、スクルウヂは其處で住まつてからと言ふものは朝も晩も見慣れて居たのであつた。のみならず、此スクルウヂは、

so little business to be 如何にも必要なさうな、なんにもならぬので。

was fain to grope with his hands=was obliged to grope with his hands. 手さぐりをしなければならなかつた。

the Genius of the Weather 天候を司る神。

30. **knocker** 訪問者が案内を乞ふ扉の鈴代りの戸槌。

Scrooge had as little of what is called fancy about him as any man in the city of London, even including—which is a bold word—the corporation, aldermen, and livery. Let it also be borne in mind that Scrooge had not bestowed one thought on Marley, since his last mention of his seven-years' dead partner that afternoon. And then let any man explain to me, if he can, how it happened that Scrooge, having his key in the lock of the door, saw in the knocker, without its undergoing any intermediate process of change—not a knocker, but Marley's face.

31) Marley's face. It was not in impenetrable shadow as the other objects in the yard were, but had a dismal light about it, like a bad lobster in a dark cellar. It was not angry or ferocious, but looked at Scrooge as Marley used to look: with ghostly spectacles turned up on its ghostly forehead. The hair was curiously stirred, as if by breath or hot-air; and, though the eyes were wide open, they were perfectly motionless. That, and its livid color, made it horrible; but its horror seemed to be in spite of the face and beyond its control, rather than a part of its own expression.

32) As Scrooge looked fixedly at this phenomenon, it was a knocker again.

what is called fancy 妄想を言つたもの、(スクルウチは幽霊と言つた様な妄想を描ける人ではなかつたの意)。

a bold word 言ひ過ぎた言葉、大膽な言。

the corporation 法人。

livery=liveryman 倫敦市長選挙の特権ある倫敦自由民、即、公民。

not bestow one thought ちつとも心にとめぬ。

without its undergoing any intermediate process of change 段々變るのではなく。

31. **impenetrable shadow** 見透し難き影。

like a bad lobster 腐敗した海老は暗中で光を放つ故にそれにたと

空想だなんて言ふことを少しでも描く男ではなく、其の點は倫敦の市中の何人にも——大膽な言ひ分ではあるが——法人にだつて、市参事會員にだつて、それから公民にだつて劣りはしなかつたのです。またスクルウチは、マアレイは七年前に死んだのだと今日の午後言つたきりで其以來少しも彼のことは念頭に置いて居なかつたと言ふことを憶ひ出して戴き度い。處が、スクルウチが扉の錠前に鍵をさし込んでると、扉槌は何時の間やら扉槌ではなくて、マアレイの顔になつて見えたと言ふのは一體全體何うした事か、お解りの方があれば説明を聞かして戴き度いものだ。

31. マアレイの顔。夫は庭にある他の物の様に、暗くて、見透し難き影ではなくて、暗い窠の中の腐つた海老の様に、その周圍に氣味の悪い光をもつてゐた。その顔は別に怒つてゐるでもなく、又、兇猛なのでもなくて、ありし日のマアレイそのまゝの顔附で、薄氣味の悪い眼鏡をのせて、スクルウチの方を見てゐた。その頭髮は微風か熱氣でも受けた様に奇妙に逆立ち、二つの眼は大きく開いてゐたが、更に動きもしなかつた。それに顔は蒼白い色をしてゐたので顔は物凄くなつてゐた、がその物凄さは顔そのものの表現からぢやなくて、むしろ、その顔とは何の関係もない處から現はれてゐる様であつた。

32. スクルウチはじつとこの變化を視てると、それはまた扉槌になつて終つた。

へたもの。

ghostly spectacles 氣味の悪い眼鏡 (Marley は生前眼鏡を掛けて居た)。

breath=breeze.

hot air 熱氣 (は例へば火鉢の上の氣の様に輕微の物を動かす、亡靈のものすごさを暗示してゐる)。

That その前に言つてゐること、即、眼はげつちり開いてゐたがちつとも動かなかつたことをさす。

beyond its control 顔ではどうすることも出来ぬ。

32. **Phenomenon**=strange and uncommon appearance 變化。

To say that he was not startled, or that his blood was not conscious of a terrible sensation to which it had been a stranger from infancy, would be untrue. But he put his hand upon the key he had relinquished, turned it sturdily, walked in, and lighted his candle.

33) He *did* pause, with a moment's irresolution, before he shut the door; and he *did* look cautiously behind at first, as if he half-expected to be terrified with the sight of Marley's pigtail sticking out into the hall. But there was nothing on the back of the door, except the screws and nuts that held the knocker on, so he said "Pooh, pooh!" and closed it with a bang.

34) The sound resounded through the house like thunder. Every room above, and every cask in the wine-merchant's cellars below, appeared to have a separate peal of echoes of its own. Scrooge was not a man to be frightened by echoes. He fastened the door and walked across the hall, and up the stairs; slowly too; trimming his candle as he went.

35) You may talk vaguely about driving a coach-and-six up a good old flight of stairs, or through a bad young Act of Parliament; but I mean to say you might have got a hearse up that staircase, and taken it broadwise, with the splinter-bar towards the wall and the door towards the balustrades: and done it easy. There was plenty of width for that, and room

relinquished=let go 手放した。

33. **did** 意味を強める *did*.

pigtail 髷、往時は英國でも支那のを少し短かくした様な髷を後にたれてゐた。それは丁度豚の尾つぼの様であつた。

sticking out=revealing itself 姿を現して。

Pooh! 何だ馬鹿々々しい。(輕蔑の言葉)。

34. **wine-merchant's cellars below** 下の酒商人の窖。(Scroogeの住家は酒屋で地下室には酒を貯藏して居た)。

35. **You may talk vaguely** 漠然と言へる。

彼がそれにびくともしなかつたとか、又は彼は幼い時から恐いこと知らずであつただけに平氣であつたと言ふなら、そりや嘘であらう。が然し、彼は手放してゐた鍵にまた手をかけて、しつかりそれをねぢて、内へはいり蠟燭に火をつけました。

33. 彼は扉を閉める前に、流石に一寸躊躇しました。そして、先づ戸の後を氣をつけてよく視ました。その様は恰もマアレイの髷髪がそつと廣間に姿を現はして驚かしはしないかと半ば豫期してゐる様であつた。然し戸の後には扉^{ノブ}を止めてあるねぢと、ねぢどめの外には何にもなかつたので、「何だ馬鹿々々しい」と言つて、ばたんと扉を閉めました。

34. その音は雷の様に家中に響き渡つた。階上の部屋部屋も、下の酒屋の酒食にある樽も皆各々に別々の反響をして居る様に思はれた。スクルウチは反響に驚く様な男ぢやなかつた。彼は固く戸を閉め、廣い廊下を通つて二階へ上つた。しかも蠟燭の心をとりながらそろそろ上つて行つた。

35. 六頭立の馬車を驅して餘程古びた階段を上ると言はうか、或は、新らしく國會を通過した惡法令を潜り抜けるとでも言はうか、斯う言つても漠然とした言ひ様だが、私の言はうとしてゐるのは、棺車を横倒しにして、横棒を壁に向け、棺の戸を欄干の方に向けて、而も樂々と引き上げられると言ふのです。

drive a coach-and-six up a good old flight of stairs 六頭立の馬車を御して可なり古びた階段を上る。(階段の廣いことを言ひ表はしてゐる)。

drive a coach-and-six through a bad young Act of Parliament 六頭立の馬車を御して、新に國會を通過した惡法令を潜る。(法律の網に大きなすきがあるので平氣で潜るの意)。此言葉は諺の様に、よく用ひられる。尙ほ *good old* と *bad young* は對句になつて居る。

splinter-bar 馬車の横棒。

to spare; which is perhaps the reason why Scrooge thought he saw a locomotive hearse going on before him in the gloom. Half-a-dozen gas-lamps out of the street wouldn't have lighted the entry too well, so you may suppose that it was pretty dark with Scrooge's dip.

36) Up Scrooge went, not caring a button for that. Darkness is cheap, and Scrooge liked it. But before he shut his heavy door, he walked through his rooms to see that all was right. He had just enough recollection of the face to desire to do that.

37) Sitting-room, bed-room, lumber-room. All as they should be. Nobody under the table, nobody under the sofa; a small fire in the grate; spoon and basin ready; and the little saucepan of gruel (Scrooge had a cold in his head) upon the hob. Nobody under the bed; nobody in the closet, nobody in his dressing-gown, which was hanging up in a suspicious attitude against the wall. Lumber-room as usual. Old fire-guard, old shoes, two fish-baskets, washing-stand on three legs, and a poker.

38) Quite satisfied, he closed his door, and locked himself in; double-locked himself in, which was not his custom. Thus secured against surprise, he took off his cravat; put on his dressing-gown and slippers, and his night-cap; and sat down before the fire to take his gruel.

locomotive hearse=moving hearse. 機関車つきの棺車、(誇大した言ひ方)。

dip=candle.

Up Scrooge went は **Scrooge went up** を強めた言ひ方。

not caring a button for that ちつともそんな事に構はず。

Darkness is cheap (暗いなりで灯をつけなければ安上りだ)。

recollection of the face その顔の記憶、(Marley の顔のこと)。

37. **grate** (石炭を焚く) 鐵格子 (より fireplace 即ち) 暖爐。

それ程充分に廣くて、尙餘裕があつた。スクルウチは、暗い中を、機關車つきの棺車が彼の前を行くのを見たと思つたのは恐らく此爲めであらう。往來の六箇の瓦斯燈も、入口を充分に照らす力がなかつたのですから、スクルウチの蠟燭では可なり暗かつたことが想像されませう。

36. スクルウチは、そんな事にはちつとも構はずに上つて行つた。暗いのは安あがりだから、スクルウチは好いてゐたのだ。然し、彼は重い扉を閉ぢる前に、何も變つたことはないかと部屋部屋を歩き廻つてみた。そんなことを彼にさせたのはやつぱりさつきの顔がはつきり憶ひ出されたからであつた。

37. 居間、寢室、物置部屋、全く何の變りもなかつた。テーブルの下にもソファの下にも誰も居なかつた。暖爐には少しばかりの火があつた。サヂも皿も用意されてゐた。(スクルウチは鼻風を引いて居たので、) 爐棚には小さな粥鍋があつた。寢床の下にも戸棚の下にも誰も居やしなかつた。壁には上被服が怪しげに掛つてゐたが、その中にも誰も居なかつた。物置部屋はいつものまゝで、古びたストウブの金網と、古靴と、二箇の魚籠と、三本脚の手水臺とそれから一本の火搔があつた。

38. すつかり、安心して、彼は扉を閉ぢ、中から錠を下した。而も何時になく二重錠を下したのであつた。かく用心して、彼はネクタイをはづし、化粧着を着て、スリツバを穿き、寢帽子を被り、そして、火の前に腰を下して、粥を吸らうとしました。

hob=flat shelf at the side of a grate 爐棚、(物を暖めて置く爲めに此棚の上に置く)。

dressing-gown 化粧着。(着換へする時など一寸かける浴衣様のもの)。

fire-guard 暖爐の金網。

38. **Thus secured against surprise** かくして驚きに對して用心した。かくして(意外な時に何が出て來ても)驚かぬ様に用心した。

39) It was a very low fire indeed; nothing on such a bitter night. He was obliged to sit close to it, and brood over it, before he could extract the least sensation of warmth from such a handful of fuel. The fire-place was an old one, built by some Dutch merchant long ago, and paved all round with quaint Dutch tiles, designed to illustrate the Scriptures. There were Cains and Abels, Pharaoh's daughters, Queens of Sheba, Angelic messengers descending through the air on clouds like feather-beds, Abrahams, Belshazzars, Apostles putting off to sea in butter-boats, hundreds of figures to attract his thoughts; and yet that face of Marley, seven years dead, came like the ancient Prophet's rod, and swallowed up the whole. If each smooth tile had been a blank at first, with power to shape some picture on its surface from the disjointed fragments of his thoughts, there would have been a copy of old Marley's head on every one.

40) "Humbug!" said Scrooge; and walked across the room.

After several turns, he sat down again. As he threw his head back in the chair, his glance happened to rest upon a bell, a disused bell, that hung in the room, and communicated for some purpose now forgotten with a chamber in the highest story of the building. It was with great astonish-

39. **low fire** 殆んど盡きんとする火。

nothing=(so it was) insignificant 何にもならなかつた。

brood [bru:d] **over** 覆ふ。すつかぶさる。

Scriptures=Bible 聖書。

Cain [kein] **and Abel** [eibəl] (Cain [† Adam, Eve. の長男にして、神の依怙最負を憤り Abel を殺す)。(創世記第五章)。

Pharaoh [ˈfɛərəu] エジプトの王。(出埃及記)。

Queen of Sheba [ˈʃi:bə] 此の女王はソロモンの教を聞く爲めに地の涯より來た。

Sheba=Ancient kingdom in the S. part of Arabia Felix.

3). 其は全く非常にとろい火だつたので、そんなに寒い夜には何にもならなかつた。仕方なく彼はその火に身をよせて、すつかぶさると、そんな一握位の火でも僅かばかりの暖い感じを抱く事が出来た。其の暖爐は古物で、ずつと以前に和蘭のある商人が造つたもので、周囲は珍奇な和蘭瓦を敷き詰めてあつて、その意匠は聖書を繪にしたものであつた。ケインとエイベルや、フェアロウの娘や、シーバの女王や、羽蒲團の様な雲に乗つて天降る天使や、エイブラハムもベルシャツザアも乳酪皿の様な舟に乗つて海へ乗り出して行く使徒等も、其他彼の心を引きつける人物が幾百となくあつた。それなのに、七年前に死んだマーレイのあの顔が、昔の豫言者の杖の様に現はれて、他の顔を皆んな呑んでしまつた。若し、各々の滑かな瓦に最初から何も描いてなかつたら、スクルウチはその脈絡の立たぬ片々な回想でその瓦の表面に繪を描き、はては、どの瓦にも、皆んなマーレイ老人の顔形が現はれたであらう。

40. 「馬鹿らしい！」とスクルウチは起つて、部屋の中を歩きました。

數回行つたり、來たりして、又、腰を下しました。彼が椅子にそりかゝつて凭れると、ふと、一つの呼鈴が、一つの使つてゐない呼鈴が眼についた。其はその部屋にぶらさがつてゐたが、一體何の爲めにつけられたかも今はわからぬが、その建物の一番上の部屋とつながれてゐるのであつた。所で、全く驚い

Abraham [ˈeibrəhæm] (創世記 XII. 1).

Belshazzar [belˈʃæzə] 但仁理書 (Daniel V. 1. 参照)。

Apostles (馬太傳、X. 24. 参照)。

butter-boats 舟形のバター皿、(或はソース入)、(使徒が小舟に乗つて海に出る様を面白く言つたもの)。

the ancient Prophet's rod ある昔の豫言者の杖、(モーゼの兄 Aaron が埃及王フェアロウの前に投げ出した杖が忽ちにして蛇となり、他の法術士の蛇を呑み盡したと言ふ聖書中の故事)。(Exodus. VII. 12).

ment, and with a strange, inexplicable dread, that as he looked, he saw this bell begin to swing. It swung so softly in the outset, that it scarcely made a sound; but soon it rang out loudly, and so did every bell in the house.

41) This might have lasted half a minute, or a minute, but it seemed an hour. The bells ceased as they had begun, together. They were succeeded by a clanking noise, deep down below; as if some person were dragging a heavy chain over the casks in the wine merchant's cellar. Scrooge then remembered to have heard that ghosts in haunted houses were described as dragging chains.

42) The cellar-door flew open with a booming sound, and then he heard the noise much louder, on the floors below; then coming up the stairs; then coming straight towards his door.

"It's humbug still!" said Scrooge. "I won't believe it." His color changed though, when, without a pause, it came on through the heavy door, and passed into the room before his eyes. Upon its coming in, the dying flame leaped up, as though it cried "I know him; Marley's Ghost!" and fell again.

43) The same face: the very same. Marley in his pigtail, usual waistcoat, tights and boots; the tassels on the latter bristling, like his pigtail, and his coat-skirts, and the hair upon

40. **so did** 同じ様に鳴り出した。

41. **haunted houses** 化け物屋敷。

that ghosts.....were described as dragging chains 幽霊が鎖を引かずつてると言ふことな。

(She was *described as* being beautiful 彼女は美人だと言はれた)。

42. **though**=notwithstanding 流石に。

leaped up 跳び上つた。(此處では焔が燃え上つた意)。

43. **tights**=close fitting trousers 細いズボン。

tassels on the latter=tassels on the boots. 長靴についでる總、マ

たのなんのつて、奇怪千萬にも、彼が視てると、此の呼鈴が揺れ動き始めました。最初はほんのそつと揺れたので殆んど音も出なかつた。が、間もなくそれが音高く鳴り出し、また家中の呼鈴までが、皆んな一齊に鳴り出しました。

41. 此は半分か一分も續いたらうか。だが、其は一時間もに思はれた。其等の呼鈴は鳴り始めた時と同じ様に皆一齊に止んだ。とそれに引き續いて、カランカランと言ふ音がずつと下の方に聞え、それが丁度、誰かが酒屋の穴藏の酒樽の上を、重い鐵鎖でも引きすつてゐる様であつた。そこで、スクルウヂはふと、幽霊が鎖を引かずつてると言ふのを聞いたことがあるのを憶ひ出した。

42 穴藏がドーンと言ふ音を立てゝ開いた。と思ふと、階下の床の上で、更にずつと大きな物音が聞えた。そして、階段を昇つてくる。その内に、眞直ぐに彼の戸口の方へやつて来る。

「馬鹿らしい、またか！こんなことをなんで本気にするものか」とスクルウヂは言つた。

だが彼の顔色は流石に蒼白になつた。折しも、小止みもなく、その物音はやつて来て重い扉をくぐり、部屋へとはいつて彼の眼前に現はれた。それがはいつて来ると同時に、消えかけてゐた蠟燭の火はぱつと燃え上つて、恰も「さうだ、マアレイの幽霊だ！」と言つた様であつたが、また暗くなつて仕舞つた。

43. そつくりの顔だ、全くそつくりの。胴着も、細^{チヨツキ}ズボンも、長靴も、いつものまんまで、辨髮姿のマーレイだ。そしてその長靴についでる總^{フナ}は彼の辨髮の様に逆立つて居た。上衣の裾も

アレイの幽霊が穿いてゐた長靴は Hessian boots であつた。此は前の方に總がついて居る。初めは Hesse の騎兵が穿いたものだが、19 世紀の初め頃に一般に流行してゐた。

bristle [brisl] (毛を) 逆立てる。

his head. The chain he drew was clasped about his middle. It was long, and wound about him like a tail; and it was made (for Scrooge observed it closely) of cash-boxes, keys, padlocks, ledgers, deeds, and heavy purses wrought in steel. His body was transparent: so that Scrooge, observing him, and looking through his waistcoat, could see the two buttons on his coat behind.

44) Scrooge had often heard it said that Marley had no bowels, but he had never believed it until now.

No, nor did he believe it even now. Though he looked the phantom through and through, and saw it standing before him; though he felt the chilling influence of its death-cold eyes; and marked the very texture of the folded kerchief bound about its head and chin, which wrapper he had not observed before; he was still incredulous, and fought against his senses.

45) "How now!" said Scrooge, caustic and cold as ever. "What do you want with me?"

"Much!"—Marley's voice, no doubt about it.

"Who are you?"

"Ask me who I was."

"Who were you then?" said Scrooge, raising his voice.

"You're particular, for a shade." He was going to say "to

about his middle 身體の中央邊、即ち腰の邊。

44. **it said**=people (they) said (此の it は無人稱動詞の主格と成る不定の it である。

It says in the papers that it is so=The papers say that it is so (新聞にさう出て居る)。

Marley had no bowels マアレイには腸(なさけ)がなかつた。

bowels [bauehz] には腸、及びなさけの二様の意味がある、そこでこの兩意を含めて洒落れてゐる。

the very texture その織目さへ、very は強めた言ひ方。

wrapper 纏、頬かむり。

頭の髪も同じくさうであつた。彼の引きずる鎖は身體の中央邊に縛りつけてあつたが、それは長くて、尻尾の様に身體の周圍に捲きつけてゐた。そして、それは、(スクルウチが近寄つてよく視ると) 錢箱や、鍵や錠前や、會計簿や、證書や、鋼鐵製の重い財布で作られてゐた。その體は透明だつたのでスクルウチは彼をぢつと見詰め、胴着を透して見て居ると、上衣の背後についてゐる二箇の釦がよく見えました。

44. スクルウチはそれ迄に、しばしば、マアレイには腸(なさけ)がないと人がいふのを聞いたことがあつた。

然し、未だそれを信じたことがなかつた。然り、今も尙ほ信じはしなかつた。彼はよくその幽霊を視て、それが自分の前に立つてゐるのを見たし、又、その死の様な冷い眼でみられて、身體がぞつとするのを感じたし、またそれ迄は氣が附かなかつたのだが、その頭から頤へかけて頬被りをしてゐる手巾の織目さへ見わけられたが、それでも尙ほ彼は信じないで、どうも自分の見損ひだらうと思つた。

45. 「何うしたのだ! 俺に何の用があるのだ?」とスクルウチは、いつもの様にきつく冷淡に言つた。

「あるともさ」まさしく、マアレイの聲。

「お前は誰だい?」

「誰だつたのかと尋ねなさい!」

「ちや、お前は誰だつたのだ?」とスクルウチは聲を高めて云つた。「小むづかしい奴だね——物怪の癖に」彼はものの毛毳

brought against his senses 自分の感覺を疑つた。

45. **How now!** 何うしたのです。

much!=I want much of you.

ask me who I was 私が誰だつたかを尋ねよ。(今は幽霊なんだから在世中に誰だつたかを尋ねよの意)。

a shade," but substituted this, as more appropriate.

"In life I was your partner, Jacob Marley."

"Can you—can you sit down?" asked Scrooge, looking doubtfully at him.

"I can."

"Do it, then."

46) Scrooge asked the question, because he didn't know whether a ghost so transparent might find himself in a condition to take a chair; and felt that in the event of its being impossible, it might involve the necessity of an embarrassing explanation. But the ghost sat down on the opposite side of the fireplace, as if he were quite used to it.

47) "You don't believe in me," observed the Ghost.

"I don't," said Scrooge.

"What evidence would you have of my reality beyond that of your senses?"

"I don't know," said Scrooge.

"Why do you doubt your senses?"

"Because," said Scrooge, "a little thing affects them. A slight disorder of the stomach makes them cheats. You may be an undigested bit of beef, a blot of mustard, a crumb of

for a shade 亡霊にしては、shade には「亡霊」と「ほんの一寸した差異」の兩意がある。そこで particular for a shade は「^{ものけ}物怪の癖に小むづかしい」との意で particular to a shade は「ものの毛程の差異に迄も小むづかしい」の意となる。shade の此兩意によつて洒落を表したもの。

can you—? (スクルウヂは幽霊は腰掛けることが出来ぬと思つてゐたから、かく尋ねた)。

do it=s.t down.

46. **it might involve.....explanation** 面倒にこんがらかす辯解をしなければならなくなるだらう。

embarrassing [im'bræs.ɪŋ] (事を) 面倒にする。

47. **reality** 正體。

that=evidence.

の^{ちがひ}差違に」といはうとしたのだが、それよりももつと相應はしい様に斯ういひかへたのであつた。

「娑婆に居た時はお前の相捧のジェコブ、マアレイだつたのだ」。

「お前さんは——お前さんは腰掛ける事が出来るかね？」とスクルウヂは、とても腰掛けられやすまいといふ様に彼を見ながら訊ねた。

「出来るとも。」

「ちやお掛けよ。」

46. スクルウヂがさう尋ねたのは、斯くも透き通つた幽霊が椅子に腰掛けることが出来るかどうか怪しかつた、若し出来ない場合は、その辯解に苦しむであらうと思つたからであつた。然しながら、幽霊はさも掛けなれてるといつた様に爐の向ふ側に腰を下しました。

47. 「お前さんは私を信じないのかい。」と幽霊はいつた。

「信じないさ。」とスクルウヂはいつた。

「俺の正體についちや、何よりお前の耳や眼が知つてるぢやないか？」

「俺にや解らないよ。」とスクルウヂはいつた。

「何故お前さんは自分の耳や眼を疑ふんだね？」

「それや、一寸した事が耳や眼を惑はすからさ、一寸胃の具合が悪くても、耳や眼はあてにならなくなる。お前さんはひよつとしたら消化せぬ一切の牛肉かもしれないよ、一汚點程の芥子かも、一片の乾酪かも、生煮の馬鈴薯の一片かもしれぬ。お前は何にしても、クレーブよりかグレビーに縁があるさうだ。

affects=disturbs. みだす、惑はす。

make them cheats 感覺を詐欺師にする。

them=senses. (耳や眼をあてにならぬ様にさす)。

cheese, a fragment of an underdone potato. There's more of gravy than of grave about you, whatever you are!"

48) Scrooge was not much in the habit of cracking jokes, nor did he feel, in his heart, by any means waggish then. The truth is, that he tried to be smart, as a means of distracting his own attention, and keeping down his terror; for the spectre's voice disturbed the very marrow in his bones.

To sit, staring at those fixed glazed eyes, in silence for a moment, would play, Scrooge felt, the very deuce with him. There was something very awful, too, in the spectre's being provided with an infernal atmosphere of its own. Scrooge could not feel it himself, but this was clearly the case; for though the Ghost sat perfectly motionless, its hair, and skirts, and tassels, were still agitated as by the hot vapor from an oven.

49) "You see this toothpick?" said Scrooge, returning quickly to the charge, for the reason just assigned; and wishing, though it were only for a second, to divert the vision's stony gaze from himself.

"I do," replied the Ghost.

"You are not looking at it," said Scrooge.

"But I see it," said the Ghost, "notwithstanding."

"Well!" returned Scrooge, "I have but to swallow this,

There's more of gravy than of grave about you お前さんは化物よりか飲物の方らしい。gravy は種々な焙り肉で作った雑炊の類不消化であるため、此を多く食べるとよく悪い夢に襲はれたりする。スクルウヂは、幽霊を見てやつぱりこの様な不消化物でも食べたためだらうと想つた。そして、墓から出る本物の幽霊とは想はなかつた。

gravy ['greivi] と grave [groiv] とがよく似てるので洒落れたもの。

48. crack a joke 冗談を言ふ。

nor did.....then (幽霊が出てひどく怖がつてる折なんだから、どうして冗談など言ふどころでなかつた。)

smart 如才ない、巧い (即答などの。)

disturbed the very marrow in his bones 骨髓をさへ亂した。

グレゾーよりかグレビー (墓よりも肉汁) に縁がありさうぢや!」とスクルウヂは言つた。

43. スクルウヂは元々洒落なぞいへるたちの男ぢやなかつた。また此際、心中では、どうしてどうして、巫山戯けるどころぢやなかつた。幽霊の聲は彼の骨髓にまでも徹する様だつたのだから、實際の所は、巧いことでもいつて、自分の氣を散らし、恐怖の念を抑つへけ様としたのであつた。

あのぎろつと据つた、光る眼を視詰めながら一寸の間でも黙つて腰かけて居ようものなら、それこそひどいめに會ふだらうと、スクルウヂは感じた。それに又、その幽霊は身に獨特な冥土の風をもつてゐたので、何んとなん非常に物凄い處があつた。スクルウヂ自身には感じなかつたけれども、此は明かに事實であつたのだ。その幽霊はちつとも動かずに腰を下してゐたのに、その髪や、裾や、總是竈から立ち昇る蒸氣に煽り立てられてる様だつたからです。

44. 「お前さんは此爪楊枝が見えるかい?」とスクルウヂは早速はむかつて言つた。此はさつき述べた通りで、唯一秒間でも、幽霊の石の様に冷たい視線から他へそらせたいと思つたからでした。

「見えるとも」と幽霊は答へた。

「お前さんはちつともそれを見ては居ないぢやないか?」とスクルウヂがいつた。

「だが見えるんだ、見て居なくつたつて、」と幽霊はいつた。

「えゝつそれぢや、此を呑みこみさへすりやいゝのだ。これ

即ち、骨髓にさへ徹したの意。

to play the deuce with 酷く害する。deuce は悪魔の意。

infernal atmosphere 冥土の風。

oven 竈 (殊に臺所用の) 燕焼竈。

49. the reason just assigned たつた今述べた理由、(實の所は、なるべく巧いことでもいつて、自分の氣を散じ、恐怖の念を抑へようとしてゐたこと。)

have but to..... さへすればよい。

swallow this (爪楊枝を呑みさへすれば、胃腸を潰れて悪魔をみて、自分から幽霊を造り出す。)

and be for the rest of my days persecuted by a legion of goblins, all of my own creation. Humbug, I tell you! humbug!"

50) At this the spirit raised a frightful cry, and shook its chain with such a dismal and appalling noise, that Scrooge held on tight to his chair, to save himself from falling in a swoon. But how much greater was his horror, when the phantom taking off the bandage round its head, as if it were too warm to wear in-doors, its lower jaw dropped down upon its breast!

51) Scrooge fell upon his knees, and clasped his hands before his face.

"Mercy!" he said. "Dreadful apparition, why do you trouble me?"

"Man of the worldly mind!" replied the Ghost, "do you believe in me or not?"

"I do," said Scrooge. "I must. But why do spirits walk the earth, and why do they come to me?"

"It is required of every man," the Ghost returned, "that the spirit within him should walk abroad among his fellow-men, and travel far and wide; and if that spirit goes not forth in life, it is condemned to do so after death. It is doomed to wander through the world—oh, woe is me!—and witness what it cannot share, but might have shared on earth, and turned to happiness!"

a legion of goblins 無数の幽霊。legion [ˈli:dʒən] 大軍、無数。
all of my own creation = all created by myself.

I tell you = surely.

51. **Mercy!** = Have mercy on me! お慈悲を以て命丈お助けを。助けてくれ!

man of the worldly mind = worldling = worldly person. 俗人、凡夫、(現世の名利物慾等に傾いて信心なく霊的なことの解らぬもの。)

required of every man 人皆に要求されてる、即ち、誰でも……せねばならぬ。

から先一生自分で造り出した無数の怪物に付き纏はれて憐まされるさ。馬鹿な、全く——馬鹿らしいや!」

50. 此を聞いて、幽霊は恐ろしい叫び聲を上げて、鎖を揺すぶり、薄気味の悪い、ぞつとする様な音をたてたので、スクルウチは氣絶でもしては大變と、しつかり椅子に嚙り付いた。けれど、まだまだもつと驚いたことには、幽霊が室の中では熱過ぎると言つた風に、其頭から巻いてゐた頬被りをとるとたんに、その下顎がガクリと胸のあたりまでぶら下つたのでした。

51. スクルウチは跪いて、眼の前に両手を合せました。

「お助け下さい! 恐しい幽霊、なぜ私を苦しめるのです?」と彼は言つた。

「凡夫め! まだ俺を信じないのか?」

「信じます。信じなけりやなりません、だが何でまた幽霊が此世へ出歩いたり、また、私の處へやつて來たりするのでせう?」とスクルウチは言つた。

「そりや、一體人體の靈魂と言ふものは、同胞の間へ出歩き、何處迄もあちこち行かなけりやならない。そして、若し生前に出歩かなかつた靈魂は、死んでからさうしなければならぬ様な運命になつて居るのだ。その運命故に俺も世の中をさ迷ふのだ。あゝなんといふ情ない事だ! ——生きて居る時なら苦樂を共にして、幸福にもされたらうが、今は共に楽しむことも出来ぬに唯見てゐなければならぬ。」と幽霊は言つた。

walk abroad = walk out.

condemned [kən'demnd] to..... する様に運命づけられてる。どうしても……しなければならぬ。

doomed [du:md] = condemned.

woe [woɪ] **is me!** 悲しい哉、情ない哉、woe 禍、悲しい思ひ。me は古い dative.

witness 目撃する。doomed to に續く。(今では共にする事も出来ないが、生きて居る時だつたら人々と共にして、幸福を導き得たであらう。その種々の現世のことを目撃する様に運命づけられて居る。)

52) Again the spectre raised a cry, and shook its chain and wrung its shadowy hands.

"You are fettered," said Scrooge, trembling. "Tell me why?"

"I wear the chain I forged in life," replied the Ghost. "I made it link by link, and yard by yard; I girded it on of my own free will, and of my own free will I wore it. Is its pattern strange to you?"

Scrooge trembled more and more.

"Or would you know," pursued the Ghost, "the weight and length of the strong coil you bear yourself? It was full as heavy and as long as this, seven Christmas Eves ago. You have labored on it, since. It is a ponderous chain!"

53) Scrooge glanced about him on the floor, in the expectation of finding himself surrounded by some fifty or sixty fathoms of iron cable; but he could see nothing.

"Jacob," he said, imploringly. "Old Jacob Marley, tell me more. Speak comfort to me, Jacob!"

"I have none to give," the Ghost replied. "It comes from other regions, Ebenezer Scrooge, and is conveyed by other ministers, to other kinds of men. Nor can I tell you what I would. A very little more, is all permitted to me. I cannot rest, I cannot stay, I cannot linger anywhere. My spirit never walked beyond our counting-house—mark me!—

52. **I wear the chain I forged in life** 俺は在世中に自分で作った鎖をかけてゐる。

coil=chain.

laboured on it 鎖を作るのに骨折つた。

53. **Jacob** [ˈdʒeɪkəb] **Ebenezer** [ˈeɪbənɪzə] 共にユダヤ人によくある名前。

It comes from other regions. (It は安心、)俺等の世界とはまた異つた他の世界で安心は得られるの意。

52. またもや幽霊は叫び聲を上げて、鎖をゆり動かし、おぼろに見える手を握り締めました。

「鎖で縛られてゐますな、それは、又、何う言ふ譯で？」とスクルウチはふるへながらつた。

「俺は在世中に自分で作った鎖をかけてゐるのぢや。其を俺は一環また一環、一尺また一尺と作ったのだ。其を俺は自から好んで身にかけて、自から好んで、身に纏ふたのだ。其はお前さんにも目新しい型ぢやありますまい？」

スクルウチは益々顫へました。

「それともお前さんも」と幽霊はいひ續けました。「御自分で縛つてる丈夫な鎖の重さと長さを知り度いかね、お前さんの七年前のクリスマスの宵には此の俺のと重さも同じだつたし、長さも同じだつたのだ。それ以來、お前さんは其を作り足して來た。其は餘つ程重くなつてるよ。」

53. スクルウチは五六十尋程もの鐵の鎖で捲きつけられてゐるのぢやないかと思つて、床の上の自分を見廻しましたが、何も見えなかつた。

「ジェコブ、ジェコブ、マアレイ爺さん、もつと話して下さい。安心の出来る様に御話し下さい。ジェコブ。」と彼は歎願する様に言つた。

「してくれつたつて何もありませんよ。」と幽霊は答へました。「安心なんて言ふものが得られるのは俺等の世界とはまた違つてるのだ。エビニザ・スクルウチ、そして、俺等とは違つた行の人が俺等とは毛色の違つた人間へ傳へるものなんだよ。また、俺が話したいと思つてる事を話すとも出来ないのだ。俺に許されてゐるのはもう後ほんの一寸なんだ。俺や休むことも、停ることも、彼處をぶらつくことも出来ないのぢや。私の魂は勘定場以外には一步もふみ出したことはなかつたのぢや、いゝ

is conveyed の subject は It.

ministers=agents. 行爲者。

mark me!=mark what I say!=mark my words. いゝかれ、よく聞いておくれ。

in life my spirit never roved beyond the narrow limits of our money-changing hole; and weary journeys lie before me!"

54) It was a habit with Scrooge, whenever he became thoughtful, to put his hands in his breeches pockets. Pondering on what the Ghost had said, he did so now, but without lifting up his eyes, or getting off his knees.

"You must have been very slow about it, Jacob," Scrooge observed, in a business-like manner, though with humility and deference.

"Slow!" the Ghost repeated.

"Seven years dead," mused Scrooge. "And travelling all the time!"

"The whole time," said the Ghost. "No rest, no peace. Incessant torture of remorse."

"You travel fast?" said Scrooge.

"On the wings of the wind," replied the Ghost.

"You might have got over a great quantity of ground in seven years," said Scrooge.

55) The Ghost, on hearing this set up another cry, and clanked its chain so hideously in the dead silence of the night, that the Ward would have been justified in indicting it for a nuisance.

My spirit.....counting-house 私の魂は勘定場から一步も出た事がなかつた。(マーレイは在世中スクルウチの様に金儲けのことばかりしてゐて一寸も人の爲めになることなどとはしなかつた。)

money-changing hole 兩換口。

54. **getting off his knees** 膝を崩す事。

Incessant torture of remorse 悔恨の絶對的苦惱、(悔恨の情に絶えず居ても立つても居られぬ程に苦しんでゐる。)

on the wings of the wind=swiftly 迅速なることを表はす。

55. **set up**=raised.

the Ward [wɔ:d]=night-watch 見張り、夜警、(倫敦は二十六區に分

かね! 生前には狭い兩換口以外には出たことがなかつたのぢや。そこで、これから先き、物憂い旅をしなければならないのだ!)

54. スクルウチは思案に暮れる時は何時もズボンのポケットに手を入れる癖があつた。此の時も、幽靈の言つたことを考へながら、仰向きもせず、膝も崩さずに、さうして居ました。

「旅は随分御ゆつくりなのでせう、ジェコブさん。」とスクルウチは、謙遜と尊敬の念を以つてではあつたが、商賣風に言つた。

「ゆつくりだ!」と幽靈は繰返して言ひました。

「死なれて七年になるが」とスクルウチは思ひ入れよろしく、「すつと旅しつづけて居ましたか」と言つた。

「いつもいつも、休みなく、悔恨の情に絶えず居ても立つても居られぬ程苦しんでゐる。」と幽靈は言つた。

「ぢや早く旅しますか?」とスクルウチは言つた。

「風の翅にのつて行く様だ。」と幽靈は答へた。

「ぢや七年間は餘つ程歩かれたでせうな」とスクルウチは言つた。

55. これを聞いて、幽靈は、又もや一叫びして、死の様な夜の静寂を破つて、身の毛もよだつ程に、ガチャリンと其鎖をゆすぶつたので、その音ときたら、夜警の巡查が安眠妨害として、告發してもよい位であつた。

れて居た、そして各々の區に Ward (見張番) を置いてあつた。1829年 Sir Robert Peel が警備法を改善する迄は随分倫敦も物騒だつたらしい。(cf. to keep watch and ward 嚴重に番をする。The boy is under ward. その少年は監督を受けてゐる。)

justify 差支ない。

indict [in'dait] 起訴する、告發する。

nuisance ['niu:sns] 妨害、迷惑。

cf. Commit no nuisance. 小便無用。

What a nuisance. うるさい事だ!

"Oh! captive, bound and double-ironed," cried the phantom, "not to know, that ages of incessant labor, by immortal creatures, for this earth must pass into eternity before the good of which it is susceptible is all developed. Not to know that any Christian spirit working kindly in its little sphere, whatever it may be, will find its mortal life too short for its vast means of usefulness. Not to know that no space of regret can make amends for one life's opportunity misused! Yet such was I! Oh! such was I!"

56) "But you were always a good man of business, Jacob," faltered Scrooge, who now began to apply this to himself.

"Business!" cried the Ghost, wringing its hands again. "Mankind was my business. The common welfare was my business; charity, mercy, forbearance, and benevolence, were, all, my business. The dealings of my trade were but a drop of water in the comprehensive ocean of my business!"

57) It held up its chain at arm's length, as if that were the cause of all its unavailing grief, and flung it heavily upon the ground again.

"At this time of the rolling year," the spectre said, "I

Oh! captive おゝ奴隷よ、(幽霊がスクルウチに向つて言つて居る。スクルウチは利慾の奴隷になつて居た故。)

for this earth.....developed (不朽の大人物等が盡力しても永久の後でなければそれが現はれないので、偉人達の不斷の勞力を知らずに居るの意。)

good=benefit 利福。which は good を受けてる。

it is susceptible の it は the earth (此の地球が受け得る利福。)

Christian spirit 基督教的の精神をもつ人、即ち善良な精神をもつ人の意。(次の kindly の間に who is を入れてみるとよい。)

to make amends for 償ふ、(埋合せをする) (I must make amends for my fault. 罪滅ぼしをしなければならぬ。)

56. **to apply this to himself** 此を我身に引き當てる。(マーレイの幽霊は、自分も好機會を逸して、善きことなすべきときにせず

「おゝ！ 縛られたる、二重の鎖に縛られたる奴隷よ！」と幽霊は叫んだ。「不朽の大人物等は、此の世の爲めに、長年月の間絶えず盡力して居るが、その効果が十分に顯はれない間に、彼等は此の世を永久に去つてゆかねばならないのだと言ふことを知らずに居る。苟くも基督教的精神をもつ者は、夫々自分の小さな範圍内で、それがどんなものであらうと、懇に働いて、世の爲めになる種々雑多なことをする爲めには、人間の生命と言ふものが餘りにも短いことを感ずるの知らずに居る。又、人生の好機會を一度失ふ時は、どんなに後悔しても取返しがつかないと言ふことも知らずに居る！とは言へ俺もやつぱりさうだつたのだ！ おゝ俺もさうだつたのだ！」

55. 「だが、ジエコブさん、お前さんはいつも商賣上手な人だつたね。」とスクルウチは口籠りながら言つて、今度は此を我身に引當てゝ考へ始めた。

「商賣だつて！」と幽霊はまたも兩の手を揉み絞つて叫んだ。「人道が俺の商賣なんだ。公益をはかるのが俺の仕事なんだ。慈善、憐愍、寛大、慈悲此等は皆んな俺の事業だ。此事業の大海の様なのに比すれば、自分のやつてゐた商賣上の取引などは、まるで一滴の水に過ぎなかつたのだ！」

57. 幽霊はその鎖を、恰もそれが今更悔いても及ばぬ悲しみの原因でもある様に、腕の伸びるだけ高く差し上げて、又ひどく床の上に投げつけました。

「めぐりゆく月日の中で此時(クリスマスをさす)位俺を惱

に終つたと言つたが、スクルウチは今度は自分自身にそれを引き當てて考へてみた。)

Mankind was my business 人道は自分の當然なすべき事だつた。mankind=benevolence.

the dealing of my trade (自分のやつて居た商賣の取引の如きは自分の當然なすべき人道と言ふ仕事に対しては、まるで大海中の一滴の様なものだつた。)

suffer most. Why did I walk through crowds of fellow-beings with my eyes turned down, and never raise them to that blessed Star which led the Wise Men to a poor abode! Were there no poor homes to which its light would have conducted me!"

58) Scrooge was very much dismayed to hear the spectre going on at this rate, and began to quake exceedingly.

"Hear me!" cried the Ghost. "My time is nearly gone."

"I will," said Scrooge. "But don't be hard upon me! Don't be flowery, Jacob! Pray!"

"How it is that I appear before you in a shape that you can see, I may not tell. I have sat invisible beside you many and many a day."

59) It was not an agreeable idea. Scrooge shivered, and wiped the perspiration from his brow.

"That is no light part of my penance," pursued the Ghost. "I am here to-night to warn you, that you have yet a chance and hope of escaping my fate. A chance and hope of my procuring, Ebenezer."

"You were always a good friend to me," said Scrooge. "Thank'ee!"

57. **never raise** (金を儲けることばかりして慈善などのことはふり向きもしなかつた。)

the blessed Star 有難い御星、即ち、ベスレヘムの星の事。

the Wise Men ベスレヘムの星に導かれて、幼き救世主の許を訪れた三人の賢者。three m^gr 又は three kings とも言ふ。

to a poor abode 基督の生れた家へ。(馬太傳第二章、参照) abode 住所。

58. **at this rate** 此の調子で。

my time is nearly gone 俺に許されてる時間はもう大方過ぎて終つた。

to be flowery = to be full of figures of speech. 華飾を施せる文句で滔々と辯じ立てる。

59. **That is no light part of my penance** 斯くするのも俺の

ます時はない。何うして、俺は群なす同胞の間を眼を閉ぢて、素しらぬ顔で通り過ぎたのだらう。なぜ俺はあの賢人達を導いて貧しい家に行かせたと言ふあの有難い御星を仰ふがなかつたらう。その光に導かれて訪ねるべき貧しい家もあつたらうに！」と幽霊は言つた。

58. 幽霊が調子ですんずん言ふのを聞いて、スクルウヂは非常に驚いて、ふるふる震ひ出しました。

「俺の言ふことをよく聞け！俺は、もう直きに行くのだ！」と幽霊は言つた。

「宜敷う御座います。だが、私を苦しめないで下さい！そんなに華やかな言葉でべらべら仰有られては困ります、ジェコブさん、後生ですから。」とスクルウヂは言つた。

「俺がお前さんの目に見える姿となつて目前に現はれた譯は、話されない。が俺はずつと前からお前さんの傍に、姿こそ見せなかつたが、坐つてゐたのぢや。」

59. それは氣持のよい話でなかつたので、スクルウヂは身顔ひして、額から汗を拭ひました。

「斯うするのも俺の罪滅し苦行で、仲々容易な事ぢやない。」と幽霊は言ひ續けた。「俺が今夜此處へ來たのは、お前はまた俺の様な運命から逃れる機會と希望とがあると言ふことを、お前に知らせてやり度い爲めなのだ。俺の力で得られる機會と希望とだよ。エビイニザ。」

「お前さんはいつも御親切に、有難う！」とスクルウヂはいつた。

罪滅ほし苦行で、容易な事ぢやない。that はスクルウヂの傍に坐つて居ると言ふこと。penance (罪滅ほしの) 難行苦行。

of my procuring = procured by me; which I obtain for you.

Thank'ee = thank you. 'ee = ye.

"You will be haunted," resumed the Ghost, "by Three Spirits."

60) Scrooge's countenance fell almost as low as the Ghost's had done.

"Is that the chance and hope you mentioned, Jacob?" he demanded, in a faltering voice.

"It is."

"I—I think I'd rather not," said Scrooge.

"Without their visit," said the Ghost, "you cannot hope to shun the path I tread. Expect the first to-morrow, when the bell tolls one."

"Couldn't I take 'em all at once, and have it over, Jacob?" hinted Scrooge.

"Expect the second on the next night at the same hour. The third upon the next night when the last stroke of Twelve has ceased to vibrate. Look to see me no more; and look that, for your own sake, you remember what has passed between us!"

61) When it had said these words, the spectre took its wrapper from the table, and bound it round its head, as before. Scrooge knew this, by the smart sound its teeth made, when the jaws were brought together by the bandage. He ventured to raise his eyes again, and found his supernatural visitor confronting him in an erect attitude, with its chain wound over and about its arm.

60. **countenance fell.** "one's countenance falls" = one shows dismay.

Ghost's had done = Ghost's countenance had fallen.

I'd rather not = I had rather not be haunted by three spirits. I--I は遠慮を表はす。私はむしろ三人の幽霊には出て貰ひ度くないのですが。

the first = the first spirit. (the second; the third も同様)。

take 'em = receive them. 彼等を迎へる。

have it over it は幽霊の出現をさす。

「でお前さんの處へ出て來ることになつて居るよ、三人の幽霊が。」と幽霊はまた續けて言つた。

60. スクルウヂの顔は幽霊のと殆んど同じ様に蒼めました。

「それが貴方の仰有る機會と希望なんですか、ジェコブ？」と彼は震へ聲で訊ねました。

「さうだ。」

「私は——私はならうことなら御免蒙り度いものです。」とスクルウヂは言つた。

「だが彼等三人の幽霊が來なけりや、俺の踏んで來た道を避けることは望まれない。午前一時の鐘を相圖に、第一の幽霊が出て來るから其の積りで待つて居るがよい。」

「皆んな一度に出て貰つて、それでお終ひにして貰ふ譯に行きませんか。ジェコブ！」とスクルウヂは、それとなく言つてみました。

「第二番目のは次の夜の同じ時刻に出るよ。第三のは、其次の夜の十二時の鐘が打ち止む時にだ。俺が姿を現はしてるのも最うこれきりだよ。でお前自身の爲めなんだから、今迄話したことをよく憶えて置くがよい。」

61. かく言ひ終ると、幽霊はテーブルから、頬被を取り上げて、以前の様にそれを頭に捲きつけました。スクルウヂが此を知つたのは、幽霊が頬被で兩頬を締め合せた時に齒がガチガチと音をたてたからであつた。彼が思ひ切つて、再び眼を上げると、その不可思議な客は、その鎖を腕の邊りに捲きつけて、彼の面前にスツクとばかり立つて居た。

look = expect. 次にある look that の look とは使ひ方が異ふ。

look that look = see; take care.

61. **smart** = sharp. するどい。

in an erect attitude 直立の姿勢で。

wound [waund] **wind** [waind] 捲きつける。

62) The apparition walked backward from him; and at every step it took, the window raised itself a little, so that when the spectre reached it, it was wide open.

It beckoned Scrooge to approach, which he did. When they were within two paces of each other, Marley's Ghost held up its hand, warning him to come no nearer. Scrooge stopped.

63) Not so much in obedience, as in surprise and fear: for on the raising of the hand, he became sensible of confused noises in the air; incoherent sounds of lamentation and regret; wailings inexpressibly sorrowful and self-accusatory. The spectre, after listening for a moment, joined in the mournful dirge; and floated out upon the bleak, dark night.

64) Scrooge followed to the window; desperate in his curiosity. He looked out.

The air was filled with phantoms, wandering hither and thither in restless haste, and moaning as they went. Every one of them wore chains like Marley's Ghost; some few (they might be guilty governments) were linked together; none were free. Many had been personally known to Scrooge in their lives. He had been quite familiar with one old ghost, in a white waistcoat, with a monstrous iron safe attached to its ankle, who cried piteously at being unable to assist a wretched woman with an infant, whom it saw below, upon a door-step. The misery with them all was, clearly, that they

62. **at every step it took**=at every step which the apparition took. その幽霊が運んだ一歩毎に。

63. **not so much.....as**=rather.....than (勿論後者の場合は obedience と surprise and fear の位置は異ふ。)

incoherent [inkou'hiərent] 雑然たる。

floated out 浮ぶ様に出て行つた。(幽霊だからスツト軽く浮いてる

62. 幽霊は後しざりして行つた。とその一足毎に、窓が少しづつ開いて行つたので、幽霊が其の傍へ行つた時には窓はすつかり開いてゐた。幽霊はスクルウヂに近よれと麾いたので、彼はその通りした。二人の間が二歩ばかりになつた時に、マアレイの幽霊は手をあけて、もうそこで止れと注意したので、スクルウヂは止りました。

63. 此は命令に服したと言ふよりか、驚きと恐れとの爲めであつた。と言ふのは、幽霊が手を上げたかと思ふと忽ちにして、空中にがやがや言ふ聲が聞えたからであつた。悲歎と悔恨との雑然とした聲、何とも言ひ様もなく、悲しい、その身を責めて居る様な哀哭が聞えて來たからであつた。幽霊は一寸の間耳をすましてゐたが、その歎く様な悲しみの曲を共に口にして、物淋しい闇の夜へとスツト出て行つた。

64. スクルウヂは不思議さに、怖しさも打忘れて、後を追つてその窓の處まで行つて、外を眺めた。

空中には一杯幽霊が居て、止まりもせず急がしさうにあちらこちらとさ迷ひ、然もさ迷ひつゝ悲鳴を上げてゐた。どれもこれもみんなマアレイの幽霊の様に鎖をつけて居り、中數人ばかりの者は罪を犯せる内閣の閣員でもあつたらうか一緒に繋がれてゐた。誰一人として、自由なものは無かつた。多くの者は生前スクルウヂとは個人的に知合であつた。中でも、白チョッキを着て、踵に馬鹿に大きな鐵の金庫をつけた一人の年取つた幽霊とは随分親しくして居た。この幽霊は下の、戸口で見た、幼兒をだいてゐる衰れた婦人を助けることが出来ないと云つて泣き悲しんで居た。彼等全ての幽霊の悲惨なことは、此の世

様に出て行つた。)

64. **desperate in**=emboldened by 大膽になつて。死物狂ひに。
moaning as they went さ迷ひつゝ悲鳴を上げて、went=wandered.
guilty governments 罪を犯せる内閣員。

sought to interfere, for good, in human matters, and had lost the power for ever.

65) Whether these creatures faded into mist, or mist enshrouded them, he could not tell. But they and their spirit voices faded together; and the night became as it had been when he walked home.

Scrooge closed the window, and examined the door by which the Ghost had entered. It was double-locked, as he had locked it with his own hands, and the bolts were undisturbed. He tried to say "Humbug!" but stopped at the first syllable. And being, from the emotion he had undergone, or the fatigues of the day, or his glimpse of the Invisible World, or the dull conversation of the Ghost, or the lateness of the hour, much in need of repose; went straight to bed, without undressing, and fell asleep upon the instant.

to interfere in human matters 此の世の人の事に干渉する。
creatures 幽霊共のこと。

65. **tell**=distinguish 見分ける。

の人間の事柄にたづさはつて、爲めになることをしようと思つても、永遠にその力を失つて終つて居たことであつた。

65. 此等のものが霧の中に消え失せたのやら、それとも、霧が彼等を包んだのやら、彼には解らなかつた。だが彼等の姿も、彼等の物凄しい聲も共に消え失せて、彼が家に入つた時には夜は元の様に静かになつた。

スクルウヂは窓を閉ぢて、幽霊がはいつて来た處の扉を検べて見た。が其は彼自身の手で錠を下したまんまに、錠は二重に下りて居り、栓も異状がなかつた。彼は『馬鹿らしい』と言はうとしたが、少し言ひかけて止めた。そして、彼はすつと悩まされてゐた爲めか、それとも、日中の疲れが出た爲めか、それとも、又、眼に見えぬ世界を見た爲めか、それとも、幽霊と氣の滅入る様な話をした爲めか、又は、夜が更けて居た爲めか、非常に眠む度くなつたので、衣物を着更へもせず、其儘寢床には入ると直ぐにぐつすり眠つて終ひました。

stopped at the first syllable (Humbug の第一の音綴、即 Hum とだけ言つて止めて後は言はなかつた。)

STAVE TWO

THE FIRST OF THE THREE SPIRITS.

1) When Scrooge awoke, it was so dark, that looking out of bed, he could scarcely distinguish the transparent window from the opaque walls of his chamber. He was endeavoring to pierce the darkness with his ferret eyes, when the chimes of a neighboring church struck the four quarters. So he listened for the hour.

2) To his great astonishment the heavy bell went on from six to seven, and from seven to eight, and regularly up to twelve; then stopped. Twelve! It was past two when he went to bed. The clock was wrong. An icicle must have got into the works. Twelve!

3) He touched the spring of his repeater, to correct this most preposterous clock. Its rapid little pulse beat twelve; and stopped.

"Why, it isn't possible," said Scrooge, "that I can have

1. **opaque** [ou'peik]=not transparent. 不透明な。

to pierce the darkness 暗を突き通す。(暗の中に何かを見る。)

with his ferret eyes=with his sharp (searching) eyes. 鶺鴒の眼鷹の眼で。ferret ['ferit] 鶺鴒の一種。

chimes [tʃaim] (寺院の鐘樓等に懸ける) 一組の鐘。

the four quarters 此種の時計は、分の方は十五分に一つ、三十分には二つ、四十五分に三つ、六十分には四つ打ち、時の方は四つ打つた後、一寸間を置いて報ずる。故に四つ打つのは何時かを報ずる豫報の様なものである。スクルウチは此四つ打つのを聞いて次に何時を報ずるかを知らうと聞き耳を立てたのであつた。

listened for 待つた。listen for an answer (返事を待つ)。cf. listen to.

第二章

第一の幽霊

1. スクルウチが眼を覺ますと、眞暗であつたので、寢床から見ても、部屋の不透明な壁と透明な窓とを殆んど見分けることが出来ない程でありました。彼は鶺鴒の眼鷹の眼で暗の中に何か見つけようとして居ると、近くにある教會の鐘が十五分鐘を四つ打ちました。そこでその時刻を知らうと彼は耳をすまして聞きました。

2. 彼が非常に驚いたことに、その重けな鐘は七つ七つと打ち、七つ八つと打ち、同じ調子で十二迄打つて止みました。十二時！彼が寢床には入つたのは二時過ぎであつたに。時計が狂つてたんだ。機械に氷柱がついてるに相違ない。十二時だなんて！

3. 彼は此の途轍もない時計の違ひを正さうとして、時折懐中時計の發條に手をかけました。すると、それは早打ちに小さな音でチン、チン、チンと十二打つて、止んだ。

「おや、おや、丸一日ぶつ通して、次の晩まで寢て居られる

2. **an icicle** 氷柱、(十二時を打つたので、てつきり時計が狂つてるに相違ないと考へ、それはこの寒空のことだから時計の機械に氷柱でも出来たのだらうと思つたのである。)

works (時計などの) 機械。

3. **repeater** 舊式な一種の時計で、發條さへ押せばきちんとその時間になつてゐなくても、近い時間を報ずる仕掛になつてゐる。例へば、3時10分ならば3時を報じ、3時50分ならば4時を報ずる。暗中で大體の時間を知るには都合がよい。

preposterous [pri'pɔstərəs] 途轍もない、不合理な。

Its rapid little pulse beat twelve その早き小さな脈膊は十二打つた。即ち、それは早打ちにチンチンチンと十二打つたの意。

slept through a whole day and far into another night. It isn't possible that anything has happened to the sun, and this is twelve at noon!"

4) The idea being an alarming one, he scrambled out of bed, and groped his way to the window. He was obliged to rub the frost off with the sleeve of his dressing-gown before he could see anything; and could see very little then. All he could make out was, that it was still very foggy and extremely cold, and that there was no noise of people running to and fro, and making a great stir, as there unquestionably would have been if night had beaten off bright day, and taken possession of the world. This was a great relief, because "three days after sight of this First of Exchange pay to Mr. Ebenezer Scrooge or his order," and so forth, would have become a mere United States' security if there were no days to count by.

5) Scrooge went to bed again, and thought, and thought, and thought it over and over and over, and could make nothing of it. The more he thought, the more perplexed he was; and the more he endeavored not to think, the more he thought.

Marley's Ghost bothered him exceedingly. Every time he resolved within himself, after mature inquiry, that it was all a dream, his mind flew back again, like a strong spring re-

4. one=idea.

could see very little then さうしても殆んど見えなかつた。

if night had beaten off bright day 若し夜が明るい晝を叩き出して居たら。had beaten off=had driven away. 夜と晝を擬人化した言ひ方。

three days after sight 一覽後三日の内に、after sight=after presentation for payment 拂ひ渡しの請求後。

First of Exchange 爲替手形の一號也(爲替手形は三號一組となつて居り、第一號、第二號、第三號と言ふ風に發兌される。一つきり發

なんてことがあるものか。日輪様に何か故障が起つて居るので、今は正午十二時だなんてことは、どうしたつてありやしない！」とスクルウヂは言つた。

4. 考へて見れば實に驚くべきことなので、彼は寢床から這ひ出して、窓邊へ手搜りで行きました。彼は何かを見ようとするには、寢卷の裾でどうしても霜を拭ひ拂はなければならなかつた。さうしても殆んど見ることは出来なかつた。唯分つたのは、まだ霧が深くて、非常に寒いと言ふことと、それからあちこちと走つたり、大騒ぎしたりする人々の聲がしなかつたこととであつた。だが若し、夜が明るい晝を遂拂ひ、此の世界を自分のものにして居たら、疑ひもなく、人々は騒いでるに違ひない。斯う言ふ考へが大へん氣安めになつた。と言ふのも此の爲替手形一覽後、三日以内にエビニイザ・スクルウヂ氏、若くは、その代理人に拂渡し相成度候也」と言つた様なものは、教へる日がなければ全く當にならぬ證文になつて終つたかも知れないからでした。

5. スクルウヂは再び寢床に這入つて幾度も幾度も考へに考へぬいた。然しどうしても其が解せなかつた。彼は考へれば考へるほど、頭が混亂して來た。そして考へまいとすればする程、餘計に考へ込んだ。

マーレイの幽霊は彼を非常に困らせました。よくよく考へてから、あれは全く夢だと心の中で決めたいけれどそのたんに、彼の心は、強いバネがはね返る様に、また元にとび歸つて行つ

行する時は Sale of Exchange と言ふ。

order 指定證、(代理人は此をもつて行つて支拂つて貰ふ。)

United States' security デツケンズ時代にはアメリカ合衆國の公債等はあまり信用なく價值が無かつた。これがもとで當てにならぬ證文を言ふ様になつてゐた。

5. could make nothing of it どうしても解せなかつた。

within himself 心の内で。

after mature inquiry=after full consideration よくよく考へてから。mature [mə'tjuə] 熟せる。

leased, to its first position, and presented the same problem to be worked all through, "Was it a dream or not?"

6) Scrooge lay in this state until the chime had gone three quarters more, when he remembered, on a sudden, that the Ghost had warned him of a visitation when the bell tolled one. He resolved to lie awake until the hour was passed; and, considering that he could no more go to sleep than go to Heaven, this was perhaps the wisest resolution in his power.

7) The quarter was so long, that he was more than once convinced he must have sunk into a doze unconsciously, and missed the clock. At length it broke upon his listening ear.

"Ding, dong!"

"A quarter past," said Scrooge, counting.

"Ding, dong!"

"Half-past!" said Scrooge.

"Ding, dong!"

"A quarter to it," said Scrooge.

"Ding, dong!"

"The hour itself," said Scrooge, triumphantly, "and nothing else!"

He spoke before the hour bell sounded, which it now did with a deep, dull, hollow, melancholy One. Light flashed up in the room upon the instant, and the curtains of his bed were drawn.

to its first position その最初の位置へ。its は mind の。(混乱した、解らぬ状態への意。)

to be worked all through ずっと始めから考へられる様に。to work a problem 問題を解く。

6. **three quarters** 四十五分、a quarter 四分の一、即ち十五分。

7. **the quarter** 十二時の鐘を聞いてから四十五分たつてゐたから一時迄には十五分あつた。その十五分間のこと。

broke upon=became apparent to. に分る様になつた。(即ち、に聞えて來た。)

た。さうして、又、「夢だつたらうか、それとも夢では無かつたのか?」と言ふ同じ問題が出て來て、また始めから考へ直さなかりやならなかつた。

6. スクルウチは、此の様な有様で四十五分以上も横になつて居た。其時、突然に、彼は一時の鐘が鳴ればやつて來ると幽霊が言つたのを憶ひ出した。彼はその時が過ぎる迄眠らずに横になつて居らうと決めた。それに、天國へでも行かなければもう眠れやしないと考へたので、恐らく斯うするのが、彼の力としては一番賢い決心だつたらう。

7. 十五分間が非常に長かつたので、彼は吾知らずとうとう眠つて、時計を聞き落したに違ひないと、一度ならず幾度か思つたのであつた。遂に、鐘の音は、耳をすましてゐると響いて來た

「カン、カン!」

「十五分過ぎだ、」とスクルウチは數へながら言つた。

「カン、カン!」

「三十分過ぎ!」とスクルウチは言つた。

「カン、カン!」

「十五分前!」とスクルウチは言つた。

「カン、カン!」

「さあ一時だ! が何も出やしない!」とスクルウチは勝ち誇つた様に言つた。

彼がかく言つたのは時鐘の鳴らぬ内であつたが時の鐘は今や深く、沈んだ、冴へない、滅入る様な音をして一つ響いた。すると、突然、部屋中に光がひらめいて、彼の寢床のカアテンがすつと引かれました。

the hour itself さあ一時だ、itself は強めた言ひ方。

One 一時は待ちに待つた問題の時間故特に大文字にしたのだ。

upon the instant=instantly; at once.

8) The curtains of his bed were drawn aside, I tell you, by a hand. Not the curtains at his feet, nor the curtains at his back, but those to which his face was addressed. The curtains of his bed were drawn aside; and Scrooge, starting up into a half-recumbent attitude, found himself face to face with the unearthly visitor who drew them: as close to it as I am now to you, and I am standing in the spirit at your elbow.

9) It was a strange figure—like a child: yet not so like a child as like an old man, viewed through some supernatural medium, which gave him the appearance of having receded from the view, and being diminished to a child's proportions. Its hair, which hung about its neck and down its back, was white as if with age; and yet the face had not a wrinkle in it, and the tenderest bloom was on the skin. The arms were very long and muscular; the hands the same, as if its hold were of uncommon strength. Its legs and feet, most delicately formed, were, like those upper members, bare. It wore a tunic of the purest white; and round its waist was bound a lustrous belt, the sheen of which was beautiful. It held a branch of fresh green holly in its hand; and, in singular contradiction of that wintry emblem, had its dress trimmed with summer flowers. But the strangest thing about it was, that from the crown of its head there sprung a bright clear

8. **addressed**=turned; directed.

starting up into a half-recumbent attitude 跳れ起きて半身を起した姿勢となつて。

recumbent [ri'kambənt] 横臥せる。

as close to it as I am now to you 今の私對諸君の様に、其と接近して居た。I は著者 you は讀者。(肉體的には時代と場所が隔つてゐても精神的には互に接近して居る様に)。

9. **some supernatural medium** ある不可思議なる中間物。(幽霊は一種の靈氣を持つてゐて、それが幽霊と見る人との中間にあつて、

8. 彼の寢床のカーテンは引きよせられました。いゝですか、諸君、手でですよ。そして其は、彼の足もとの方のカーテンでもなく、脊後のカーテンでもなくて、彼が面と向つて居たものであつた。寢床のカーテンが引きよせられたので、スクルウヂは驚いて半身を跳ね起すと、直ぐ目の前には、カーテンを引く此の世のものならぬ訪客が立つてゐた。其は恰も今の私對諸君の場合、精神的には諸君の對の近くに立つて居る様に、極く接近して居たのであつた。

9. 其は奇異な姿をして居て、子供の様であつた。然し、其は一種不思議な空氣に包まれて居たので、小兒と言ふよりは老人の様に見えた。その不思議な空氣は幽霊を遠くに居る様に見せ、また、小兒程の恰好に小さく見せました。その首の邊から脊にたれ下がつた髪は年寄の様に眞白であつた。然し顔には小皺一つなく膚は實に柔かさうで血色がよかつた。兩の腕は非常に長くて、筋骨逞しく、兩の手も同じ様に逞しくて、その握力も並大抵ではない様であつた。その脚足は極めて可弱さうであつたが、上の方の腕や手と同じ様にむき出しであつた。幽霊は純白の長い上衣を着て、腰の周りには燦然たる帯をしめてゐた。その輝しさは見事なものであつた。幽霊はその手に新鮮な綠色の柘を一枝もつてゐた。そしてこの冬の表象と何に矛盾して居るものは夏の草花で飾られたその着物であつた。然しその幽霊について一番不思議なことは、その頭の天邊から、煌々た

作用するので中間物と言つたのだ。))

proportions 大さ、(此の場合に複數、單數の時は釣合、割合等の意。)

the tenderest bloom was on the skin 膚は至極柔らかさうで血色がよかつた。bloom 櫻色(頬などの)(普通は花)。

upper members 腕、手、等。(members 四肢)。

sheen=brightness.

wintry emblem 冬の表象(柘はクリスマス飾りに用ひられる故)。

jet of light, by which all this was visible; and which was doubtless the occasion of its using, in its duller moments, a great extinguisher for a cap, which it now held under its arm.

10) Even this, though, when Scrooge looked at it with increasing steadiness, was *not* its strangest quality. For as its belt sparkled and glittered now in one part and now in another, and what was light one instant, at another time was dark, so the figure itself fluctuated in its distinctness; being now a thing with one arm, now with one leg, now with twenty legs, now a pair of legs without a head, now a head without a body: of which dissolving parts, no outline would be visible in the dense gloom wherein they melted away. And in the very wonder of this, it would be itself again; distinct and clear as ever.

11) "Are you the Spirit, sir, whose coming was foretold to me?" asked Scrooge.

"I am!"

The voice was soft and gentle. Singularly low, as if instead of being so close beside him, it were at a distance.

"Who, and what are you?" Scrooge demanded.

"I am the Ghost of Christmas Past."

"Long Past?" inquired Scrooge: observant of its dwarfish stature.

"No. Your past."

occasion = cause; reason.

extinguisher 消燈器、(金屬或は磁器で作られた空洞の圓錐形のもの、蠟燭の火を消すに用ひる。)

10. **with increasing steadiness** 益々じつと眼を据えて。

the dense gloom 眞暗闇。

11. **who, and what are you?** who は名前 what は職業身分を訊れる言葉。

る美しい光が射して居たことで、その光故に何でもがよく見えたのであつた。幽霊がもの憂い詩には、帽子代りに大きな消燈器を用ふるのも、屹度それが爲めであつたらう。が今はそれを腋の下にかゝへてゐた。

10. けれども、スクルウヂがぢつと眼を据えて幽霊を眺めると、此の光でさへも、幽霊の最も不可思議な性質ではなかつた。なぜならば幽霊の帯はある部分がきらりと光れば、また、他の處がきらりと光り、今明るくなつたと思へば、忽ちにして暗くなつたと言ふ有様で、幽霊の姿そのものさへゆらめいて、はつきりと見えなかつた。一本腕のものとなつたと思へば、忽ち一本脚のものとなり、また二十本脚のものとなり、忽ちにして、首なしの二本脚となり、忽ちにして、胴なしの首となつたりした。消えて行く部分は、眞暗闇の中に融けこんで何の輪郭も見えなかつた。そして、こんな不思議なことをやつてる中に、幽霊は再び、元の様に、はつきりと見分けのつく姿となつてくるのであつた。

11. 「お出になると言ふ前觸れがありました、貴方がその幽霊なんですか？」とスクルウヂは訊ねました。

「さうです！」

その聲はやさしく、穩かであつた。恰も彼の直ぐ傍に居るのではなくて、遠方にでも居る様に非常に低かつた。

「貴方はどなたですか、そしてどういふ御身分の方ですか？」とスクルウヂは訊ねました。

「私は過去のクリスマスの幽霊です。」

「ずつと昔の？」とスクルウヂは幽霊の矮小な體を眺めながら訊ねました。」

「いや、お前の過去のだ。」

dwarfish ['dwo:fiʃ] 矮小な。

stature ['stætʃə] 身長。

12) Perhaps, Scrooge could not have told anybody why, if anybody could have asked him; but he had a special desire to see the Spirit in his cap; and begged him to be covered.

"What!" exclaimed the Ghost, "would you so soon put out, with worldly hands, the light I give? Is it not enough that you are one of those whose passions made this cap, and force me through whole trains of years to wear it low upon my brow!"

13) Scrooge reverently disclaimed all intention to offend or any knowledge of having wilfully "bonneted" the Spirit at any period of his life. He then made bold to inquire what business brought him there.

"Your welfare!" said the Ghost.

14) Scrooge expressed himself much obliged, but could not help thinking that a night of unbroken rest would have been more conducive to that end. The Spirit must have heard him thinking, for it said immediately:

"Your reclamation, then. Take heed!"

It put out its strong hand as it spoke, and clasped him gently by the arm.

"Rise! and walk with me!"

15) It would have been in vain for Scrooge to plead that the weather and the hour were not adapted to pedestrian

12. **to be covered**=to put on his cap.

worldly hands 俗なる手。

the light 幽霊の頭の光は俗な慾心に対する良い心を表はす。

cap=extinguisher. (俗世の人の慾を表はす。幽霊が光明を與へて人を幸福にと思つても慾深い者が自分勝手にその光明を奪ふ。)

13. **disclaimed** (吾所爲に) 非ずと言つた。否認した。

intention to offend 悪意。

Your welfare=for your sake. お前の爲めにだ。

14. **much obliged** 非常に世話になつた。

a night of unbroken rest 起されずにぐつくり眠られる一夜、(即

12. 何故かと、誰から問はれても、恐らく、スクルウチは言ふことは出来なかつたらう。然し、彼は幽霊が帽子を冠つてゐる處を見たいといふ特別な願を持つて居た。そして、幽霊に冠つて見てくれと頼みました。

「何んだ!」と幽霊は叫びました。「お前さんは、俺が與へる光を、俗な手で早や消さうとするのか? お前さんも煩惱でもつて此の帽子を造り、長年の間、それを否が應でも眼深く冠むる様に私にさせた連中の一人なんだから、もうそれだけでも澤山ぢやないか!」

13 スクルウチは畏れ入つて、少しも悪意があつたのではないと、又、今迄に一度だつて、故意に幽霊に帽子を冠らせた様な覚えはないと言ひました。それから、彼は何御用あつて、御出になつたと思ひ切つて訊ねました。

「お前の爲を思つてだ!」と幽霊は言つた。

14. スクルウチは大變有難いと御禮を言ひましたが、然し、何にも襲はれないでよく寝られた方が、餘つ程自分の爲になるだらうと考へざるを得なかつた。幽霊は彼がさう思つてゐるのを確か覺つたとみえて、直ぐと次の様に言つた。

「ぢや、お前を改心させる爲めにだ、氣を付けなさい!」

斯う言つて、幽霊はその強い手を差し出して、スクルウチの腕を靜かに掴みました。

「お起ち! そして俺と一緒に來い!」

15. 天氣と言ひ時刻と言ひ出歩くには適しませんとスクルウチがいくら言つた處で、又、寢床は溫いが、寒暖計はずつと

ち、幽霊に襲はれたりしないで一晩よく眠ること。)

conducive [kən'dju:siv] 助けとなる。

to that end 其の目的には、(即ち to his welfare のこと。)

reclamation [rekli'meiʃən] 改心させる事。

purposes; that the bed was warm, and the thermometer a long way below freezing; that he was clad but lightly in his slippers, dressing-gown, and nightcap; and that he had a cold upon him at that time. The grasp, though gentle as a woman's hand, was not to be resisted. He rose: but finding that the Spirit made towards the window, clasped its robe in supplication.

"I am a mortal," Scrooge remonstrated, "and liable to fall."

"Bear but a touch of my hand *there*," said the Spirit, laying it upon his heart, "and you shall be upheld in more than this!"

16) As the words were spoken, they passed through the wall, and stood upon an open country road, with fields on either hand. The city had entirely vanished. Not a vestige of it was to be seen. The darkness and the mist had vanished with it, for it was a clear, cold, winter day, with snow upon the ground.

"Good Heaven!" said Scrooge, clasping his hands together, as he looked about him. "I was bred in this place. I was a boy here!"

17) The Spirit gazed upon him mildly. Its gentle touch, though it had been light and instantaneous, appeared still present to the old man's sense of feeling. He was conscious

15. **thermometer** [θɜːmɒmɪtə] 寒暖計。

a long way below freezing ずっと氷点以下。

nude=went.

clasped its robe in supplication (歎願する様にその長衣にしがみ付いた。(歎願する様に袂に縫りついたの類))

a mortal 死すべき人、神ならぬ人間。

fall=err. 人間だから兎角間違つたことをする。

Bear but.....and.....this!=If you bear....., you shall.....this! 私の手さへ、触らせて置けば、まだまだ何處迄もお前の力になつてやろう。

氷点以下に下つてると言つても、又、唯ほんにスリツバをはき寝巻を纏ひ寝帽子を冠つてゐるだけだと言つても、又、生憎、風を引いて居ると言つた處で、其は無駄であつたらう。握り方は、女の手のようにやさしかつたけれども、逆らうことは出来なかつた。で彼は起ち上つた。然し、幽霊が窓の方へ行くのを見ると、歎願する様にその長衣にしがみ付きました。

「私は唯の人間ですから、兎角過ちを致します。」と、スクルウチは抗議を申し立てました。

「なに、唯、私の手が、そこに觸つてゐるさへすればよいのだ、まだまだ何處迄もお前の力になつてやらう!」、と、幽霊は手をスクルウチの胸にあてながら言ひました。

16. かく言ひ終ると、彼等は壁を通り抜けて、廣々とした田舎道に立つた。その兩側は田甫であつた。市街は全々消え失せて終つて、何の跡かたも見えなかつた。それと共に闇も、霧も消え失せて居た。と言ふのも、雪が地上に積つて居て、すつきり晴れた、寒い冬の日であつたからです。

「おや、おや!」と邊を見廻し、兩の手を握りしめながら、スクルウチは言ひました。

「此處で私は育つたんだ、此處で子供の時に住んで居たんだ!」

17. 幽霊は彼を優しくに眺めました。幽霊が觸れたのは、極く軽く、ほんの一瞬間ではあつたけれども、此の老人の感覺にまだありありと残つて居る様であつた。彼は空中に種々雑多

16. **vestige** ['vestɪdʒ] 痕跡。

Good Heaven!=dear me! おや、おや。

17. **still present** 未だ残つて居る。

to be conscious of に気がつく。

of a thousand odors floating in the air, each one connected with a thousand thoughts, and hopes, and joys, and cares, long, long, forgotten!

"Your lip is trembling," said the Ghost, "And what is that upon your cheek?"

18) Scrooge muttered, with an unusual catching in his voice, that it was a pimple; and begged the Ghost to lead him where he would.

"You recollect the way?" inquired the Spirit.

"Remember it!" cried Scrooge with fervor; "I could walk it blindfold."

"Strange to have forgotten it for so many years!" observed the Ghost. "Let us go on."

19) They walked along the road. Scrooge recognizing every gate, and post, and tree; until a little market-town appeared in the distance, with its bridge, its church, and winding river. Some shaggy ponies now were seen trotting towards them with boys upon their backs, who called to other boys in country gigs and carts, driven by farmers. All these boys were in great spirits, and shouted to each other, until the broad fields were so full of merry music, that the crisp air laughed to hear it.

"These are but shadows of the things that have been,"

that upon your cheek (スクルウヂは涙を出してゐたのだ。)

18. **with an unusual catching in his voice** いつになく、こみ上げて聲をときらし乍ら。

pimple 面皰(=キビ)、小さな瘡(オアキ)。

blindfold=if I were blindfold. 目隠ししても。

19. **market-town** 定期に市の立つ町。

driven by farmers 百姓によつて御せられたる。(小供等が學校の寄宿に居るので、クリスマスに際し下男などが馬車で迎へにでも來たのだらう。)

to be in great spirits=to be in high spirits. 元氣な。(cf. to be in

な芳香が漂ふて居るのに氣づきました。そして、その各々の香から、ずつと昔に忘れてゐた色々な考へや、希望や、喜びや苦勞が思ひ出されたのであつた!

「お前さんの唇はふるへてるね、してお前さんの頬の上にあるのは何だね?」と幽靈は言つた。

18. スクルウヂはいつになく、こみ上げて聲をときらし乍ら、其は面皰ですと囁きました。そして、何處へでも好きな處へ連れて行つて下さいと頼みました。

「お前さんは此の道を思ひ出すだらう?」と、幽靈は訊ねました。

「覚えて居りますとも!」と、スクルウヂは熱をこめて、叫びました。「眼隠をしてでも歩けますよ。」

「長年の間忘れて居たとは不思議だね! さあずんずん行かろ。」と幽靈は言ひました。

19. 彼等は道をずつと歩いて行つた。スクルウヂはどの門でも、柱でも、樹でも、皆んな何でもを思ひ出しました。遂に、向ふの方に小さな市場町が見えて來ました。その橋や、教會や、うねり流れて居る河などが。折から、數頭の毛むじやらの仔馬がこちらへことごとやつてくるのが見えました。その脊中には子供等が乗つて居て、百姓が御してゐる田舎馬車や荷馬車に乗つてゐる他の子供達と呼び交してゐた。此等の子供達は皆んな非常に元氣で、互に大聲に話し合つてゐたので、はては、廣い野原も、楽しい聲に滿されて、すつきりとした空は、それを聞いて、笑つてゐる様であつた。

「此等はみんな往時あつた事の影に過ぎないので、彼の人等

low spirits.)

the crisp air=the sharp and fresh air. きりつとして爽かな空。

that have been 今迄にあつた處の。

said the Ghost. "They have no consciousness of us."

20) The jocund travellers came on; and as they came, Scrooge knew and named them every one. Why was he rejoiced beyond all bounds to see them! Why did his cold eye glisten, and his heart leap up as they went past! Why was he filled with gladness when he heard them give each other Merry Christmas, as they parted at cross-roads and by-ways, for their several homes! What was merry Christmas to Scrooge? Out upon merry Christmas! What good had it ever done to him?

"The school is not quite deserted," said the Ghost. "A solitary child, neglected by his friends, is left there still."

Scrooge said he knew it. And he sobbed.

21) They left the high-road, by a well-remembered lane, and soon approached a mansion of dull red brick, with a little weathercock-surmounted cupola, on the roof, and a bell hanging in it. It was a large house, but one of broken fortunes; for the spacious offices were little used, their walls were damp and mossy, their windows broken, and their gates decayed. Fowls clucked and strutted in the stables; and the coach-houses and sheds were over-run with grass. Nor was it more

20. **jocund travellers**=merry travellers. (仔馬や馬車に乗つて来る子供達。)

knew and named 知つて居て、名前を言ふことが出来た。

beyond all bounds=extremely. 法外に。

cross-roads, and by-ways 四つ角や横丁。

Out upon merry Christmas! クリスマスお目出たうもあつたものぢやない!

21. **cupola** ['kju:pələ] 屋根についでる丸屋根。

one of broken fortunes 零落せる家。one=a house.

offices 勝手或は物置。

were over-run with grass..... には草が生ひ茂つてゐた。

nor was it more retentive of its ancient state, within 家の内

は吾々のことには少しも氣がつかないのだ。」と幽霊は言つた。

20. 段々その陽氣な連中は近づいて來た。みれば、皆んなスクルウヂの知つてゐるもので、どれもこれも一名前を言ふ事が出来ました。スクルウヂは彼等を見て、法外に喜んだのは何故であつたらうか! 彼等がすれ違つた時に彼は何故その冷たい眼に露を光らせ、その胸を踊らせたのであらうか! また、彼等が各々の家路をさして、四つ角や、横丁で別れる時に、互にクリスマスお目出度うを言ひ交すのを聞いて、スクルウヂは何故喜びで満されたのであつたらうか! スクルウヂにとつて目出度いクリスマスが何だつたらう? クリスマスお目出度うもあつたものぢやない! 一體クリスマスが彼の得になどなつた事があるだらうか?

「學校は未だすつかり退けたのぢやない、友達から除けものにされた一人ほつちの子供がまだ學校に残つてゐる。」と、幽霊は言つた。

スクルウヂはそれを知つてゐますと言つて、啜り泣きした。

21. 彼等は往還から離れて、よく覚えてゐる小路へはいつて行きました。そして、間もなく、くすんだ赤煉瓦の邸に近づきました。その屋根には、小さな風見の附いた丸屋根があつて、中には銀が吊つてあつた。その家は大きな建物ではあつたが零落してゐる様に、廣い物置部屋は殆んど用ひられず、壁はじめじめして、苔が付き、窓は破れ、門は朽ちてゐました。厩の中では鶏がコッコと鳴いて、得意氣に歩いてゐた、馬車納屋や物置小屋には草が蓬と生ひ茂つてゐました。家の内部も同じ様に荒れて、昔の面影は少しもなく、寂びれかへつた玄関に、はい部も同じ様に荒れて昔の面影は少しもなかつた。retentive (昔の状態を) 保てる。

retentive of its ancient state, within; for entering the dreary hall, and glancing through the open doors of many rooms, they found them poorly furnished, cold, and vast. There was an earthy savor in the air, a chilly bareness in the place, which associated itself somehow with too much getting up by candle-light, and not too much to eat.

22) They went, the Ghost and Scrooge, across the hall, to a door at the back of the house. It opened before them, and disclosed a long, bare, melancholy room, made barer still by lines of plain deal forms and desks. At one of these a lonely boy was reading near a feeble fire; and Scrooge sat down upon a form, and wept to see his poor forgotten self as he had used to be.

23) Not a latent echo in the house, not a squeak and scuffle from the mice behind the panelling, not a drip from the half-thawed water-spout in the dull yard behind, not a sigh among the leafless boughs of one despondent poplar, not the idle swinging of an empty store-house door, no, not a clicking in the fire, but fell upon the heart of Scrooge with a softening influence, and gave a freer passage to his tears.

The Spirit touched him on the arm, and pointed to his younger self, intent upon his reading. Suddenly a man, in foreign garments: wonderfully real and distinct to look at: stood outside the window, with an axe stuck in his belt, and

earthy savour 土の息氣。savour (or savor) ['seivə].

22. **plain deal forms** 飾のない松材のベンチ、deal 松或は樅の板。

23. **not a latent....., not a squeak.....** 等の not はずつと下の but fell upon..... にかゝる。but fell=that fell not..... これこれしないものはなかつたの意。

sigh ざわつき。

swinging 重い扉のざいつざいつと言ふ音。

fell upon the head.....with a softening influence スクルウチ

つて、扉の開けつばなしになつてゐる處から澤山の部屋部屋を覗いてみると、みんな碌々飾付けもなく、冷たく、だだつ廣いばかりだつた。そして、土臭ひ息氣が鼻にふんとするし、部屋の中は冷いやりする様ながらんどうで、なんとなく、朝は度々蠟燭の光で起きて働いても充分の食物が得られない様が連想されました。

22. 彼等、幽霊とスクルウチとは、この玄関續の廊下を通り抜けて、裏口の方へ行くと、扉は開いて、長いがらんとした陰氣な部屋が見えた。中には、何の飾もない松材の腰掛や机が幾列も並んでゐるので、尙更、部屋ががらんとしてゐた此等の机の一つに、しよんほりと、一人の子供が居て、螢の様な火の傍で、本を讀んでゐました。そこでスクルウチは一つの腰掛に腰を下し、今迄忘れて居たありし昔の可愛さうな自が姿をまざまざと見て、泣きました。

23. 家の内に潜んでゐる反響も、天井裏の二十日鼠のチュウチュウ鳴き狂ふ音も、薄暗い裏庭の笕の水が溶けてぼたりぼたり落ちる雫も、萎れた白楊(ぼぶら)の葉のない枝のざわつきも、空虚(からつぽ)な倉庫が、徒らにぎいぎい言つて開いたり、閉つたりするのも、また火がぼちぼちはねるのも、一つとして、スクルウチの脳裏に影じて、その固くなつた心を柔けないものはなく、又留度もない涙の種ならぬはなかつた。

幽霊はスクルウチの腕に觸れて、精出して本を讀んでゐる若い時分の彼の姿を指して見せました。その時突然異國の身形をした男が、不思議なほど實際に居る様にまざまざと眼に見えて、窓の外に立つて居た。そして腰には一丁の斧をさし、手には

の頭上に落ちて柔げる力を與へた。即ち、スクルウチの胸に響いて、彼の固くなつた心を柔げた。

intent upon 精出せる、専心せる。

leading an ass laden with wood by the bridle.

24) "Why, it's Ali Baba!" Scrooge exclaimed in ecstasy. "It's dear old honest Ali Baba! Yes, yes, I know! One Christmas time, when yonder solitary child was left here all alone, he *did* come, for the first time, just like that. Poor boy! And Valentine," said Scrooge, "and his wild brother, Orson; there they go! And what's his name, who was put down in his drawers, asleep, at the Gate of Damascus; don't you see him! And the Sultan's Groom turned upside down by the Genii; there he is upon his head! Serve him right. I'm glad of it. What business had *he* to be married to the Princess!"

25) To hear Scrooge expending all the earnestness of his nature on such subjects, in a most extraordinary voice between laughing and crying; and to see his heightened and excited face: would have been a surprise to his business friends in the city, indeed.

24. **Ali Baba** ['æli'ba:bə] 「アラビアン・ナイト物語」に出てくる人物。

Valentine and his wild brother, Orson フランス中世紀の物語にある Pepin 王の妹の Bell'sant の双生児、Orson の方を wild brother と言ふのは赤児の時に熊に連れて行かれて山中にて熊の子と共に育てられたからである。力量無双の男で丁度日本の金太郎の様だ。一方 Valentine は叔父の Pepin 王に育てられ、立派な Green Knight となり Duke of Aquitaine の姫を娶つた。彼は後に Orson を救ひ出した。

what's his name, Damascus アラビアン・ナイト物語中 "The Story of Noureddin Ali and Bedreddin Hassan" 参照のこと。Bedreddin Hassan と言ふのは土耳其の Basora の宰相の子で、才智秀れ眉目美しき青年であつたが父 Noureddin の死後二十歳にして宰相となつたが、その喪に服する爲め参朝を怠つたと言ふかどで Basora 王より追放されたが、ある夜睡つて居る内に gen'i (魔鬼) の爲めに埃及は Cairo にやられた。丁度此の地には埃及の宰相をしてゐる叔父が居り、それに非常に美しい姫があつた。(之が the Princess である。) 所で埃及王は従僕の Hunchback と言ふ賤しい醜い男をその婿にする様命じた。然し、結婚の夜に魔鬼は Bedreddin とその男とをとり代へて終つた。もし

薪を積んだ驢馬の手綱を曳いて居ました。

24. 「おや、あれあアリ、ババだ！」とスクルウチは夢中になつて叫んだ。「あれあ、正直なアリ、ババ爺さんだ！さうだ、さうだ知つてゐる！或る年のクリスマスにあそこに一人ほつちで居る子供が皆んなにほりつばなされて、一人きりで此處に居た時、初めて、丁度此んな風に、やつて来たのがあのアリ・ババだつた。可愛思な兒だ！それから、ヴァレンタインも、」とスクルウチは言つた。その野山育ちの兄弟オオスンも、あれあそこを行つてゐる！それから、睡つてゐる内に、ダマスカスの門の處で、下ヅボンのまゝで下された男の名は何と言つたつけ、その男も居るぢやないか！それから、埃及王(サルタン)の従僕で、魔鬼の爲めに眞逆様にされた男が、あそこに、逆立ちをして御座る！いい氣味だ！こいつは愉快だ！彼んな奴が姫君の婿にならうなぞと、何ちふ事つた！」

25. スクルウチが笑つてゐるとも、泣いてゐるともつかない途方もない聲を出して、こんなことを一生懸命に言つてゐるのを聞いたり、彼の逆上せて、興奮してゐる顔を見たりしたら、實際、市中に居る彼の商賣仲間は驚いたらう。

て、下股引をはいて、新妻と寢に就いたが今度は睡つてゐる内に魔鬼によつて、Damascus の門の處へやられ、股引をはいたままで下された。此の後再び Cairo に歸つて彼女の婿となつた。一方醜い従僕の Hunchback は魔鬼の爲めにさんざんにやられ、頭を下に眞逆様になつて終つた。

Sultan's Groom 埃及王の従僕 Hunchback のこと。

turned upside down 逆立ちになつた。

Genii ['dʒi:niai] 單数は Genie 亞刺比亞物語中の魔鬼、(天使[Angel]よりも低級にして、人、動物の形にして現はれ人に對して不可思議な力を有する者。)

upon his head 逆様に。

Serve him right いい氣味だ、當り前だ。

"There's the Parrot!" cried Scrooge. "Green body and yellow tail, with a thing like a lettuce growing out of the top of his head; there he is! Poor Robin Crusoe, he called him, when he came home again after sailing round the island. 'Poor Robin Crusoe, where have you been, Robin Crusoe?' The man thought he was dreaming, but he wasn't. It was the Parrot, you know. There goes Friday, running for his life to the little creek! Halloo! Hoop! Halloo!"

26) Then, with a rapidity of transition very foreign to his usual character, he said, in pity for his former self, "Poor boy!" and cried again.

"I wish," Scrooge muttered, putting his hand in his pocket, and looking about him, after drying his eyes with his cuff: "but it's too late now."

"What is the matter?" asked the Spirit.

"Nothing," said Scrooge. "Nothing. There was a boy singing a Christmas Carol at my door last night. I should like to have given him something: that's all."

The Ghost smiled thoughtfully, and waved its hand: saying as it did so, "Let us see another Christmas!"

27) Scrooge's former self grew larger at the words, and the room became a little darker and more dirty. The panels

25. **expending all the earnestness of his nature** あらん限りの熱情を費して、即ち、一生懸命になつて。

the parrot 此の鸚鵡はロビンソン・クルーソーが無人島に流された時、捕へて飼ひ馴らしたもので、彼が島を廻り歸つて疲れてゐると彼の名を呼んで夢かとはばかりに驚かせたのであつた。

lettuce ['letis] 萵苣(ちしや)

Friday ロビンソン・クルーソーが孤島に居た時、助けて下僕となしたアメリカ印度人、助けた日が金曜日だつたのでかく名付けた。

hoop [hu:p] ほーほーと呼ぶ聲。

26. **with a rapidity of transition** 急に打つて變つて。

I should likeしてやり度かつたと思ふ、(自分の少年時の姿を

「あそこには、鸚鵡が居る」とスクルウチは叫んだ。「緑の體に、黄色の尾、頭の方からは萵苣(ちしや)の様なものを生やしてゐる。あそこに、居る、居る! 可愛想なロビン・クルーソーが、島をめぐつて歸つてくると斯う言つたつけ。「可愛想なロビン・クルーソー、お前は今迄何處に居た。ロビン・クルーソー、さう言はれて、ロビン・クルーソーは夢かとはばかり思つたが、夢ぢやなくて、それは鸚鵡が呼んだのだつたね。あそこへフライデーが行く、小さな入江をさして、一生懸命驅けて行くわ! おおい! ほーい! おい!」

26. それから、彼は急にいつものとは、全く打つて變つた性質となつて、昔の自分が可愛想になつて、「可哀想な兒だ!」と二度も繰り返して言ひました。

「ならうことなら」とスクルウチは、袖口で涙をふいてから手をポケットに入れて、あたりを見廻しながら、つぶやきました。「がもう晩い、」

「どうしたのだ?」と幽霊は尋ねました。

「何でもないのです。」とスクルウチは言ひました。「何でもないのです。昨晚私處の門口で、クリスマスの歌を歌つてゐる小供がありました、私はその兒に何か呉れてやればよかつたと思つた。だけのことなんです。」

幽霊は何か思ふ處がありさうに微笑み、且つ手を振つて、言ひました。「さあ、も一つクリスマスを見せて上げよう!」

27. 斯う言ふと共に、スクルウチの昔の姿は、大きくなり部屋は少し餘計に暗くなり、——しほ汚くなりました。箆板

みてからは、すかり變つて、宵の口にはうるさいと言つて簿記棒でおどかして追つたらつた子供が可愛想になつて来て何かやればよかつたと思つた。

shrunk, the windows cracked; fragments of plaster fell out of the ceiling, and the naked laths were shown instead; but how all this was brought about, Scrooge knew no more than you do. He only knew that it was quite correct; that everything had happened so; that there he was, alone again, when all the other boys had gone home for the jolly holidays.

28) He was not reading now, but walking up and down despairingly. Scrooge looked at the Ghost, and with a mournful shaking of his head, glanced anxiously towards the door.

It opened; and a little girl, much younger than the boy, came darting in, and putting her arms about his neck, and often kissing him, addressed him as her "Dear, dear brother."

"I have come to bring you home, dear brother!" said the child, clapping her tiny hands, and bending down to laugh. "To bring you home, home, home!"

"Home, little Fan?" returned the boy.

29) "Yes!" said the child, brimful of glee. "Home for good and all. Home, for ever and ever. Father is so much kinder than he used to be, that home's like Heaven! He spoke so gently to me one dear night when I was going to bed, that I was not afraid to ask him once more if you might come home; and he said Yes, you should; and sent me in a coach to bring you. And you're to be a man!" said the child, opening her eyes, "and are never to come back here; but

27. **laths** 木摺(きずり) 漆喰を塗る時下に張るへぎ板。
the jolly holidays 楽しい休暇、(クリスマスの休暇、十二月二十五日—一月六日迄。

28. **a little girl** スクルウチの妹、例の甥のお母さんとなつた人。スクルウチはこの妹に親切でなかつた。

Fan 娘の名前、即ちスクルウチの妹の名。

29. **brimful of glee**=full of glee; in high glee. 嬉しさ一杯で、悦び勇んで。brimful 溢れさうに一杯な。(cf. brimful of wine; brimful of humour.)

はゆがみ、窓にはひびが入り、天井は漆喰が處々落ちて、其處にははけた木摺(きずり)が現はれてゐました。然し何うしてこんなになつたかは、諸君同様、スクルウチにも分らなかつたが、彼は唯、全くこの有様が間違なく、實際あつた通りで、外の子供達が、楽しい休暇で家へ歸つた時も、彼はまた、そこに唯一人残つて居たといふことだけは分つて居ました。

28. その少年は今度は本を讀まずに、やけになつて、あちこち歩いて居た、スクルウチは幽霊を見て、悲しさうに頭を振つて、戸口の方を心配さうに一寸見ました。

すると、扉が開いて、少年よりもずつと年下の女の子が駆け込んで来て、その腕を少年の首にかけて、幾度も幾度も、接吻しながら、「兄ちゃん、兄ちゃん、」と呼びました。

「兄ちゃん、私ね、兄ちゃんをお迎へに来たのよ!」とその女の子は可愛い手をたゞき、身を屈めながら笑つて言ひました。「兄ちゃんを連れて行くのよ、お家へ、お家ね、お家へ!」

「お家へだつて、ファンちゃん?」とその少年は言つた。

29. 「さうよ!」と女の子は嬉しくて堪らない様に言つた。「お家に歸り切りなのよ、いつまでもお家にゐることよ、お父ちゃんはね、前よりかずつと優しくなつたから、お家は天國の様なのよ!ある晩、私がお床へはいらうとしてると、お父ちゃんが大へんお優しく話しかけて下さつたの、だから、私心配しなくてもう一遍、兄ちゃんを連れて来てもいいつて、お尋ねしたのよ。すると、お父ちゃんは、いゝとも、連れておいでつて仰有つて、私を馬車にのせて、兄ちゃんをお迎へにお寄こしになつたの。そして、兄ちゃんはもう大人になるんだつて!」とその女の子は眼をぱつちり開いて言ひました。「そして、もう決して、こんな處へは歸つて来るんぢやないことよ、でなにより

for good and all=permanently 永久に。(例 I have come home for good and all. 歸り切りに歸つたのだ。)

first, we're to be together all the Christmas long, and have the merriest time in all the world."

30) "You are quite a woman, little Fan!" exclaimed the boy.

She clapped her hands and laughed, and tried to touch his head; but being too little, laughed again, and stood on tiptoe to embrace him. Then she began to drag him, in her childish eagerness, towards the door; and he, nothing loth to go, accompanied her.

31) A terrible voice in the hall cried, "Bring down Master Scrooge's box, there!" and in the hall appeared the school-master himself, who glared on Master Scrooge with a ferocious condescension, and threw him into a dreadful state of mind by shaking hands with him. He then conveyed him and his sister into the veriest old well of a shivering best-parlor that ever was seen, where the maps upon the wall, and the celestial and terrestrial globes in the windows, were waxy with cold. Here he produced a decanter of curiously light wine, and a block of curiously heavy cake, and administered instalments of those dainties to the young people: at the same time, sending out a meagre servant to offer a glass of "something" to the postboy, who answered that he thanked the gentleman, but if it was the same tap as he had tasted before, he had rather not. Master Scrooge's trunk being by this

long (adv.)=through the whole duration. 間中。(all day long 終日。all one's life long 生涯)。

You are quite a woman ほんとに大きくなつたね。

30. **nothing loth**=not at all d'sliking. 大悦びで、(えたりかしこと) nothing 副詞。loth=loath [louθ] (形容詞) 好まざる、厭へる。

31. **with ferocious condescension** 恐しく町噂に、ferocious 猛悪なる、恐しい。condescension (下々に對する) 謙遜。

veriest very の最上級、emphatic use. 全く、丸で、の意。

クリスマスの間中私達は一緒に居て、世界中で一等面白いことをして遊びませう。]

3). 「お前はまるでおとなになつたやうね、ファンちゃん！」と少年は叫んだ。

女の子は手をたゞいて笑つて、兄の頭に觸らうとしたが、小さくてとどかなかつたので、また笑ひ、今度は爪先で立つて、彼に抱きついた。それから彼女は、子供らしい熱心さで戸口の方へ引つぱり始めました。すると少年も大悦びで妹に隨いて行つた。

31. 「スクルウチの鞆をこつちへ持つて來い！」と廣間で恐しく大きな聲がして、そこへ、先生が御見えになつた。先生は恐しく町噂な態度を見せてスクルウチを取扱ふので、スクルウチは握手された時には縮み上つて終ひました。先生はそれからスクルウチとその妹とを全く古井戸の様に顛ひつく様に冷い、一番よい部屋に通しました。その壁には地圖が掛つて居り、窓の所には、地球儀や天體儀があつて、此等は冷たくて蠟の様であつた。此處で先生は一瓶の奇妙に薄めた葡萄酒と、一塊の奇妙に重い御菓子とを出して、其等の御馳走を子供達に分けてやつた。それと同時に、瘦せこけた小使を使つて馭者にも何か一杯飲ませてやらうとすると、馭者は、どうも有難う御座んすが前に飲んだのと同じ口のなら、もう結構で御座います、と答

shivering best-parlor 身顛ひする様に冷たい一番よい部屋。

celestial and terrestrial globes 地球儀と天體儀。

decanter 酒等入れる口の細長い下脹れの瓶。

administered 與へた。

postboy=postilion 馭者。

the same tap 同じ口、(元來 tap は汲み出すの意だが、それから汲み出した酒のことを言ひ、又(酒の何)口の意となつてゐる。)

time tied on to the top of the chaise, the children bade the schoolmaster good-by right willingly; and getting into it drove gayly down the garden-sweep: the quick wheels dashing the hoar-frost and snow from off the dark leaves of the evergreens like spray.

32) "Always a delicate creature, whom a breath might have withered," said the Ghost. "But she had a large heart!"

"So she had," cried Scrooge. "You're right. I will not gainsay it, Spirit. God forbid!"

"She died a woman," said the Ghost, "and had, as I think, children."

"One child," Scrooge returned.

"True," said the Ghost. "Your nephew!"

Scrooge seemed uneasy in his mind; and answered briefly, "Yes."

33) Although they had but that moment left the school behind them, they were now in the busy thoroughfares of a city, where shadowy passengers passed and repassed; where shadowy carts and coaches battled for the way, and all the strife and tumult of a real city were. I was made plain enough, by the dressing of the shops, that here too it was Christmas time again; but it was evening, and the streets were lighted up.

34) The Ghost stopped at a certain warehouse door, and asked Scrooge if he knew it.

"Know it!" said Scrooge. "Was I apprenticed here!"

garden-sweep 庭の曲り、即ち庭に曲つてついてゐる路。

32. **she had a large heart** 彼女は親切で氣立がよかつた。

God forbid=may God forbid from gainsay 異存があつてなるものですか。

she died a woman 彼女は大人になつてから死んだ。(cf. to die a

へました。此の間に、スクルウヂのトランクは馬車の上に縛りつけられてゐたので、その子供達は喜び勇んで先生に別れを告げて馬車に乗ると、庭路を勢よく走らせて行つたので、その速く廻る車輪は常磐木の黒ずんだ木葉から霜や雪を飛沫の様にふり落して勢よく進んで行つた。

32. 「いつもか弱さうな兒で微風にでもしほれて終ひさうに見えたが、情深い、女兒(こ)だつた!」と幽靈は言つた。

「さうでした。貴方の仰有る通りです。それに異存はありません。幽靈さん、あつてなるものですか。」

「あの子は大人になつてから死んで、確か、子供があつたと思ふが。」と幽靈は言つた。

「一人ありました。」とスクルウヂは答へました。

「ほんにさうだ。お前の甥がそれだつた!」と幽靈は言つた。

スクルウヂは心中不安を感じた様子であつた。そこで唯「さうです」とだけ答へました。

33. 幽靈とスクルウヂとはたつた今學校を後にして來たのであつたが、もう彼等はとある町の繁華な大通へ來て居た。そして、影法師の様な通行人が往來して居り、影法師の様な荷馬車や馬車が道を争つて居て、その争鬪雜沓の様は本物の町の通りであつた。店々の飾などから見れば、此處もまた、クリスマスのお祭であることは明瞭であつた。然し夕方なので、街々は燈がついてゐました。

34. 幽靈はとある商店の戸口に立つて、スクルウヂに知つてゐるかどうかと尋ねました。

「知つてますとも、私は此處で奉行してゐたのですもの!」とスクルウヂは言つた。

millionaire 金満家になつて死ぬ。

They went in. At sight of an old gentleman in a Welsh wig, sitting behind such a high desk, that if he had been two inches taller he must have knocked his head against the ceiling, Scrooge cried in great excitement:

35) "Why, it's old Fezziwig! Bless his heart; it's Fezziwig alive again!"

Old Fezziwig laid down his pen, and looked up at the clock, which pointed to the hour of seven. He rubbed his hands; adjusted his capacious waistcoat; laughed all over himself, from his shoes to his organ of benevolence; and called out in a comfortable, oily, rich, fat, jovial voice:

"Yo ho, there! Ebenezer! Dick!"

36) Scrooge's former self, now grown a young man, came briskly in, accompanied by his fellow-prentice.

"Dick Wilkins, to be sure!" said Scrooge to the Gohst. "Bless me, yes. There he is. He was very much attached to me, was Dick. Poor Dick! Dear, dear!"

"Yo ho, my boys!" said Fezziwig. "No more work to-night. Christmas Eve, Dick. Christmas Ebenezer! Let's have the shutters up," cried old Fezziwig, with a sharp clap of his hands, "before a man can say Jack Robinson!"

34. **Welsh wig** ウェルス風の假髮、舊式な假髮。(當時の人は假髮を冠つてゐた。)

35. **why** おや。

bless his heart=may God bless his heart.

organ of benevolence 仁慈の器械、即ち、頭の事。

yo ho よー、おーい。(人の注意を惹く時の掛け聲、少し離れてると there を使ふ。)

35. **fellow-prentice**=fellow-apprentice 小僧仲間、奉公仲間。

bless me おやおや。

attached to me 懐いてゐた。

before a man can say Jack Robinson=immediately. 故事より出た熟語で「大急ぎに」の意、(昔 Jack Robinson と言ふ、性急な男があつたと言ふことである。)

二人は中へはいつて行きました。すると、一人の年取つた紳士が居て、もう二寸も高ければ、頭を天井にぶつつけたに違ひない程に高い机の後に腰をかけてゐたが、そのウェルス風な假髮(かつら)をつけた老紳士を一目見ると、スクルウチは躍り上る様に喜んで、叫びました。

35 「おや、フェヂウイツグの御老人だ! まーフェヂウイツグさんがもう一度生き返つたのだ!」

フェヂウイツグ老人はペンを置いて、柱時計を見上げると、時計は七時を指して居ました。老人は両の手を擦り、だぶだぶしたチョッキを直して、足の先から頭の天邊まで、身體中をゆすぶる様に笑つて、氣持のいい、柔かな、たつぷりした幅のある陽氣な聲で呼び立てました。

「やー、そこに居るのはエビニイザーとデイツクぢやないか」

35. スクルウチの昔の姿で此の時は最ういい若い衆になつて居るのが、彼の小僧仲間と一緒に、大急ぎではいつて來ました。

「確かに、デイツク・ウイルキンズだ!」とスクルウチは幽靈に言つた。「おや、おや、さうだ。あそこに居るな。あのデイツクは非常に私に懐いて居たが、可哀想にデイツクは! まあ!」

「お——お前達、」とフェヂウイツグは言つた。「今夜はもう仕事はお仕舞ひにしよう。クリスマスの前夜だからな、デイツク。クリスマスだ、エビニイザー! さあ閉めて終う。」とフェヂウイツグ老人は両手をぼんと打つて言ひました。「さあ、さあ、てつとり早く!」

て、人の家へ行つても直ぐに歸つたので、人はその名を呼ぶ暇もなかつたと言ふことである。)

37) You wouldn't believe how those two fellows went at it! They charged into the street with the shutters—one, two, three—had 'em up in their places—four, five, six—barred 'em and pinned 'em—seven, eight, nine—and came back before you could have got to twelve, panting like race-horses.

"Hilli-ho!" cried old Fezziwig, skipping down from the high desk, with wonderful agility. "Clear away, my lads, and let's have lots of room here! Hilli-ho, Dick! Chirrup, Ebenezer!"

38) Clear away! There was nothing they wouldn't have cleared away, or couldn't have cleared away, with old Fezziwig looking on. It was done in a minute. Every movable was packed off, as if it were dismissed from public life for evermore; the floor was swept and watered, the lamps were trimmed, fuel was heaped upon the fire; and the warehouse was as snug, and warm, and dry, and bright a ball-room, as you would desire to see upon a winter's night.

39) In came a fiddler with a music-book, and went up to the lofty desk, and made an orchestra of it, and tuned like fifty stomach-aches. In came Mrs. Fezziwig, one vast substantial smile. In came the three Miss Fezziwigs, beaming and loveable. In came the six young followers whose hearts

37. **went at it.** to go at (a task) 遣つ付ける。(They went at it with set teeth. 大決心で遣つ付けた。)

had 'em up=had them up. them=shutters.

chirrup [tʃɪrəp] 此處では單なる掛聲。

38. **movable** 動かす事の出来る道具類の事。

packed off.....**evermore** 永久に公の生活からお拂箱にされた様に、取片づけられた。(道具類を擬人化してゐる處に面白みがある。)

as you would desire to see you 眺向に。

39. **In came a fiddler**=a fiddler came in.

orchestra [ɔ:kɪstrə] 囃し所、奏樂所。

like fifty stomach-aches 五十人の者が胃痛を起してゐなつてゐる

37. この二人の小僧さんが、主人の言ふ通り、どんなに早くやつたか、それは本統だと思はれない位だつた！彼等は——1. 2. 3. で錠戸を持つて表へ駆け出し、——4. 5. 6. ——で入れて終ひ、——7. 8. 9. ——で門をさして、掛釘で止め、——そして12と數へきらぬ中に、もう競馬の様に喘ぎながら、歸つて來た。

「よ——！」とフェジウイツグ老人は叫んで、高い机から不思議な程の身軽さで、跳び下りた。「さあ、片付けるんだ、奴さん、此處を廣くするのだ！おいドイツクヤ！これ、エビニーザーヤ！」

38. 片付け！フェジウイツグ老人の監督と來てるので、小僧さん達は何一つとても片づけずに置くことも出来なければ、何一つとして片づけられないものとてもなかつた。掃除は一寸の間に出來て終つた。動かせるものは何でもかでもみんな、もう二度と用がないと言つた様にと取片づけてしまひ、床は掃いて水を撒き、ランプの手入をし、薪を爐にどつさりくべた。かくして、店は冬の夜には眺向の氣持のよい、暖かいさつぱりした明るい、舞踏室となつた。

3). そこへ、ヴァイオリン弾きが樂譜を持つて、はいつて來て、例の高い机の處へ上つて行つて、そこを囃場(オーケストラ)にして五十人の胃痛病みがうめく様な音をたて、調子を合せてゐた。其處へ、満身これ笑顔と言つた様なフェジウイツグ夫人がはいつて來た。美しくて愛らしいフェジウイツグの三人の娘さんがはいつて來た。それから、娘さんに心を焦してゐる六人の若衆がはいつて來た。それからこの店の仕事に使はれ

やうな不調和な音を出して調子を合してゐる。

one vast substantial smile=laughing with her whole face. 満身これ笑顔と言つた姿で。

they broke. In came all the young men and women employed in the business. In came the housemaid, with her cousin, the baker. In came the cook, with her brother's particular friend, the milkman. In came the boy from over the way, who was suspected of not having board enough from his master; trying to hide himself behind the girl from next door but one, who was proved to have had her ears pulled by her mistress. In they all came, one after another; some shyly, some boldly, some gracefully, some awkwardly, some pushing, some pulling; in they all came, anyhow and everyhow.

40) Away they all went, twenty couple at once; hands half round and back again the other way; down the middle and up again; round and round in various stages of affectionate grouping; old top couple always turning up in the wrong place; new top couple starting off again, as soon as they got there; all top couples at last, and not a bottom one to help them! When this result was brought about, old Fezziwig, clapping his hands to stop the dance, cried out, "Well done!" and the fiddler plunged his hot face into a pot of porter, especially provided for that purpose. But scorning rest, upon his reappearance, he instantly began again, though there were no dancers yet, as if the other fiddler had been carried home, exhausted, on a shutter, and he were a bran-new man resolved to beat him out of sight, or perish.

board=food 食物。

next door but one 又隣、一軒置いて隣。

awkwardly [ˈɔːkwədli] 不作法に、不細工に。

anyhow and everyhow 何うにか斯うにか。

40. **couple** 男女二人で一組になつてゐる。

the middle (部屋の)真中。

old top couple=former top couple. さつきの先頭の組。

brought about 生じた。

upon his reappearance (大杯から)顔を現はすと。

a bran-new man 全くの新手。 bran-new=brand-new. 眞新しい。

てゐる若い男や女が皆んなはいつて来た。それに、下女がその従兄の麵麩屋をつれて、はいつてくるし、飯炊き女はその兄の親友の牛乳配達をつれてはいつて来た。それから、向側の家の小僧もやつて来た。この子は、その主人から碌々食物をあてがはれて居ないのぢやないかと想はれる様な様子をしてゐるが、一軒置いて隣から来た娘の脊後に隠れようとした。この娘はお上さんから耳を引つばられた事が分つた。次から次と、内恥かしさうに来るものもあれば、押強くやつて来るもありしとやかなものもあれば、無作法なものもあり、押すものもあれば、引張るのもあると言つた具合で、それでも何うにか斯うにか、皆んなはいつて来た。

40. 皆んなが出て踊りだしたので、立ち所に二十組も出来た。手は半分程廻つて、また反対の方へ舞ひ戻り、真中へ来るかと思ふと、また向ふへ行き、あつちでも、こつちでもお安くない同志がぐるぐると踊つてゐた。先頭組がいつもとんでもない處で向を變へ、新たに先頭になつた組も其處まで来ると直ぐにまた引き返して行き、終ひには、どれもこれもが先頭組になつて、それに續く殿組は一組もないと言ふ有様、果がこんな具合になつた時、フェジウイツグ老人は、手をたたいて、舞踏を中止させ「大出来、大出来！」と言つた。とヴァイオリン弾きはほてつた顔を、特に用意されてゐた黒ビールの大杯の中に突込んだ。然し、顔を杯から現はすと、休むでどうなるものかと言ふ調子で、まだ踊り手もないのに、直ぐとまた始めました。その有様は、宛然、先きのヴァイオリン弾きは、疲れ切つて、戸板に載せられて、家へ送り返され、彼は全くの新手で、さつきのヴァイオリン弾きよりすつと優れた處を見せよう、それとも倒れるまでやるのだと意氣込んでゐる様であつた。

beat him out of sight=beat him completely. 彼に遙に打ち勝つ。(him とはビールを飲まない内の彼自身。out of sight は「見えぬ所に」の意もあるが此處では「遙に」「優に」の意。)

41) There were more dances, and there were forfeits, and more dances, and there was cake, and there was negus, and there was a great piece of Cold Roast, and there was a great piece of Cold Boiled, and there were mince-pies, and plenty of beer. But the great effect of the evening came after the Roast and Boiled, when the fiddler (an artful dog, mind! The sort of man who knew his business better than you or I could have told it him!) struck up "Sir Roger de Coverley." Then old Fezziwig stood out to dance with Mrs. Fezziwig. Top couple, too; with a good stiff piece of work cut out for them; three or four and twenty pair of partners; people who were not to be trifled with; people who would dance, and had no notion of walking.

42) But if they had been twice as many—ah, four times—old Fezziwig would have been a match for them, and so would Mrs. Fezziwig. As to her, she was worthy to be his partner in every sense of the term. If that's not high praise, tell me higher, and I'll use it. A positive light appeared to issue from Fezziwig's calves. They shone in every part of the dance like moons. You couldn't have predicted, at any given

41. forfeits 賭事。

negus [ˈniːɡəs] ニーガス酒、(一種の混合酒)

Cold Roast 冷たくして食べる焼肉。

Cold Boiled 冷たくして食べる煮肴。

mince-pies 細切肉や林檎でこしらへた一種の肉餛飩、クリスマス等によく作る。

the great effect 眼目、肝心な處。

struck up=began to play.

Sir Roger de Coverley 舊式な舞踏の名前、此の名は元來 Addison の "The Spectator" 中に出てくるクラブの一員につけたもので、Anne 女王時代の親切な田舎紳士の典型を示したもので、舞踏は Waeestirshire の騎士 Sir Roger de Coverley の祖父 Roger of Cowley が創めたと言ふ。

work cut out for them=work prepared for Mr. and Mrs. Fezziwig. 彼等に誂ひ向きの仕事。(the work which was cut out for [=suite. 10])

41. 尚ほ幾番かの舞踏があり、それから賭事があり、また舞踏があつて、それから、菓子や混合酒が出され、大きな冷焼肉に、大きな冷煮肴が出るし、それに肉餛飩や、ビールも澤山來ました。然し、この晝の肝心な處は、焼肉や煮肴が済んだ後例のヴァイオリン弾き(此奴はなかなか抜目のない奴でしてね! 貴方々や私から言はれるよりも先に、ちやんと、自分の仕事を心得て居ると言ふ奴ですがね!)これが、サー・ローチャード・カヴァリイを弾き始めた時でした。その時、フェジウヰグ老人は列から中央まで出て来て、その夫人と踊り出した。これもまた先頭組になつたので、並大抵の仕事ぢやなかつたが、この二人にとってはお誂ひ向きであつた。相手は二十三四組あつて何れも馬鹿には出來ない人々で剛の者で歩くなつてなことは少しも念頭に置かず、踊り抜かうと言ふ連中であつた。

42. 然し、假令、相手が二倍否四倍あつたとしても、フェジウヰグ老人はそれ等のものに引けは取らなかつたであらう。フェジウヰグ夫人とてもさうだつたらう。此夫人の如きは何から言つてもフェジウヰグの相手たるべき價值があつた。此でも賞め足りないならひとつほめる言葉を教へて貰ひ度い。さうすれば其を使ひませう。フェジウヰグの脹脛(ふくらはぎ)の邊からは明々とした光が出て居る様に思はれた。其の光は月の様に、踊つて居る處を隈なく照しました。次には此二

them.)

not to be trifled with 冗談あしらひにはされない。戯弄されない。

42. would have been a match for them 彼等に相手になつてひけを取らなかつたらう。

in every sense of the term 言葉のあらゆる意味に於て。(ダンスの對手にしても wife としても)

tell me higher 次に praise を附けてみよ。

positive light 明白なる光、眞の火。

time, what would have become of them next. And when old Fezziwig and Mrs. Fezziwig had gone all through the dance; advance and retire, both hands to your partner, bow and curtsy, corkscrew, thread-the-needle, and back again to your place; Fezziwig "cut"—cut so deftly, that he appeared to wink with his legs, and came upon his feet again without a stagger.

43) When the clock struck eleven, this domestic ball broke up. Mr. and Mrs. Fezziwig took their stations, one on either side of the door, and shaking hands with every person individually as he or she went out, wished him or her a Merry Christmas. When everybody had retired but the two 'prentices, they did the same to them; and thus the cheerful voices died away, and the lads were left to their beds; which were under a counter in the back-shop.

44) During the whole of this time, Scrooge had acted like a man out of his wits. His heart and soul were in the scene, and with his former self. He corroborated everything, remembered everything, enjoyed everything, and underwent the strangest agitation. It was not until now, when the bright faces of his former self and Dick were turned from them, that he remembered the Ghost, and became conscious that it was looking full upon him, while the light upon its head burnt very clear.

45) "A small matter," said the Ghost, "to make these silly folks so full of gratitude.

"Small!" echoed Scrooge.

thread-the-needle 手を繋ぎ合して其下を潜る遺方。

cut 跳び上り様素早く足を二回ほど交互する。

43. **took their stations** 立つた。

did the same 來客に對して握手したり、クリスマスを祝つたと同じ様にした。

a counter in the back-shop 奥廣の勘定臺。

人がどうなるかと言ふことを、その刻々に豫言することは誰も出来なかつたらう。かくして、フェジウヰグ老夫妻が前へ進んだり後退りしたり、両手を取り合つたり、頭を下けたりお辭儀をしたり、螺旋状に進んだり、針糸通しをやつたり、あらゆる踊を踊り盡して、前の所へ戻つた時に、フェジウヰグは「カット」(一種の跳ね上り)をやつた。——實に素早いカットでまるで脚が譚きをしてる様だつた。然も一寸も蹣跚いたりしないで立ち直つたのでした。

4. 時計が十一時を打つと、此家庭舞踊會は解散しました。フェジウヰグ夫人は戸口の各側に立つて、男の人やら、女の人やらが出て行く毎に、誰にも彼にも一一握手をして、クリスマスの祝賀を述べました。全ての人が歸つて、例の小僧さん二人きりになると、此等のものにも對しても夫人は同じく握手を與へて、クリスマスを祝ひました。かくして、歡びに満ちた聲も靜まつて、小僧さんは奥の勘定臺下の寢床へとはいり込んだ。

44. 此の間絶へず、スクルウヂは本性を失つた人の様に振舞つてゐた。彼は身も靈もその場面に打込むでしまつて、昔の自分と一緒になつた。彼はあらゆるものを離れ、あらゆるものを憶ひ出し、あらゆるものを樂しみ、そして、不思議此の上ない心の動搖を感じた。彼は昔の自分やドイツの快活な顔が消え去つた時に、漸く幽靈のことを憶ひ出し、その幽靈が自分をじつと視つめてゐることに氣が付いた。その間、幽靈の頭上の光は明々と燃えてゐた。

45. 「くだらない事だ。こんな馬鹿者共をあんなにまで有難がらせるなんて、」と幽靈は言つた。

「くだらない事ですつて！」と、スクルウヂは鸚鵡返しに言つた。

44. **a man out of his wits** 本性を失つた人。
turned from them them=Scrooge and the Ghost.

The Spirit signed to him to listen to the two apprentices, who were pouring out their hearts in praise of Fezziwig; and when he had done so, said,

"Why! Is it not? He has spent but a few pounds of your mortal money: three or four perhaps. Is that so much that he deserves this praise?"

46) "It isn't that," said Scrooge, heated by the remark, and speaking unconsciously like his former, not his latter, self. "It isn't that, Spirit. He has the power to render us happy or unhappy; to make our service light or burdensome; a pleasure or a toil. Say that his power lies in words and looks; in things so slight and insignificant that it is impossible to add and count'em up: what then? The happiness he gives, is quite as great as if it cost a fortune."

47) He felt the Spirit's glance, and stopped.

"What is the matter?" asked the Ghost.

"Nothing particular," said Scrooge.

"Something, I think?" the Ghost insisted.

"No," said Scrooge, "No I should like to be able to say a word or two to my clerk just now. That's all."

His former self turned down the lamps as he gave utterance to the wish; and Scrooge and the Ghost again stood side by side in the open air.

45. were pouring out their hearts in praise ofを賞めることに心を注ぎ出してゐた、即ち、衷心から賞めてゐた。

had done so=had listened to the two apprentices.

It is not? =It is not a small matter?

46. say that=even though. と言つた處で、とは言へ。

What then? =what is the result then? ぢやどうだと言ふのです? (それでも構はないぢやありませんか。)

47. I should like to.....now! (スクルウヂは自分が番頭に對して殘酷だつたことを悔ひ一言二言でも親切な言葉と言ふことが出来ればと思つた。)

幽霊は、二人の小僧がフェジウィツグを心から賞めて居るのをよく聽けとスクルウヂに合圖した。そして、彼がその通りすると、幽霊は言ひました。

「や! さうぢやないかね? フェジウィツグは僅か數磅、高々三四磅使つただけぢやないか。それでそんなに賞められる價があるのかい?」

45. 「そのためぢやありません」と、スクルウヂはその言葉を聞いて躍起となつて言つた。然も、現在の自分ではなくて、吾知らず昔の自分の様になつて、言ふのであつた。「そのためぢやありません、幽霊さん。あの人は私達を幸福にでも不幸にでもする力をお持ちなんです。それから、私達の務を軽くでも、重くでもする、また楽しくも、苦しくもすることが出来るんです。あの人の力は言葉や顔色だけのことであつたにした處で殆んど算盤にも乗らない程の輕微なものであつたにしても、それがどうしたと言ふのですか? あの人の與へて下さる幸福は、一身代にも當る程全く大したものなのですよ。」

47. 彼は幽霊がぢつと視て居るのに氣が付いて、口を噤ぎました。

「どうしたのかい?」と幽霊は尋ねた。

「別に、どうもいたしません」とスクルウヂは言つた。

「どうかしたんだらう?」と幽霊は言ひ張つた。

「いゝえ」とスクルウヂは言つた。「いゝえ、私はたつた今私處の番頭に一言二言言ふことが出来たらと思ふのです! それ丈なんです。」

彼が斯う言ふ希望を述べた時に、彼の昔の姿はランプの心を引込ませた。そして、スクルウヂと幽霊は再び相並んで室外に立つてゐた。

turned down the lamps ランプの心を引込めた。

"My time grows short," observed the Spirit. "Quick!"

48) This was not addressed to Scrooge, or to any one whom he could see, but it produced an immediate effect. For again Scrooge saw himself. He was older now; a man in the prime of life. His face had not the harsh and rigid lines of later years; but it had begun to wear the signs of care and avarice. There was an eager, greedy, restless motion in the eye, which showed the passion that had taken root, and where the shadow of the growing tree would fall.

49) He was not alone, but sat by the side of a fair young girl in a morning-dress: in whose eyes there were tears, which sparkled in the light that shone out of the Ghost of Christmas Past.

"It matters little," she said, softly. "To you, very little. Another idol has displaced me; and if it can cheer and comfort you in time to come, as I would have tried to do, I have no just cause to grieve."

"What idol has displaced you?" he rejoined.

"A golden one."

"This is the even-handed dealing of the world!" he said. "There is nothing on which it is so hard as poverty; and there is nothing it professes to condemn with such severity as the pursuit of wealth!"

50) "You fear the world too much," she answered, gently. "All your other hopes have merged into the hope of

48. **produced an immediate effect** 直ぐに利き目があつた。即ち直ぐ言つた通りになつた。

a man in the prime of life 人生の盛りにあるもの、男盛り。

passion 利慾の念、煩惱。(樹としてたとへてある。)

49. **a golden one**=a golden idol=i.oney. お金と言ふ可愛いもの。

「わしの時間はもう少しになつたから、早く!」と幽霊は言ひました。

48. 此はスクルウヂに向つて言つたのでもなく、又スクルウヂの目に見える何者に向つて言つたのでもなかつた。然し、直ぐにその通りになつた。と言ふのもスクルウヂの昔姿が現はれたからでした。彼は前よりも年をとつてゐて血氣盛りの男であつた。彼の顔には後に出来た様な荒々しくて苛い皺もなく、只心配と貪慾の色を帯び始めてゐた。眼付には離離して慾深く落着かない處があつて、それから見ても既に煩惱の樹が根を下して居り、次第に繁茂して暗い陰を落さうとしてゐる様が窺はれました。

49. 彼は唯一人ではなくて、喪服を着た美しい少女の側に腰を下してゐた。その少女の眼には涙が宿つてゐて、過去のクリスマス幽霊から射す光できらきら光つてゐた。

「何でもないでせうよ、」と彼女は物やさしく言ひました。「貴方にとつては、ほんとに何でもないでせう。私の代りに他に可愛い人が出来たのですもの。私がしようと思つてゐる様に、早く来て貴方を喜ばせて満足させてくれるなら、私は何も悲しむ譯なんかありませんわ。」

「お前の代りになつた可愛い者つて何だい?」とスクルウヂはひ返しました。

「お金と言ふものですよ。」

「そりや世間の片手落と言ふものぢやないか!」と彼は言ひました。「世の中に貧乏位苦しいものはない。それに金儲けをすると、なんでひどく悪様に言ふんだ!」

50. 「貴方は餘り世間をこはがつてゐますわ」と、彼女は優しく答へました。「金銭上で耻をかくことのない様にしないば

even-handed 公平な。(實際は片手落など言ふ意味を含めて言つてゐる。)

being beyond the chance of its sordid reproach. I have seen your nobler aspirations fall off one by one, until the master-passion, Gain, engrosses you. Have I not?"

"What then?" he retorted. "Even if I have grown so much wiser, what then I am not changed towards you."

She shook her head.

"Am I?"

"Our contract is an old one. It was made when we were both poor and content to be so, until, in good season, we could improve our worldly fortune by our patient industry. You are changed. When it was made, you were another man."

"I was a boy," he said impatiently.

51) "Your own feeling tells you that you were not what you are," she returned. "I am. That which promised happiness when we were one in heart, is fraught with misery now that we are two. How often and how keenly I have thought of this, I will not say. It is enough that I have thought of it, and can release you."

"Have I ever sought release?"

"In words. No Never."

"In what, then?"

"In a changed nature; in an altered spirit; in another

50. **the hope of being beyond the chance of its sordid reproach** 金銭上の恥をうけることのない様にと言ふ希望。

the master-passion. Gain, engrosses you 金儲けと言ふ貪慾が貴方を占領してゐる。即ち、貴方は貪慾な金儲けの奴隷になつてゐる。

Am I? = am I changed towards you?

in good season = in due time.

51. **I am** = I am what I was.

fraught = full.

つかりに、貴方は全ての希望をお捨てになつておしまひなのです。貴方の高尚な望が段々無くなつて、到頭貴方は貪慾な金儲の奴隷におなりなすつてゐるのだと思ひますわ。さうぢやなくつて?」

「それがどうしたと言ふのだい?」とスクルウヂは言ひ返しました。「假令俺がそんな利口ものになつた處で、それが何うしたと言ふのだ? 俺はお前に對して心變りはしてないぜ。」

彼女は頭を振りました。

「俺が心變りをしたと言ふのかい?」

「私達が約束したのは大分前のことで、その時分は二人共貧乏で、それに満足してゐたので、辛抱して働いて居れば、お終には、よい時節が來て世間並の身代をつくる事が出来ると思つたぢやありませんか。貴方は變りましたね。約束した時は今は別人の様でした。」

「なあに、俺は子供だつたのだ」とスクルウヂは齒がゆけに言つた。

51. 「貴方御自身でも、今の様ではなかつたことがお感じになるでせう。」と彼女は言つた。「私なんかは前とちつとも變りませんよ、私達の心が一つになつた時、末はさぞ楽しいだらうと思つたことも、今は二つに離れて、悲しさが一杯になつてゐます。私は此の事を是迄に幾度、また、どんなにひどく考へたかできません、だがもう申し上げますまい。私が今迄思案して來たと言ふことだけで充分ですもの、それでお約束を取り消す事が出来ますわ。」

「俺が今迄に取消しを求めたことがあるか?」

「口でですか? いゝえ、口ではありません。」

「ぢや何んでだ?」

「性質が變り、精神が異ひ、生活の狀況が異ひ、それから、肝

release 約束を解いてやる。

atmosphere of life; another Hope as its great end. In every thing that made my love of any worth or value in your sight. If this had never been between us," said the girl, looking mildly, but with steadiness, upon him; "tell me, would you seek me out and try to win me now? Ah, no!"

52) He seemed to yield to the justice of this supposition, in spite of himself. But he said with a struggle, "You think not."

"I would gladly think otherwise if I could," she answered, "Heaven knows! When I have learned a truth like this, I know how strong and irresistible it must be. But if you were free to-day, to-morrow, yesterday, can even I believe that you would choose a dowerless girl—you who, in your very confidence with her, weigh everything by Gain: or, choosing her, if for a moment you were false enough to your one guiding principal to do so, do I not know that your repentance and regret would surely follow? I do; and I release you. With a full heart, for the love of him you once were."

53) He was about to speak; but with her head turned from him, she resumed.

"You may—the memory of what is past half makes me hope you will—have pain in this. A very, very brief time,

atmosphere of life 生活する零圍氣、即ち、生活する社會、故に身分のこと。

win 手に入れる。(此處では嫁取るの意)

52. **in spite of himself** 如何な彼も、彼は我にもあらず。

Heaven knows! 神様は御存じだ!(前に言つてゐることの確かなことを言ふ爲めに用ひてゐる。)

truth like this スクルウヂの心が變つた事實。

can even I believe 何うして信ぜられようか。(とても信ぜられない)

in your very confidence with her 如何に信認して居る時でも。

weigh everything by Gain 金儲けの上から萬事を割り出す。

for the love of him you once were (以前の貴方は今の様に金に

心な目的としての希望をお變へになつたからです。何でもかでもが皆違つてゐるからです。それで私の愛なんぞは、貴方から見りや、何の取得もないものとなつて仕舞ひました。若し、私達の間此んな約束がなかつたら、と少女はもの優しく然もちつと彼を見つめながら言ひました。「貴方は今私の様なものを探し出して、手に入れようとなさるでせうか、ね、貴方? 決してそんな事は爲さいますまい!」

52. 如何な彼も、此想像が正しいのだと認めてゐるらしかつた。然し彼は苦し紛れに「お前は私がそんなことはしないと思つてゐるんだね」と言ひました。

「私は出来ることならそんなことより他の事でも考へてゐたいのですが」と彼女は答へました。「神様はよく御存じです! 私はこんな事實を知つた時、そりや到底私の力ではどうすることも出来ないと知りました。然し貴方が今日でも明日でも昨日でも自由にお撰びになるとしても、貴方が持參金なしの娘さんをお撰びになるだらうてなことが何うして信ぜられませうか。——貴方は何でもかでも金儲けの上から割出さうといふのですから、何んなに信じてゐて、そんな娘さんを妻に選んで、ほんの一寸の間大切な主義に背いて見た處で、直ぐに後悔したり、残念がつたりするのは分り切つてゐるぢやありませんか? ですから私は豫ての約束を取り消しますよ。以前は思ひ思はれた仲ですもの、それで満足ですわ。」

53. 彼は何か言はふとしてゐたが、彼女は顔をそむけて言ひました。

「貴方も別れるのが辛いかもしれません——今迄のことを憶ひ出せば、それ位のことはあつていいと思ひます。其も極く僅

心を奪はれては居なかつたその頃の貴方に愛を捧げて今の貴方とは縁を切ります。)

and you will dismiss the recollection of it, gladly, as an unprofitable dream, from which it happened well that you awoke. May you be happy in the life you have chosen!"

She left him, and they parted.

"Spirit!" said Scrooge, "show me no more! Conduct me home. Why do you delight to torture me?"

"One shadow more!" exclaimed the Ghost.

"No more!" cried Scrooge. "No more. I don't wish to see it. Show me no more!"

But the relentless Ghost pinioned him in both his arms, and forced him to observe what happened next.

54) They were in another scene and place; a room, not very large or handsome, but full of comfort. Near to the winter fire sat a beautiful young girl, so like that last that Scrooge believed it was the same, until he saw *her*, now a comely matron, sitting opposite her daughter. The noise in this room was perfectly tumultuous, for there were more children there, than Scrooge in his agitated state of mind could count; and, unlike the celebrated herd in the poem, there were not forty children conducting themselves like one, but every child was conducting itself like forty.

55) The consequences were uproarious beyond belief; but no one seemed to care; on the contrary, the mother and

53. **pinioned** ['pinjənd] 翼を縛つた、羽交締にした。

54. **in another scene** 先の場合に現はれたスクルウヂの許嫁だつた娘が他へ嫁して、子供も多勢出来て、幸福に暮してる場合である。

the last=the last girl. 前の場面に現はれた少女。

until he saw her *her* はスクルウヂの許嫁だつた娘。

matron ['meitrən] 主婦。

tumultuous [tju(:)'mʌltjuəs] 騒々しい。

the celebrated herd in the poem あの有名な詩に詠まれたる牛の群、此はあの Wordsworth の "Written in March" と云ふ詩中の "There are forty feeding like one!" を指して言つたのであらう。

not forty children conducting themselves like one,.....forty

かの間で、直きに貴方はそれを思ひ出すこともお忘れになつて、何の利益もない夢から良い具合に醒めたものと喜ばれるでせう。どうぞ貴方のお好きな様にお暮し遊ばせ、御幸福をお祈りいたします！」

彼女は男を後に残して、別れて行つた。

「幽霊さん！ もう此の上何も見せて下さいますな！ お家へつれて行つて下さい。何故貴方は私をいぢめて面白いのです？」

「影法師がもう一つある？」と幽霊は叫んだ。

「もう澤山です！ もう澤山です。私は見たくありません。もう何もお見せ下さるな！」とスクルウヂは叫んだ。

然し、残酷な幽霊は兩の腕で羽交締にして、次に現はれるものを無理やりに見せました。

54. 彼等は別な場面に來てゐた。部屋は大して廣くも立派でもなかつたが、如何にも居心地のよい部屋であつた。冬季用の暖爐の邊には一人の若い美しい娘が腰かけてゐた。その娘は前の場合に現はれたのとそつくりだつたのでスクルウヂは同じ娘だとばかり思つてゐたが、その娘と向ひ合つて腰かけてゐるのが前の場面の娘で、今ではもう立派なお母さんになつてゐることが漸く解つた。此の部屋中の物音の騒々しさと言つたら全く大變なもので、氣のいら立つたスクルウヂには數へ切れない程に子供が大勢居ました。そして、あの有名な詩に詠まれた牛の群とは異り、四十人の子供が一人の様に振舞ふのではなくて、一人一人の子供が四十人の様に振舞ふのであつた。

55. その結果信ぜられない程に騒々しかつた、けれども誰一人としてそれを苦にするものもなく、反つて、母や娘はお腹

(あの詩に詠まれた四十の牛はさながら一頭の牛の様に靜かに草を食んでゐたが、四十人の子供は一人の様に温しく靜かに振舞はず反對にその一人一人が四十人の様に騒々しく振舞つたのであつた。

daughter laughed heartily, and enjoyed it very much; and the latter, soon beginning to mingle in the sports, got pillaged by the young brigands most ruthlessly. What would I not have given to be one of them! Though I never could have been so rude, no, no! I wouldn't for the wealth of all the world have crushed that braided hair, and torn it down; and for the precious little shoe, I wouldn't have plucked it off, God bless my soul! to save my life. As to measuring her waist in sport, as they did, bold young brood, I couldn't have done it; I should have expected my arm to have grown round it for a punishment, and never come straight again. And yet I should have dearly liked, I own, to have touched her lips; to have questioned her, that she might have opened them; to have looked upon the lashes of her downcast eyes, and never raised a blush; to have let loose waves of hair, an inch of which would be a keepsake beyond price: in short, I should have liked, I do confess, to have had the lightest license of a child, and yet to have been man enough to know its value.

56) But now a knocking at the door was heard, and such a rush immediately ensued that she with laughing face and

55. **got pillaged** (自動詞 to get に過去分詞のつく時は一種の受身の様になる。) 掠奪された。

young brigands 年のいかない山賊達 (娘を取りまいて衣物をはぎ取つたり、靴をとつたりするから、かく面白く言つたもの。)

for=as for.

God bless my soul! (神様、私の魂を祝し給へ!) さあほんとに、位の意。

measuring her waist 両手で彼女の腰を抱く。to measure (寸法を計るの意より両手で抱へるの意となつてゐる。)

bold young brood they の opposit on.

to have grown round it 腰の圍りに根を生ずる。to grow=to take root.

I should have dearly liked 私は耐らなく……したかつた。dearly 切に。

を抱へて笑ひ興じて居ました。其うちに娘は遊戯の仲間入りをしたが、直ぐにその小さい山賊さんの群に散々に剥ぎ取られました。私は何を捨てても其の子供達の一人になりたかつた! 尤も、あの子供等の様に亂暴な事は決して決して私には出来なかつたし、また、世界中の富を貰つても、あの綺麗に編んだ髪をこはして、ぐちやぐちやにしたりはしません、また、あの貴重な小ちやい靴ですが、まあほんとに、私は生命を棄てても、それを引つたくる様なことは致しませんよ。戯れにも、あの大膽な小さい雛つ子さん達の様に、彼女の腰に抱きつくなんてなことが、どうして私に出来るものですか、そんなことでもすれば、観面その罰で、腰の周りに私の腕は根を生やして、二度と眞直ぐにはならないものと覺悟しなければならない。でも本當を言へば私は堪らなく彼女の唇に觸れたかつたのです。その唇を開かせるために、何とか言葉をかけて見たかつたのです。またその伏眼がちな眼の睫毛を見詰めて、然も顔を赤らめさせないで置きたかつたのでした。一時でも千金の價する紀念品となるあの髪を解いてそつと波打たせて見たかつた。一口に申せば白状致しますが、私は、子供のあの最も自由にふるまへる特權を持つて居て、然もその特權の有難味を知つて居る大人でありたかつたのでした。

56. だが此の時戸口でノックする音が聞えました。と直ぐ様、子供達は押寄せて行つたので、彼女は顔ににこにこ笑ひを

never raised a blush 顔を赤らめさせないで。

a keepsake beyond price 千金の値する紀念品。beyond price 値も知れない程貴重な意。

the lightest license ['laisons] 最も輕々しい特權、即ち最も自由に振舞へる特權。

56. **such a rush immediately ensued** such は that 以下を受けてゐる。斯う斯う言ふ様な押しよせが直ぐとそれに引續いて起つたの意。

plundered dress was borne towards it the centre of a flushed and boisterous group, just in time to greet the father, who came home attended by a man laden with Christmas toys and presents. Then the shouting and the struggling, and the onslaught that was made on the defenceless porter! The scaling him with chairs for ladders to dive into his pockets, despoil him of brown-paper parcels, hold on tight by his cravat, hug him round his neck, pommel his back, and kick his legs in irrepressible affection! The shouts of wonder and delight with which the development of every package was received! The terrible announcement that the baby had been taken in the act of putting a doll's frying-pan into his mouth, and was more than suspected of having swallowed a fictitious turkey, glued on a wooden platter! The immense relief of finding this a false alarm! The joy, and gratitude, and ecstasy! They are all indescribable alike. It is enough that by degrees the children and their emotions got out of the parlor and by one stair at a time, up to the top of the house; where they went to bed, and so subsided.

57) And now Scrooge looked on more attentively than ever, when the master of the house, having his daughter

Then the shouting and the struggling, and the onslaught この後に ensued をつけてみるとよい。

The scaling him 此の様に目的格をもつてゐて、尙ほ、全文に關係して動詞の役目を多分に務めて居る present participle が名詞として定冠詞を取ることは稀であるが、これは唯前の the shouting 等につれて the を附けたので、自然この文にも ensued の略されてゐることが解る。

defenceless porter 防禦用意のない擔夫。(玩具などもつて来た男)

development=unfolding. 開くこと。

The terrible announcement 怖ろしいおふれ。子供達が言ひ出したことを斯く大げさな文句で言つた處に面白みがある。

in the act of これこれしようとする刹那に。

was more than suspected=was almost believed. 疑はれる以上で

浮べ、着物は剥がれたまゝで、顔をほてらして騒いでる群にとり捲かれて、戸口の方へと押されて行つて、父親の出迎ひにやつと間に合つた。父親はクリスマスの玩具や贈物を背負つた男を伴れて歸つて来たのでした。すると子兒等はわいわい叫ぶやら押し合ひへし合ひして、うっかりしてゐる擔夫は不意打ちを食ひました! 椅子を梯子にしてその男の體に登り上つて、ポケットへ手を突込むやら、褐色の紙包を奪ひ取るやら、襟飾に獅噛み着くやら、首に抱きつくやら、背中をほんと叩くやら、嬉しさが餘つて脚を蹴るやらした。包が開かれる度んびに、驚きと喜びの叫び聲が起つた! 赤ん坊が人形のフライ鍋を口中へ入れかゝつた處を取り上げたとか、木皿に膠づけされてゐた玩具の七面鳥をどうやら呑み込んだらしいと言ふ様な怖ろしいおふれ! だが、これは虚報と知れて、やれやれと大安心! 喜ぶやら、有難うと言ふやら、有頂天になるやら! 何れも同じ様に、到底筆紙に盡すことは出来ない。で、その内、それ等の喜び騒いでゐる小供達が追々客間を出て行き、階段を一段上つては止まり一段上つては止まりして、やつと、一番上の部屋まで上つて、そこで寢床に這入ると、その儘静まつたと言へば、それで充分である。

57. そして、今しも、この家の主人が、優しく娘を自分の方へ凭れ掛けさせながら、その娘や、母親と共に、自分の爐邊

あつた。即ち、何うやら本統らしかつたの意。(to doubt と to suspect の差は、前者は、これこれでないと思ふ意であるに對し後者はこれこれらしいと思ふ意である。)

a fictitious turkey 玩具の七面鳥。

by degrees=gradually. 段々、追々。

by one stair at a time 階段を一段上つては止まり一段上つては止まりして。

57. **having his daughter leaning fondly on him** 彼は娘を優しく自分の方へ凭れ掛けさせて。

leaning fondly on him, sat down with her and her mother at his own fireside; and when he thought that such another creature, quite as graceful and as full of promise, might have called him father, and been a spring-time in the haggard winter of his life, his sight grew very dim indeed.

58) "Belle," said the husband, turning to his wife with a smile. "I saw an old friend of yours this afternoon."

"Who was it?"

"Guess!"

"How can I? Tut, don't I know," she added in the same breath, laughing as he laughed. "Mr. Scrooge."

"Mr. Scrooge it was. I passed his office window; and as it was not shut up, and he had a candle inside, I could scarcely help seeing him. His partner lies upon the point of death, I hear; and there he sat alone. Quite alone in the world, I do believe."

59) "Spirit!" said Scrooge in a broken voice, "remove me from this place."

"I told you these were shadows of the things that have been," said the Ghost. "That they are what they are, do not blame me."

such another creature.....promise あの娘と同じ様にしとやかで未頼母しい他の娘（それは、スクルウヂ自身に娘があつたらと想つてのことである。彼は金儲にのみ氣を引かれて約束までしてゐた女を棄てて終ひ、その女が他へ嫁してあの様によい娘達をもつてゐるのを見てつくづく羨ましくなり、孤獨の淋しさを感じたのだ。）

a spring-time in the haggard winter of his life 自分の生活の寢れ果てた冬の日に於ける春の日とは淋しく暮してゐる時に春の様に楽しくしてくれる春の慰めのことである。

58. **Belle** [bel] かつてはスクルウヂの許婚であつた女の名前。

Tut, don't I know! なに、知らないものですか! Tut いら立ち、輕蔑、譴責を表はす間投詞。

laughing as he laughed 夫が笑つたので直ぐにそれと感づいて、自分も笑ひながら。

59. **in a broken voice** 途切れ途切れの聲で。

に腰掛けた時、スクルウヂは今迄よりも一層注意深く見守つてゐました。そして彼は自分にもあの様な優しく、未頼母しい娘があつたら、自分をお父さんと呼んでくれて、自分の世活が寢れた冬の様である時にも、春の日を齎してくれたであらうと思つた時には、ほんとに彼の眼はほんやりと霽んでまゐりました。

53. 「ベルや」と夫は微笑みながら妻の方へ向いて言ひました。「今日の午後、お前の昔馴染に逢つたよ。」

「誰にですか?」

「言ひ當て、御覽!」

「まあ、どうして、なに分らないものですか!」と彼女は夫と一緒に笑ひながら、一息に「スクルウヂさんでせう」と言ひ加へました。

「さ、それがスクルウヂさんだつたんだ。私はあの人の店の窓さきを通つた處が、その窓が閉まつてゐないで、内に蠟燭が點してあつたので、どうもあの人を見ない譯に行かなかつたのさ、處であの人の仲間は病氣で死にかけてるさうだが、あの人は一人ぼつちで腰掛けてゐたよ、——全く此の世で一人ぼつちでな、ほんとに。」

59. 「幽霊さん! 他の處へ連れて行つて下さい」とスクルウヂは途切れ途切れの聲で言ひました。

「此等のことは私がお前さんに言つて置いた様に今迄にあつた事の影なんだ。」と幽霊は言つた。「でそりやありの儘なんだから、私を責めちやいけんよ!」

That they are what they are それ等の影法師があつた通りだからと言つて、(みんなお前自身の行爲を現はすもので決して私の罪ではないから私を責めてはいかぬ。)

“Remove me!” Scrooge exclaimed, “I cannot bear it!”

He turned upon the Ghost, and seeing that it looked upon him with a face, in which in some strange way there were fragments of all the faces it had shown him, wrestled with it.

“Leave me! Take me back. Haunt me no longer!”

60) In the struggle, if that can be called a struggle in which the Ghost with no visible resistance on its own part was undisturbed by any effort of its adversary, Scrooge observed that its light was burning high and bright; and dimly connecting that with its influence over him, he seized the extinguisher-cap, and by a sudden action pressed it down upon its head.

61) The spirit dropped beneath it, so that the extinguisher covered its whole form; but though Scrooge pressed it down with all his force, he could not hide the light, which streamed from under it, in an unbroken flood upon the ground.

He was conscious of being exhausted, and overcome by an irresistible drowsiness; and, further, of being in his own bed-room. He gave the cap a parting squeeze, in which his hand relaxed; and had barely time to reel to bed before he sank into a heavy sleep.

wrestled [ˈresld] with it it は幽霊、幽霊と争つた。

60. on its own part 幽霊自身の方では。

by any effort いくら力みかへつても。

dimly connecting that with its influence over him 彼に及ぼす幽霊の力と其の光を臆けながら結びつけて。that=its light. (スクルウチは幽霊が自分に對して不思議な力を持つて居るのもあの幽霊の頭から出る光故であらうと臆けながら考へたのであつた。)

61. dropped beneath it 消火器の下にべつちやりとなつた。

in an unbroken flood 一面の洪水になつて。

overcome は exhausted と同じく being にかゝる。

「他へ連れて行つて下さい！」とスクルウチは叫んだ。「私はもう我慢が出来ません！」

彼は幽霊の方へ振り向いた、そして、自分を見つめて居る幽霊の顔には、今運彼が見せられた色々な人の顔がみんな變な工合にちらちらと現はれてゐるのを見て、彼は幽霊から遁れんと争つた。

「貴方も行つて下さい！ 私を連れて歸つて下さい。もう二度と私の所へ出なされるな！」

60. 幽霊の方では眼に見える様な抵抗は少しもしないで、その敵手スクルウチがいくら力みかへつても平氣であつたのだから、争闘とは言へないかもしれないが、その争闘中に、スクルウチは幽霊の頭からの光が高くきらきらと輝いて居るのを見て、自分に及ぼす幽霊の力はこの光故だと臆けながら考へて、火消の帽子を掴み、突然に其を幽霊の頭におつ被せた。

61. 幽霊は其の下にべつちやりとなつたので、全身は火消器に覆はれて終つた。然し、スクルウチは力一杯壓へつけたけれども、その光を隠すことは出来ず、光はその下から流れ出て地面に一面の洪水の様になつた。

彼はへとへとに疲れ、我慢出来ない程に眠むたくなつてゐることを感じてゐた。尙ほ更に、自分の寢室に居るのだと言ふことも氣付いてゐた。彼はお別れにその帽子を一壓ギユツとやつて、手をゆるめました。そして寢床によろめ込むか込まないかに、ぐつすり寢込んで終つた。

further, of being の of being もやはり conscious にかゝる。

a parting squeeze [skwi:z] お別れの一壓つけ、(最後の固い握手ともなる。)

had barely time to reel....., before he.....slumber 寢床へよろめき込むか込まないかにぐつすり寢入つて終つた。

STAVE THREE

THE SECOND OF THE THREE SPIRITS.

1) Awaking in the middle of a prodigiously tough snore and sitting up in bed to get his thoughts together, Scrooge had no occasion to be told that the bell was again upon the stroke of One. He felt that he was restored to consciousness in the right nick of time, for the especial purpose of holding a conference with the second messenger despatched to him through Jacob Marley's intervention. But, finding that he turned uncomfortably cold when he began to wonder which of his curtains this new spectre would draw back, he put them every one aside with his own hands, and lying down again, established a sharp look-out all round the bed. For, he wished to challenge the Spirit on the moment of its appearance, and did not wish to be taken by surprise, and made nervous.

2) Gentlemen of the free-and-easy sort, who plume themselves on being acquainted with a move or two, and being

1. **prodigiously** [prɒ'dɪdʒəsli] 非常に、奇異に。

to get his thoughts together 考を纏める。

had no occasion to be told occasion は(事ある時に生ずる)理由、必要、の意。話される必要がなかつた。即ち、聞く必要がなかつた。(There is no occasion for haste. 急ぐ必要は無い。There is no occasion to get angry. 何も怒る事は無い)。

was again upon the stroke of One 再び一時を打たうとしてゐた。upon=nigh upon (=nearly)。

in the right nick of time 丁度好い時に、nick 好時機。

第三章

第二の幽霊

1. 馬鹿に大きな駢をかいてる最中にふと眼を覺まして、考を纏め様として、寢床に起き直つたがスクルウチには鐘が一時を打たうとしてゐる事は聞かんでも分つてゐた。彼は丁度好い時に正氣に返つたものだと思つた。と言ふのもジェイコブ・マアレイの取持で彼の處へ遣はされる第二の使者と會見すると言ふ特別な目的があつたからでした。然し、彼は、今度新たに來る幽霊はどのカーテンを引き開けるかしらと訝り出すと氣持の悪い寒氣がしてくるのを感じたので、彼は自からカーテンを一みんな引寄せて再び横になつて、寢床の周圍に鋭く眼を据ゑました。それも幽霊が現はれようとする刹那に挑戦してやらうと彼は思つて居たからで、不意打ちを食つて、どぎまぎする様になつては耐らないと思つたからであつた。

2. 此の手でなければあの手と言ふ様にちやんとやり路を知つて居て、何日どんなことがあつても平氣だと言ふのを自慢す

though Jacob Marley's intervention ジェコブ・マアレイの取持で。

established a sharp look-out 鋭い眼をしつかりと据ゑた。
established=placed.

taken by surprise 不意打される。

made nervous どぎまぎさせられる。

2. **plume themselves on.....,** だと言ふので自慢してゐる。

being acquainted with a move or two 此の手でなければあの手でと言ふ様にやり方を知つてゐる。

usually equal to the time-of-day, express the wide range of their capacity for adventure by observing that they are good for anything from pitch-and-toss to manslaughter; between which opposite extremes, no doubt, there lies a tolerably wide and comprehensive range of subjects. Without venturing for Scrooge quite as hardily as this, I don't mind calling on you to believe that he was ready for a good broad field of strange appearances, and that nothing between a baby and rhinoceros would have astonished him very much.

3) Now, being prepared for almost anything, he was not by any means prepared for nothing; and, consequently, when the Bell struck One, and no shape appeared, he was taken with a violent fit of trembling. Five minutes, ten minutes, a quarter of an hour went by, yet nothing came. All this time, he lay upon his bed, the very core and centre of a blaze of ruddy light, which streamed upon it when the clock proclaimed the hour; and which, being only light, was more alarming than a dozen ghosts, as he was powerless to make out what it meant, or would be at; and was sometimes apprehensive that he might be that very moment an interesting case of spontaneous combustion, without having the consola-

equal to the time-of-day=ready and prepared for anything that might happen. どんなことが起つてもちやんと覺悟してゐて驚かぬ。

by observing=by saying.

good for=ready for.

pitch-and-toss 「字か素か」と言つた様な一種の遊戯、即ち、例へば銅貨を投げて字が出たらそれから取ると言つた遊戯、此處では人殺に對して小さな事件の極端を表はして居る。

calling on you to believe 信する事を諸君に要求する。

a good broad field 可なり廣い範圍、(幽霊は何處から出てくるともわからなかつたから)。

3. **he was not by any means prepared for nothing** (スクルウヂは何が現はれてもその方には用意が出来てゐたが何人にも出ないと言ふことは豫期しないことではなかつた)。

was taken with a violent fit of trembling 烈しい戰慄の發作に

る不羈磊落な紳士は、「字か素か」と言ふ様な遊戯から人殺の事に到る迄、何でも御座れだてなと言つて、どんな冒險でも出来る様なことを吹聴する。勿論此兩極端の間には、随分廣くて色々なものを含んでゐる範圍がある。が私は、スクルウヂの爲め、その様に大膽不敵には敢て言はない迄も、スクルウヂは可なり廣い範圍にわたつて何處から幽霊が現はれてもよいと言ふ様に覺悟が出来てゐたと言ふ事や、赤ん坊と犀との間のものなら何だつて、大して彼を驚かせる様なことはなかつたらうと言ふことを、諸君に信じて貰ひ度いと要求する位のことはしてもよいのです。

3. さて、スクルウヂは大概のものに對しては心構へしてゐたものの、何者も出ない時の用意が少しも出来て居なかつた。従つて、鐘が一時を打つても、何の姿も現はれなかつたので、彼は烈しく發作的に戦ひ出した。五分、十分、十五分と時は過ぎて行つた、が然し何も出て來なかつた。此の間中、彼は寢床の上に、焔なす赤い光の眞只中に横つてゐた。その光は、時計が一時を報じた時に、その寢床の上に流れ出したのであつた。然も、其は唯光だけであつたけれども、一體何の爲めに射すのか、一體何を照らすのかさつぱり分らなかつたので、十二の幽霊が出たよりも怖ろしかつた。理由が分つて居れば心も安まるのだがそれも出来ないで、自然燃焼と言ふ面白い状態に今現在あるのぢやないかしらと時々氣遣ふのであつた。然しながら一

襲はれた。即ち、烈しく發作的にぶるぶる慄へ出した。

went by 経つた。

the very core and centre 眞只中、core 核心の意。

he was powerless to make out=he could not find at all.

what it meant その光が何を意味してゐるかと言ふこと。

what it would be at=what it was aiming at その光が何を目標としてゐるかと言ふこと。

tion of knowing it. At last, however, he began to think—as you or I would have thought at first; for it is always the person not in the predicament who knows what ought to have been done in it, and would unquestionably have done it too—at last, I say, he began to think that the source and secret of this ghostly light might be in the adjoining room, from whence, on further tracing it, it seemed to shine. This idea taking full possession of his mind, he got up softly and shuffled in his slippers to the door.

4) The moment Scrooge's hand was on the lock, a strange voice called him by his name, and bade him enter. He obeyed.

It was his own room. There was no doubt about that. But it had undergone a surprising transformation. The walls and ceiling were so hung with living green, that it looked a perfect grove; from every part of which bright, gleaming berries glistened. The crisp leaves of holly, mistletoe, and ivy reflected back the light, as if so many little mirrors had been scattered there; and such a mighty blaze went roaring up the chimney, as that dull petrification of a hearth had never known in Scrooge's time, or Marley's, or for many and many a winter season gone. Heaped up on the floor, to form a kind of throne, were turkeys, geese, game, poultry, brawn, great joints of meat, sucking-pigs, long wreaths of sausages, mince pies, plum puddings, barrels of oysters, red-hot chestnuts, cherry-cheeked apples, juicy oranges, luscious pears,

4. **the moment** = as soon as.

perfect grove 全くの森、さながらの森。

mistletoe [ˈmɪsltoʊ] 寄生樹。

went roaring up the chimney 煙突をぼうぼう音をたて、上つた。

that dull petrification of a hearth 暖爐のあの鈍い化石、(スクルウヂは吝嗇だつたので暖爐にはめつたに火の氣もなくまるで化石の様な感じがしたからかく言つたのである)。

讀者諸君や私なら最初に考へたであらうが、——彼はそれを最後に考へついたのであつた。と言ふのは、此の様な難局に當つては、如何にすべきであるか、又疑ひもなくそれをなすことを知つて居る者は、常に難局に當つてない他のものであるからである。——でね、最後に、彼は此の奇怪な光の本源と秘密とが隣の部屋にあるのぢやないか、更によくその光を辿つて見るとどうやら光は其處から射して来る様だと言ふことを彼は思ひ始めたのであつた。斯う思ひ込むと、彼はそつと起き上り、スリッパをはき、足を引き摺つて戸口の方へ行つた。

4. スクルウヂの手が錠に觸れた瞬間に、彼の名前を呼ぶ不思議な聲がして、彼に這入れと命じた。彼はそれに従つた。

其處は彼自身の部屋であつた。それに就ては何等疑ふべき處はなかつた。然し其部屋は驚く程に變つて居た。壁や天井には生々した緑葉が垂れさがつて居て、全く森の様に見え、此處彼處からきらきらした赤い果實が燦めいてゐた。柵や、寄生樹や蔦のバリバリした葉は、その果實の光を反射して居て、その様はまるで小さな鏡をそこに撒き散した様であつた。そして、煙突には、スクルウヂの時代にも、またはマアレイの時代にも、または幾年も幾年も過ぎ去つた冬の季節にも、あの化石の様になつた暖爐が未だ經驗した事のない程に盛んな焔がほうほうと音を立て、燃え上つてゐた。床には、七面鳥、鶯鳥、獵禽、家禽野、猪肉、牛の太腿肉、仔豚腸詰の長い環、肉饅頭、^{フラムプフディング}委入菓子、牡蠣の樽詰、赤く焼けた胡桃、櫻色の頬をした林檎、水氣の多

many a winter season gone 過ぎ去つた幾年も幾年もの冬の季節。

game 獵でとつた野禽。

brawn [brɔ:n] 猪肉、豚肉。

joints 腿肉。

immense twelfth-cakes, and seething bowls of punch, that made the chamber dim with their delicious steam. In easy state upon this couch, there sat a jolly Giant, glorious to see: who bore a glowing torch, in shape not unlike Plenty's horn, and held it up, high up, to shed its light on Scrooge, as he came peeping round the door.

5) "Come in!" exclaimed the Ghost. "Come in! and know me better, man!"

Scrooge entered timidly, and hung his head before this Spirit. He was not the dogged Scrooge he had been; and, though the Spirit's eyes were clear and kind, he did not like to meet them.

"I am the Ghost of Christmas Present," said the Spirit. "Look upon me!"

Scrooge reverently did so. It was clothed in one simple green robe, or mantle, bordered with white fur. This garment hung so loosely on the figure, that its capacious breast was bare, as if disdaining to be warded or concealed by any artifice. Its feet, observable beneath the ample folds of the garment, were also bare; and on its head it wore no other covering than a holly wreath, set here and there with shining icicles. Its dark brown curls were long and free; free as its genial face, its sparkling eye, its open hand, its cheery voice,

twelfth-cakes クリスマスの後十二日日即一月六日の Epiphany [i'pifəni] (主顯節) に用ふる大きな菓子。(この菓子を籤で分配して、その中で豆のはいつてゐるのが當ればその人が式の司令者となる)。

jolly Giants 快活な巨人、Santa Claus の様なもの。

plenty's horn=cornucopia 豊饒の角、(希臘神話に出てくる五穀の神 Ceres は果實や花の一杯はいつた羊の角を左手に持つてゐる。これから豊饒の象徴となつてゐる)。

5. **man** おい、こら、おい君と言つた様な呼び掛けに用ふる言葉。
to meet them them は幽霊の眼、その眼と見合ふ。

い橙、甘い梨、非常に大きな十二夜の菓子、ボンス酒の泡立つてる大盃などがうづ高く積まれてゐて、一種の玉座をなして居り、其等の旨さうな湯気で部屋の中はほうつとなつて居た。此の座の上に、見るから愉快さうな、快活な巨人がゆつたりと構えて、腰掛けてゐた。この巨人は豊饒角(五穀の神の持つてゐる山羊の角)に似た燃え輝く松明を手にして居て、スクルウヂが扉の後から這入つてのぞいた時に、その光を上へ高く差し上げて、スクルウヂを照し掛けました。

5. 「お這入り！」と幽霊は叫んだ。「お這入り！そして、もつとよく俺を見覚えてお置きよ、おい！」

スクルウヂはおちおち這入つて、この幽霊の前に頭を下けました。彼は此迄の様な強情なスクルウヂではなかつた。そして幽霊の眼は冴えて親切さうであつたけれども。彼はその眼と見合ふのが嫌であつた。

「俺は現在のクリスマスの幽霊だ。さあ俺を觀ろ！」と幽霊は言つた。

スクルウヂは恭々しさにしました。幽霊は白い毛皮で縁取られた深緑の簡単な長衣またはマントと言つたものを着て居た。此の着物をほんのちよいと身體にひつけて居たので、廣い胸は丸出しになつてゐた。その様はさながら何か人工的なもので保護されたり、覆はれたりするのを輕蔑してゐる様であつた。その足は上衣の深い襷の下から見えてゐたが、やはり跣であつた。そしてその頭には柘の花環の外には何も冠つて居らず、その環には此處彼處にきらきら光る氷柱がついてゐた。その黒褐色の捲毛は長く寛やかにたれてゐた。その寛やかなことにはこにこした顔、きらきら光る眼、開いた手、快活な聲、拘束の

by any artifice どんな人工的なものででも、即ち、衣類の様なものでの意。

its unconstrained demeanor, and its joyful air. Girded round its middle was an antique scabbard; but no sword was in it, and the ancient sheath was eaten up with rust.

6) "You have never seen the like of me before!" exclaimed the Spirit.

"Never," Scrooge made answer to it.

"Have never walked forth with the younger members of my family; meaning (for I am very young) my elder brothers born in these later years?" pursued the Phantom.

"I don't think I have," said Scrooge. "I am afraid I have not. Have you had many brothers, Spirit?"

"More than eighteen hundred," said the Ghost.

"A tremendous family to provide for!" muttered Scrooge. The Ghost of Christmas Present rose.

"Spirit," said Scrooge submissively, "conduct me where you will. I went forth last night on compulsion, and I learnt a lesson which is working now. To-night, if you have aught to teach me, let me profit by it."

"Touch my robe!"

Scrooge did as he was told, and held it fast.

7) Holly, mistletoe, red berries, ivy, turkeys, geese,

unconstrained demeanour ['ʌnkən'streɪnd dɪ'mi:nə] 拘束されない態度。

sheath [ʃi:θ] = scabbard ['skæbəd] 鞘。

was eaten up with rust 錆に喰ひ込まれてゐた。即ち、錆で腐蝕して居た。

6. **the like of me** 俺に似たもの、即ち、クリスマスの幽霊のこと。

the younger members of my family 私の家族の若いもの達(普通なら子供達のことを言ふ譯だが、此處では近年のクリスマスの幽霊のことを言つてゐる)。

I am very young 現在の幽霊故本年一歳だからである。

I don't think I have 次には walked forth with....., が略されてゐる。

more than eighteen hundred 此書が書かれたのが 1843 年だから

ない態度、喜ばしげな様子、皆同じであつた。その腰には古風な鞘を帯びて居たか、刀身はなくて、その古い鞘は錆で腐蝕して居た。

6. 「お前は今迄に俺の様な者を見たことがないのだね！」と幽霊は叫びました。

「一度もありません。」とスクルウヂは其に答へました。

「俺の家族の中の若い者達と一緒に歩いた事はないかね、若い者と言つても(俺が一番若いのだから)この近年中に生れた俺の兄さん達の事を言ふのだがね」と幽霊は言葉を續けた。

「一緒に歩いたことがある様には覚えません」とスクルウヂは言つた。「残念ながら御座います。幽霊さん、貴方は御兄様が大勢おありですか？」

「千八百人以上あるよ」と幽霊は言つた。

「大變な御家族ですね、養つて行くにも！」とスクルウヂは嘯いた。

現在のクリスマスの幽霊は立ち上つた。

「幽霊さん」とスクルウヂは温順しく言つた。「私を貴方の御好きな處へ連れて行つて下さい。昨夜は強ひられて参りましたが、現に爲になつてゐる教訓を得ました。今夜も、お教へ下さることがありますなら、それで私の爲めになる様にして下さい。」

「俺の上衣にお觸り！」

スクルウヂは言はるゝまゝにしました。そして其をしつかりと握りました。

8. 柊も、寄生木も、赤い漿果も、蔦も、七面鳥も、鷺鳥も

ら其の年のクリスマスの幽霊からみれば千八百以上の兄弟がある譯。

to provide for 養ふ。

a lesson which is working now working の次に on me を入れてみるとよい。現に私の爲めになつてゐる教訓。

ought [ɔ:t] = anything.

game, poultry, brawn, meat, pigs, sausages, oysters, pies, puddings, fruit, and punch, all vanished instantly. So did the room, the fire, the ruddy glow, the hour of night, and they stood in the city streets on Christmas morning, where (for the weather was severe) the people made a rough, but brisk and not unpleasant kind of music, in scraping the snow from the pavement in front of their dwellings, and from the tops of their houses, whence it was mad delight to the boys to see it come plumping down into the road below, and splitting into artificial little snow-storms.

8) The house fronts looked black enough, and the windows blacker, contrasting with the smooth white sheet of snow upon the roofs, and with the dirtier snow upon the ground; which last deposit had been ploughed up in deep furrows by the heavy wheels of carts and wagons; furrows that crossed and re-crossed each other hundreds of times where the great streets branched off; and made intricate channels, hard to trace in the thick yellow mud and icy water. The sky as gloomy, and the shortest streets were chocked up with a dingy mist, half thawed, half frozen, whose heavier particles descended in a shower of sooty atoms, as if all the chimneys in Great Britain had, by one consent, caught fire, and were blazing away to their dear hearts' content. There was nothing very cheerful in the climate of the town, and yet was there an air of cheerfulness abroad that the clearest summer air and brightest summer sun might have endeavored to diffuse in vain.

7. **So did the room,.....=The room,.....vanished instantly, too. the hour of night** 夜の時間、即ち、夜、夜が消え去つたとは夜が明けたの意である。

whence it was の it は to see 以下のこと。

8. **the house fronts** 家の正面。
which last deposit その最後の沈澱物、即ち、極く最近に積つた雪のこと。

獵禽も、家禽も、猪肉も、牛肉も、豚肉も、腸詰も、牡蠣も、肉饅頭も、ブツディングも、果實も、ボンス酒も、皆んな忽ちに消え失せて終つた。同じ様に部屋も、暖爐も、赤く燃え立つ焔も、消えさり、夜も失せて、二人はクリスマスの朝の都の街路に立つてみた。その街路には(寒氣が烈しかつたので)人々は自分の家の前の舗道や、家の屋根の上から雪を掻き落して、あらあらしいが快活な、氣持のよい一種の音樂を奏でて居た。そして雪が屋根の上から下の往來へどしどしつと落ちて来て、人工的な一寸した吹雪となつて散亂するのを見て、男の子達は狂せんばかりに喜んだ。

8. 屋根の上の滑かな白い雪の褥や地面の稍々汚れた雪と對照して、家の正面は可なり黒く、窓は一層黒く見えました。この地上に積つた雪の上皮は荷車や荷馬車の重い車輪で深い轍を作つてゐた。その轍は、大道が岐れてゐる處では、幾百度となく行き交ひまた行き交ひして、どれがどれやら見分け難い錯雜した溝をなして、どろどろな黄色い泥と氷水になつてゐた。空は鬱陶しくて、溶けた様な凍つた様な薄汚い霧は、最も短い街路すら閉ぢこめて、その霧の中に重い微粒は煤けた粒の驟雨となつて降つて來たが、其有様はさながら英國中の煙突が申し合せて一度に火を點けて、思ふ存分燃え立つて居る様であつた。その氣候にもその都會にも、非常に氣の晴れる様な處は少しもなかつた。然も尙ほ、澄み切つた夏の空氣や輝く夏の太陽とても爲し得ない晴れやかな氣が屋外に漂ふて居た。

were chocked up 閉ぢ込められてゐた。

by one consent 皆んな一致して、申し合せて。

were blazing away どんどん燃えてゐた。

to their dear heart's content 思ふ存分に、心行くまで、dear は軽い意味で別に譯さなくてもよい位である。

abroad 屋外。

9) For, the people who were shovelling away on the house-tops were jovial and full of glee; calling out to one another from the parapets, and now and then exchanging a facetious snowball—better-natured missile far than many a wordy jest—laughing heartily if it went right and not less heartily if it went wrong. The poulterers' shops were still half open, and the fruiterers' were radiant in their glory. There were great, round, pot-bellied baskets of chestnuts, shaped like the waistcoats of jolly old gentlemen, lolling at the doors, and tumbling out into the street in their apoplectic opulence. There were ruddy, brown-faced, broad-girthed Spanish Onions, shining in the fatness of their growth like Spanish Friars, and winking from their shelves in wanton slyness at the girls as they went by, and glanced demurely at the hung-up mistletoe. There were pears and apples, clustered high in blooming pyramids; there were bunches of grapes, made, in the shopkeepers' benevolence, to dangle from conspicuous hooks, that people's mouths might water gratis as they passed; there were piles of filberts, mossy and brown, recalling, in their fragrance, ancient walks among the woods, and pleasant shufflings ankle deep through withered

9. were shovelling away 掻き落してゐた。

facetious [fə'si:ʃəs] 道化た、面白い。

better-natured missile far than many a wordy jest 多くの言葉の上での戯談よりもずつと質のよい飛道具、(口で戯談言ふ時はつい人を害するものであるが、電球は中つても傷ける様なことはめつたにないからかく言つたのだ)。

were radiant in their glory 榮光に輝いて居た。我もの顔に輝いてゐた。

in their apoplectic [æpə'plektik].

opulence [ˈɒpjələns] 中風症らしい肥満の状態で。

Spanish Onions スペイン種の玉葱。

Spanish Friars スペインの坊主、(肥えふとつてゐたものが多かつ

9. 何故なら、屋根上で雪を掻き落してゐた人人は陽気で喜びに満ちてゐたからで、屋根の欄干から互に呼び合つたり、また折々は幾多の口さきの洒落よりもづつと悪意のない飛道具である處の雪球を面白さうに投げ合つたり、それがうまく中りもしようものなら、腹を抱へて笑ひ又中らなければ中らなかつたで同じ様に大笑ひしてゐた。鳥屋の店は未だ半分しか開いてゐなかつたが、果物屋の店は吾もの顔に輝いてゐた。其處には幾つも大きな圓い布袋腹の胡桃籠があつて、陽氣な老紳士のチョッキの様な格好をして戸口に凭れかかつてゐるのもあれば、中風症の様に肥え太つて、往來へ轉がり出てゐるのもあつた。

其處には又赤い、褐色の顔をして、廣い帯をしたスペイン種の玉葱があつて、スペインの坊主の様に丸々と肥え太つて、てらてらして居て、娘等が通りかゝると、猥らで、するさうな眼で、その棚の上からちらりとみたり、また、上に懸つて居る寄生樹を眞面目腐つて見詰めて居たりしてゐた。梨だの林檎だのは華、かなピラミツドの様に高く盛り上げられてゐた。また葡萄の房が、その店の主人の博愛心から、そこを通り過ぎる人々が無代で涎を流せる様に、人目につく鉤に釣してあつた。そこにはまた、毛ば立つた褐色の榛實が山と積まれて、その芳香は森中を歩くまはつて、落葉に踵を埋めて足を引きすりながら楽しく歩いたことを憶ひ起させてゐた。またづんぐりした黒いた)。

winking in wanton slyness 猥らな、するさうな眼でちらりと見て居た。

mistletoe クリスマスの祝ひに寄生樹をつるし、女はその下を通つてそれに接吻することを許されてゐる。

that people's mouths might water gratis 人々に無代で涎をたれすさ、gratis ['greɪtɪs]=for nothing 無代で。

leaves; there were Norfolk Biffins squab and swarthy, setting off the yellow of the oranges and lemons, and, in the great compactness of their juicy presons, urgently entreating and beseeching to be carried home in paper bags and eaten after dinner. The very gold and silver fish, set forth among these choice fruits in a bowl, though members of a dull and stagnant-blooded race, appeared to know that there was something going on; and, to a fish, went gasping round and round their little world in slow and passionless excitement.

10) The Grocers! oh, the Grocers! nearly closed, with perhaps two shutters down, or one; but through those gaps such glimpses! It was not alone that the scales descending on the counter made a merry suond, or that the twine and roller parted company so briskly, or that the canisters were rattled up and down like juggling tricks, or even that the blended scents of tea and coffee were so grateful to the nose, or even that the raisins were so plentiful and rare, the almonds so extremely white, the sticks of cinnamon so long and straight, the other spices so delicious, the candied fruits so caked and spotted with molten sugar as to make the coldest lookers-on feel faint and subsequently bilious. Nor was it that the figs

Norfolk Biffins ノーフォーク産の林檎。

squab [skwɒb] づんぐりした。

setting off 引き立たせて。

in the great compactness of their juicy persons 水氣のたつぶりした身で非常に緊つてゐる。

stagnant-blooded 血の循りの悪い。

was something going on 何事かが起つてゐた。(クリスマスで常とは異つてゐたことを言つてゐる)。

to a fish 一匹も残らず魚皆んな。

their little world 小さな世界、即ち、金魚鉢のこと。

10. **with two shutters down, or one** 開けられた一二枚の鏝戸、即ち一二枚鏝戸が開けられてゐて。

through those gaps such glimpses! 戸の隙間からちらりと見えるその光景と言つたら。

ノーフォーク産の林檎があつて、橙やレモンの黄色を引き立たせ、また、その水氣たつぷりで、肉の締つた鹽梅が、試みに紙袋に入れて家へ持ち歸つて、食後に召し上つて御覽んなさいと切に懇願やら哀願やらして居る様であつた。撰り出された果物の間には、鉢に入れられて金魚銀魚が出されてゐるが、こんな鈍感な血の循りの悪い生物でも、何か事が起つてゐるなど言ふことを知つてゐる様に見えました。そして、一匹残らず、ゆつくりしてゐて、熱はないが何となく昂奮した状態で口をバクバクさせて、その小さな世界をぐるぐると遊び廻つてゐた。

10. 食料品店! おゝ食料品屋! 多分鏝戸を一二板とつてあるだけで、大方閉めて居たが、その隙間から、ちらりと見える光景といつたら! 勘定臺の上へ秤皿が下りて来て陽氣な音を立てゝ居るだけではなく、麻絲は絲卷から勢よくほぐれてゆくしまた色々の罐は手品でもつかつてゐる様にならちこちと投げられてゐたし、茶と珈琲との香は一緒になつて鼻を喜ばして呉れるし、乾葡萄は澤山あつて然も飛切の上物ですし、巴旦杏も秀れて白く、肉桂の棒は非常に長く真直だし、その他の香料も大へん香ばしく、砂糖漬の果物は溶けた砂糖でよく固まり、そして、ほつぽつと粉をふいてゐて、こんな甘いものに如何な用のない人でも氣が遠くなつて、終には痲癢を起させる程であり。

the scales descending on the counter 秤皿が勘定臺の上へ降りて来て。(景氣よく品物を秤り賣りして居る様わかる)。

twine and roller 麻糸(品物をくゝる糸)と糸卷。

parted company 離れる、(糸卷からほぐれてゆく)。

rare=excellent.

caked and spotted 固まり、また斑點が出来てる、(粉がふいてる)。

the coldest lookers-on 最も冷淡な傍觀者、(そんな旨いものに一寸とも用事のないもの)。

feel faint 氣が遠くなる。

bilious=ill-tempered.

were moist and pulpy, or that the French plums blushed in modest tartness from their highly-decorated boxes, or that everything was good to eat and in its Christmas dress; but the customers were all so hurried and so eager in the hopeful promise of the day, that they tumbled up against each other at the door, crashing their wicker baskets wildly, and left their purchases upon the counter, and came running back to fetch them and, committed hundreds of the like mistakes, in the best humor possible; while the Grocer and his people were so frank and fresh that the polished hearts with which they fastened their aprons behind might have been their own, worn outside for general inspection, and for Christmas daws to peck at if they chose.

11) But soon the steeples called good people all, to church and chapel, and away they came, flocking through the streets in their best clothes, and with their gayest faces. At the same time there emerged from scores of by-streets, lanes, and nameless turnings, innumerable people, carrying their dinners to the bakers' shops. The sight of these poor revellers appeared to interest the Spirit very much, for he stood with Scrooge beside him in a baker's doorway, and taking off the covers as their bearers passed, sprinkled incense on their dinners from his torch. And it was a very uncommon kind

tartness 酸味のあること。

in the hopeful promise of the day その日(クリスマス)の望ましい期待で。この日を楽しく待ちうけて。

tumbled up against each other 互ひに突き當つて轉がった。

the polished heart 磨き上げた心臓型の留針。

worn outside 外に懸けられた。(本當の心臓は胸の中にあるが)。

for Christmas daws to peck at if they chose クリスマスの鴉共にお望なら啄いてくれと。daws は非常に喧しい鴉の一種、“Othello”の第一幕第一場 64-5 に “But I will wear my heart upon my sleeve For daws to peck at!”

(されど吾は心臓を吾が袖につけて鴉の啄むに任せむ)。

また、それから、無花果はしつとりとして、軟かさうですし、また、佛國産の梅はうんと飾り立てた箱の中から良い加減にすつばくなつて顔を赭らめて居るし、それに總ての品は食べて旨さうで、それがまたクリスマスの裝飾をしてゐた。景氣のよいのはそれだけでなく、客は今日の楽しさ胸一杯で、氣が急いで、夢中になつてゐるので、戸口の處で互につき當つて轉がり柳細工の籠を滅茶滅茶に押し潰したり、勘定臺の上に買物を置き忘れて、またそれを取りに駈戻つて來たり、そんな失錯を幾度となく繰り返して、此の上もない上機嫌であつた。一方その食料品店の主人や店の者達はいたつて氣輕で、威勢よく、その様は、彼等が自分のエブロンを脊後でしつかり止めてある磨き上げた心臓型の留針がそのまゝ自分の心臓でもある様に、外に懸けて、一般の人に見せてゐる様であり、また、クリスマスの鴉共にお望なら啄いてくれと言はんばかりであつた。

11. だが間もなく、諸所の尖塔の鐘が鳴つて、善男善女をみんな、教會や禮拜堂に呼び集めたので、彼等は一丁羅を着飾りとても楽しさうな顔付で、往來を群集して、出掛けて來た。それと同時に幾多の横町からも路次からも、名もない角々からも數知れぬ多勢の人々が現はれて銘々の御馳走を麵麩屋へと運んでゐた。此等の貧しい飲み騒ぎ連の光景は非常に幽靈の興味を惹いたと見えて、幽靈はスクルウヂを自分の傍につれて麵麩屋の戸口に立つて、御馳走を運ぶ人が通る度にその覆を取つて松明からその御馳走に香料を振りかけてゐた。してその松明は普通のととは非常に異つたものであつた、と言ふのも、御馳走運

11. **the steeples called** 教會の尖塔の鐘が鳴つて人々を呼んだ。

carrying their dinners to the baker's shops 貧乏人は御馳走するにもあまり道具もなかつたりするので、材料を麵麩屋へ持つて行つて調理して貰ふのを常としてゐた。

of torch, for once or twice when there were angry words between some dinner-carriers who had jostled each other, he shed a few drops of water on them from it, and their good humor was restored directly. For they said, it was a shame to quarrel upon Christmas Day. And so it was! God love it, so it was!

12) In time the bells ceased, and the bakers were shut up; and yet there was a genial shadowing forth of all these dinners and the progress of their cooking, in the thawed blotch of wet above each baker's oven; where the pavement smoked as if the stones were cooking too.

"Is there a peculiar flavor in what you sprinkle from your torch?" asked Scrooge.

"There is. My own."

"Would it apply to any kind of dinner on this day?" asked Scrooge.

"To any kindly given. To a poor one most."

"Why to a poor one most?" asked Scrooge.

"Because it needs it most."

13) "Spirit," said Scrooge, after a moment's thought, "I wonder you, of all the beings in the many worlds about us, should desire to cramp these people's opportunities of innocent enjoyment."

"I!" cried the Spirit.

God love it! 絶叫の間投詞、今ではあまり使はぬ。

12. **in time**=in due time やがて、その内に。

genial shadowing forth 灰かにそれとなき現はれ。

the thawed blotch of wet above each baker's oven どの麵包屋の竈の上にも、雪がとけて灰かにそれとなき現はれ。(パン屋の竈は多く通路に面した地下室にあつたらしい)。

smoked 湯氣を立て、居た。

cooking=being cooked.

To any kindly given=to anything which it kindly given 親切に出される御馳走。

びが互に衝き當つた爲めに口喧嘩をやつて居た時に、一二度、幽霊は其松明から彼等の上に二三滴の水をふりかけてやつた。すると彼等は立ち處に元通りの上機嫌になつたからです、して彼等はクリスマス日に喧嘩するなんて見つともないと言つたからです。その通り! 全く、その通り!

12. やがて鐘の音は止み、麵包屋も閉ぢられた。然し、どの麵包屋でもその竈の上、雪が斑らに溶けて濡れてる所には全く其等の御馳走や料理の出来かけてゐる様子が灰かに其となく現はれてゐた。そこん處の舗石が湯氣を立ててゐたので、まるでその石までが料理されてゐる様であつた。

「貴方が松明から振りかけられるものには何か特殊な香味でもあるのですか?」とスクルウヂは尋ねました。

「あるよ、俺獨特の香が」

「其は今日のどんな御馳走にでも使ふんでせうか?」とスクルウヂは訊きました。

「親切に出される御馳走ならどんなものにも使ふのだ、貧しい御馳走には一等よく使ふのだ。」

「何故貧しい御馳走には一番よく使ふんでせう?」とスクルウヂは尋ねました。

「そりやさう言ふ御馳走には何より一等必要ぢやからだ。」

13. 「幽霊さん」とスクルウヂは一寸考へてから言つた。「吾々の周りの色々な世界に住んでるあらゆる者達の中でも、貴方が、其等のもの共が無邪氣に楽しむ機會を窮屈にしようとしてゐられるとは、どうも合點が行きません。」

「俺が?」と幽霊は叫びました。

13. **I wonder you....., should desire to cramp** 貴方が窮屈にしようとして居られるとは合點が行きません。should を使つたのは I wonder があるからである (cf. I am surprised you should.....)。

"You would deprive them of their means of dining every seventh day, often the only day on which they can be said to dine at all," said Scrooge. "Wouldn't you?"

"I?" cried the Spirit.

"You seek to close these places on the Seventh Day?" said Scrooge. "And it comes to the same thing."

"I seek!" exclaimed the Spirit.

"Forgive me if I am wrong. It has been done in your name, or at least in that of your family," said Scrooge.

"There are some upon this earth of yours," returned the Spirit, "who lay claim to know us, and who do their deeds of passion, pride, ill-will, hatred, envy, bigotry and selfishness in our name, who are as strange to us and all our kith and kin, as if they had never lived. Remember that, and charge their doings on themselves, not us."

14) Scrooge promised that he would; and they went on, invisible, as they had been before, into the suburbs of the town. It was a remarkable quality of the Ghost (which Scrooge had observed at the baker's), that notwithstanding his gigantic size he could accommodate himself to any place

you would deprive.....every seventh day 貴方はいつも七日目毎に彼等が御馳走を得る手段を奪つてお終ひだ。every seventh day. 日曜日毎に、(日曜日は安息日として店屋を休ませるので貧しい人々は御馳走も作れなくなるの意)。

it comes to the same thing 其は同じ事になる(店を閉ぢさせることは結局御馳走を得る手だてを奪ふのと同じ事になる)。

in that of your family 貴方の御家族の名前で。

lay claim to know us 俺達を知つてると言ひふらす。(宗教心が深いと言ひふらす)。

all our kith and kin あらゆる俺達の朋友親戚。

charge on 責める。

14. **that he would** の次には前の Remember that 以下の文句が略されてゐる。he would は引用符内に入れれば "I will" となる。

It was a remarkable quality の it は that 及び and that 以下の

「貴方は七日目毎に彼の人達が御馳走を得ようにも得る手だてを奪つてお終ひになるのです。あの人達が御馳走でも食べられるのは、どうやらほんのこの日一日位なものだと言はれてるその日にですよ。なんとさうちやありませんか？」とスクルウヂは言つた。

「俺がかい？」と幽霊は叫んだ。

「貴方は七日目毎に斯う言ふ處を閉めさせるぢやありませんか？」とスクルウヂは言つた。「そこで其と同じ事になるんです。」

「俺がさうさせるつて？」と幽霊は叫びました。

「間違つてたら御免なさい。ですが貴方の御名前が、少くとも貴方の御家族の御名前で、そんなにされて居りますので。」とスクルウヂは言つた。

すると幽霊は答へて言ふのに、「お前方の住んでる此の世の中にはこんなものがあるのだ、それは俺達を知つて居る様な事を言ひふらして、俺達の名前で、情慾や、傲慢や、悪意や、憎悪や、嫉妬や、頑迷や、我利の行ひをしてゐる者があるが、そんな者達は俺達や俺達のあらゆる朋友親戚とは唯の一面識もないので、そんな者は此の世に存在しても居なかつたと同じ様なものだ。その事はよく覺へといてくれ、そして奴等のすることは奴等を責めるようにして、俺達を責めない様にしておくれ。」

14. スクルウヂはさうしませうと約束しました。それから彼等は以前と同じ様に姿を見せないで町の郊外へと行き続けました。幽霊は巨大な體をして居たけれども、どんな處へも樂々と自由自在に出遣入りすることが出来たし、また、どんな高莊

clauses をうける。

accommodate himself to 何々に身を適應させる。即ち、身體が自由自在になる。

with ease; and that he stood beneath a low roof quite as gracefully and like a supernatural creature, as it was possible he could have done in any lofty hall.

15) And perhaps it was the pleasure the good Spirit had in showing off this power of his, or else it was his own kind, generous, hearty nature, and his sympathy with all poor men, that led him straight to Scrooge's clerk's for there he went, and took Scrooge with him, holding to his robe; and on the threshold of the door the Spirit smiled, and stopped to bless Bob Cratchit's dwelling with the spirnkings of his torch. Think of that! Bob had but fifteen "Bob" a-week himself; he pocketed on Saturdays but fifteen copies of his Christian name; and yet the Ghost of Christmas Present blessed his four-roomed house!

16) Then up rose Mrs. Cratchit, Cratchit's wife, dressed out but poorly in a twice turned gown, but brave in ribbons, which are cheap and make a goodly show for sixpence; and she laid the cloth, assisted by Belinda Cratchit, second of her daughters, also brave in ribbons; while Master Peter Cratchit

a low roof 低い屋根、lofty hall 天井の高い廣間、(前者は貧家を後者は富家を表はす)。

15 to have pleasure in showing off 見せびらかすことを楽しみとする。

it was the pleasure の it. 及び **it was his own his own.....nature.** の it は that led him straight 以下の clause を指す、又、led him の subject は意味より見て the pleasure と his own nature と his sympathy とであると言へる。従つて、led him の him はスクルウヂでなくて幽霊である。

Bob Cratchit スクルウヂの店の番頭の名、Bob-Robert の俗稱。

but fifteen "Bob" a-week 一週に僅か十五ボブ。but=only. "Bob" は shilling の俗語、番頭の名と同じだから洒落れたのである。

fifteen copies of his Christian name his Christian name とは彼が生れて洗禮を受けた時の名、a copy とは寫しとか一部とか、一通とかの意、即ち、彼の名前の寫し十五枚或は十五通の彼の名前の意。前述の様に彼の名の Bob と shilling の Bob と同じだからかく言つたの

な廣間ででもすることが出来たと同じ様に、しとやかに、且つ此の世のものならぬ生物の様に、低い屋根の下にも立つたと言ふことは、その幽霊の著しい特質でありました。(スクルウヂは既に麵麩屋でその特質には氣が付いてゐたのであつた。)

15. そして、恐らく、その幽霊 さんは此の力を現はすのを楽しみにして居たからこそ、でなければ幽霊は親切で寛大で誠實な性質、及びあらゆる貧者に對する同情を持つて居たればこそ眞直ぐにスクルウヂの番頭の内へ行くに到つたのであらう。何故なら、幽霊は實際其處へ行き、然も、彼の上衣につかまつてるスクルウヂと一緒に連れて行つたからです。そして戸口の敷居の上で幽霊は微笑んで、立ち止まり、彼の松明から雫をふり掛けて、ボツブクラチットの住家を祝福してやつた。まあ考へて御覽! ボツブは一週にたつた十五ボツブしか貰つてゐなかつた。彼は土曜日土曜に自分の名前の寫しを僅かに十五枚づゝ、ポケットに入れただけであつた。然も尙ほ、現在のクリスマスの幽霊は彼の四間しかない家を祝福したのであつた。

16. とその時クラチット夫人が、クラチットの妻君がすっかり着飾つて、と言つても、二度も裏返しをした見窄しい着物であつたが、然し、リボンを華かにつけて出て來た。其のリボンは値段が安くて、六ペンスにしては中々よく見せて居た。そして彼女は、やはりリボンで飾り立てゝ居る二番目の娘のベリンド・クラチットに手傳はせて食卓に卓布を掛けました。その

である。

four-roomed house 部屋が四つしかない家、即ち小さな家の意。九尺二間の家とか棟刺長屋とか言つた處。

16. **Mrs. Cratchit, Cratchit's wife** 同格、面白く言ひ換へたのである。

brave in ribbons リボンで華かに飾つて、brave=finely dressed.

make a goodly show for sixpence 六ペンスにしては好く見せる。

plunged a fork into the saucepan of potatoes, and getting the corners of his monstrous shirt collar (Bob's private property, conferred upon his son and heir in honor of the day) into his mouth, rejoiced to find himself so gallantly attired, and yearned to show his linen in the fashionable Parks. And now two smaller Cratchits, boy and girl, came tearing in, screaming that outside the baker's they had smelt the goose, and known it for their own; and basking in luxurious thoughts of sage and onion, these young Cratchits danced about the table, and exalted Master Peter Cratchit to the skies, while he (not proud, although his collar nearly choked him) blew the fire, until the slow potatoes bubbling up, knocked loudly at the saucepan-lid to be let out and peeled.

17) "What has ever got your precious father then?" said Mrs. Cratchit. "And your brother Tiny Tim! And Martha warn't as late last Christmas Day by half-an-hour."

"Here's Martha, mother!" said a girl, appearing as she spoke.

"Here's Martha, mother!" cried the two young Cratchits "Hurrah! There's *such* a goose, Martha!"

monstrous=very large (親爺のお譲りだから馬鹿に大きい)。

private property 私有財産、(法律文めいた仰々しい文句を使つた處に面白みがある)。

the fashionable parks ハイカラ連の集まる公園、流行を追ふものの集まる公園の意。

came tearing in ばたばた駆け込んで来た。tear は烈しく走るの意)。

basking in luxurious thoughts of sage and onion サルピヤだ葱のだのと贅澤なことを考へて喜びながら、(サルピヤや葱は鷺鳥の詰め物としてその料理に用ふる。bask 暖まる、日向ぼっこするの意)。

exalted.....to the skies 天へ舞ひ上る程に稱め上げた。うんと稱め上げたの意。

17. what has ever got your father? = what has ^{happened to} _{become of}

間に息子さんのピーター・クラチットは馬鈴薯の鍋の中へ肉叉^{フォーク}を突込んだ。そして、怖ろしく大きな襦袢^{シャツ}のカラー(此はボツブの私有財産であつたが、この日のお祝ひに彼の息子にして、嗣子なる彼に與へたのであつた。)の兩端を口に啣へて、吾ながら實に華かにめかし込んだのを見て喜び、ハイカラ連の集る公園へと自分のリンネルのシャツを見せびらかしに行き度くて堪らなかつた。とそこへ、クラチットの子供でもつと小さいのが二人、男の子と女の子とがばたばたと這入つて来て、パン屋の表で鷺鳥の匂がしたが、其が自分達のだと分つたと騒々しく言つた。そして、此等の小クラチット達はサルピヤだの葱のだのと贅澤なことを考へて喜びながら、食卓の周圍を踵り廻りまたピーター・クラチット君をうんとこさと稱めそやしました。その間に彼は(自分のカラーで咽が締めさうであつたけれども自慢もせず)に火を吹き立てたので、なかなか煮え立つて、早く出して皮を剥いでくれよとばかり、グツグツ大きな音を立てて、鍋の蓋をたゞきました。

17. 「それはさうと、大事なお父さんはどうしたんだらう? それに弟のちつちやいチムちゃんも、それから、マアサも去年のクリスマスには三十分も早く歸つて居たのにね、」とクラチット夫人は言ひました。

「お母さん、マアサが歸りましたよ!」と言ひながら一人の娘が現はれて來ました。

「マアサが歸つて來たよ、お母さん!」と二人の小クラチットは叫んだ。

「ほうら! こんな鷺鳥があるよ、マアサ!」

your father? お父さんはどうしたんだらう。

warn't = wasn't の轉化。

a girl = martha.

"Why, bless your heart alive, my dear, how late you are!" said Mrs. Cratchit, kissing her a dozen times, and taking off her shawl and bonnet for her with officious zeal.

"We'd a deal of work to finish up last night," replied the girl, "and had to clear away this morning, mother!"

"Well! Never mind so long as you are come," said Mrs. Cratchit. "Sit ye down before the fire, my dear, and have a warm, Lord bless ye!"

"No no! There's father coming," cried the two young Cratchits, who were everywhere at once. "Hide, Martha, hide!"

18) So Martha hid herself! and in came little Bob, the father, with at least three feet of comforter exclusive of the fringe, hanging down before him; and his threadbare clothes darned up and brushed, too look seasonable; and Tiny Tim upon his shoulder. Alas for Tiny Tim, he bore a little crutch, and had his limbs supported by an iron frame!

"Why, where's our Martha?" cried Bob Cratchit, looking round.

"Not coming," said Mrs. Cratchit.

"Not coming!" said Bob with a sudden declension in his high spirits; for he had been Tim's blood horse all the way from church, and had come home rampant. "Not coming upon Christmas Day!"

bless your heart alive=my God b'ess your heart alive まあ驚きましたね、とか、まあ好かつたね! 位の意。

with officious zeal 御話好きに、zeal は熱誠。

never mind so long as you are come 来さへすりやそりやどうでもよい。(来さへすれば晩くなつた理由など言はなくても又心配しなくてもよい)。

18. **darned [dɜ:nd] up** ちやんと繕つた。

to look seasonable=suitable to the season 時節に相應しく見える様に、(クリスマスはクリスマスらしく)。

iron frame 鐵の枠、(曲つた足など直す爲めに用ふる枠)。

「まあ、よく歸つて来たね、マアサや、随分遅かつたね!」と言つてクラチット夫人は幾度も幾度も接吻したり、世話好きにも、娘のショオールや帽子を取つてやつたりした。

「昨晚の内に仕上げなければならん仕事が澤山ありましたしそれにね今朝は掃除をしなければならなかつたのですもの、お母さん!」とその娘は答へました。

「さうかい! それはどうでもいゝわ、歸つて来たんだから。さあお前、暖爐の前に腰かけて、お暖まりよ、まあ本當に好かつたねえ!」

「いけない、いけない! お父ちやんの御歸りだ!」何處へでも直ぐやつて来る二人の小クラチットは叫びました。「隠れなさいマアサ!」

18. マアサはその通り隠れました。とお父さんのボツブは、總を除いても少くとも三尺はある襟巻を前にぶらさけ、そしてその擦り切れた着物は、繕ふやら、ブラシを掛けるやらして、時節相應に見られる様にしたのを着て、それに、ちびさんのチムを肩車にのせて、這入つて来た。可愛さうに、ちびのチムは松葉杖をつき、兩の脚を鐵の枠で支へてゐました。

「おや、マアサは何處にゐるんだい?」と邊を見廻しながらボツブク・ラチットは叫びました。

「未だ歸りませんよ」とクラチット夫人は言ひました。

「未だ歸らない!」とボツブは急に元氣を落して言つた。と言ふのも、彼は教會から家までずつとチムのお馬になつて、勢よく跳ねまわつて、歸つて来たからであつた。「クリスマスの日に歸らないなんて!」

with a sudden declension in his high spirits 元氣を急に落して。

Time blood-horse blood-horse は純種の馬又は種馬の意であるが此處ではチムのお馬の意(ボブはチムを肩車にのせて、自分はまるでお馬の様になつて歸つて来たのだ)。

rampant [ˈrɛmpənt] (主として獅子の紋章で) 跳躍せるの意であるが此處では非常に元氣なことを表はして居る。

19) Martha didn't like to see him disappointed, if it were only a joke; so she came out prematurely from behind the closet door, and ran into his arms, while the two young Cratchits hustled Tiny Tim, and bore him off into the wash-house, that he might hear the puddings singing in the copper.

"And how did little Tim behave?" asked Mrs. Cratchit, when she had rallied Bob on his credulity, and Bob had hugged his daughter to his heart's content.

"As good as gold," said Bob, "and better. Somehow he gets thoughtful, sitting by himself so much, and thinks the strangest things you ever heard. He told me, coming home, that he hoped the people saw him in the church, because he was a cripple, and it might be pleasant to them to remember upon Christmas Day, who made lame beggars walk and blind men see."

20) Bob's voice was tremulous when he told them this, and trembled more when he said that Tiny Tim was growing strong and hearty.

His active little crutch was heard upon the floor, and back came Tiny Tim before another word was spoken, escorted by his brother and sister to his stool beside the fire; and while

19. **wash-house** 洗濯場の意であるが此處では臺所と譯した方がよい。

the copper=the copper vessels in which the pudding was cooking 銅鍋。

How did little Tim behave? チム坊はどうでした? (教會ではどんなに振舞つたか、行儀は好かつたか、泣いたりしなかつたかの意)。

as good as gold とてもよかつたの意。

who made lame beggars walk and blind men see 誰が跛者の乞者を歩かせたり、盲人を見える様にしたか、who は勿論 Christ を指してゐる。

(馬太傳第十一章第九節、同第十五章第三十一節、同第二十一章第十

19. マアサはほんの冗談にもせよ、父親が失望してゐるのを見度くなかつた。そこで、未だ早いに押入の戸の後から出て來ました。そして、走り寄つて父の兩の腕にだかれました。その間に、二人の小クラチットはチビのチムをずんずん引つ張つて、銅鍋の中でプディングがぶつぶつ歌つてゐるのを聞かせてやらうと臺所へ連れて行つた。

クラチット夫人はボツブが何でも人の言ふことを輕々しく信ずるのを冷かし、またボツブは思ふ存分娘を抱きしめてから、「それで、チム坊はどんな風でした?」とクラチット夫人は訊ねました。

「とてもおとなしかつたよ。あんなに一人で腰かけてゐるので、何うやら考へ込んぢやつたんだわ、でお前が未だ聞いた事もない様な妙な事を考へてゐるんだ。あの子は歸りに、俺に斯う云ふんだ、教會の中で皆んなが自分を見てくれるといふ言ふんだ。その譯は自分は跛者だから、皆の者も誰が跛者の乞食を歩かせたり、盲人の目に見える様にして下すつたかと言ふことを、クリスマスの日に憶ひ出して喜ぶだらうからと斯う言ふのだよ。」

20. ボツブが此の事を皆に話した時その聲は顫へてゐた。そして、チビのチムも段々しつかりとして、丈夫になつて來たと言つた時には尙更顫へてゐました。

チムのせはしない、小さな松葉杖の音が床の上に聞えて、父が次の言葉を言ひ出さない内に、チビのチムは彼の兄や姉に助けられて、暖爐の傍の自分の腰掛の處へ戻つて來ました。

四節、路加、第七章、第二十二節、參照)。

20. **Hearty** 丈夫な。

active せはしない、(こちよこちよ歩き廻るから)。

Bob turning up his cuffs—as if, poor fellow, they were capable of being made more shabby—compounded some hot mixture in a jug with gin and lemons, and stirred it round and round and put it on the hob to simmer; Master Peter, and the two ubiquitous young Cratchits went to fetch the goose, with which they soon returned in high procession.

21) Such a bustle ensued that you might have thought a goose the rarest of all birds; a feathered phenomenon, to which a black swan was a matter of course—and in truth it was something very like it in that house. Mrs. Cratchit made the gravy (ready beforehand in a little saucepan) hissing hot; Master Peter mashed the potatoes with incredible vigor; Miss Belinda sweetened up the apple-sauce; Martha dusted the hot plates; Bob took Tiny Tim beside him in a tiny corner at the table: the two young Cratchits set chairs for everybody, not forgetting themselves, and mounting guard upon their posts, crammed spoons into their mouths, lest they should shriek for goose before their turn came to be helped. At last the dishes were set on, and grace was said. It was succeeded by a breathless pause, as Mrs. Cratchit, looking

as if, poor fellow,.....shabby 可哀さうに、彼の袖口が尙其の上に汚れでもする様に、(ボツプの袖口は着古してゐたものであつたからその上に汚れ様もなかつたが恰も汚れでする様にと云ふユーモアである)。

ubiquitous [ju(:)'i:kwitəs]=being everywhere (本節、17. に出て来た、who were everywhere at once 参照)。

in high procession 大へんな行列をして。

21. a feathered phenomenon 羽の生へた怪物、phenomenon 稀有の事物の意。

to which それに比しては。

black swan 黒い白鳥、(非常に稀有なものと言ふ意に使つてゐる)。

it was something very like it 驚鳥はまるで其と同じ様なものだつた。(初めの it は驚鳥、後の it は the rarest of all birds 即ち、a feathered phenomenon.)

the hot plates あたゝめた食物をよそふ前に熱湯につけ或はストー

そして、その間、ボツプは袖口を可哀さうに、あの通りの袖口が尙その上に汚れでもする様に、まくりあけてジン酒とレモンとをかめに入れて、強い混合酒を作り、それをぐるぐる掻き廻し、とろ火で沸かす爲めに爐側棚の上に置きました。小旦那さんのピーターと跳ね廻り家さんの小クラッチトとは驚鳥を取りに出掛けたが、間もなく、それを持つて大へんな行列をして歸つて来た。

21. 引き續き起つたその騒ぎつたらなかつたのでただの驚鳥だつたけれど、それを皆さんは鳥の中でも一番稀らしいものだと思つたかもしれない、羽の生へた怪物ととも、其に比べれば、黒い白鳥なども何でもない。——して、實際、この家では驚鳥はまるで其と同じ様なものであつた。クラッチト夫人は(前以て、小さい鍋に用意して置いた)肉汁をシューシュー煮立たせ、小旦那のピーターは殆んど信ぜられない程の力を出して、馬鈴薯をつき潰し、ベリダ嬢はアップル・ソースに甘味を付け、マアサは熱い皿を拭き、ボツプはチビのチイムを食卓の小隅に連れて行つて、自分の傍に掛けさせました。二人の小クラッチトは皆んなのかける椅子を、して、自分達のも忘れずに並べました。そして彼等は盛つて貰ふ自分達の順番が來ない内に驚鳥が欲しいなどがやがや言はない様にと云ふので、自分の席に就いて見張りをしながら、口の中一杯に匙を押込んでみました。到頭お皿が並べられ、そして食前の祈禱も済みました。續いてクラッチト夫人が大庖丁をすつとゆつくり見調べて、驚

ブの前であたゝめる。

mounting guard upon their posts 自分の持場に立つて番をしつ

つ。

to be helped=to be served (with food) よそつてくれる。

were set on 並べられた。

It was succeeded by a breathless pause 息を殺してちつとして

居る静かさがそれに續いた。

slowly all along the carving-knife, prepared to plunge it in the breast; but when she did, and when the long expected gush of stuffing issued forth, one murmur of delight arose all round the board, and even Tiny Tim, excited by the two young Cratchits, beat on the table with the handle of his knife, and feebly cried Hurrah!

22) There never was such a goose. Bob said he didn't believe there ever was such a goose cooked. Its tenderness and flavor, size and cheapness, were the themes of universal admiration. Eked out by apple-sauce and mashed potatoes, it was a sufficient dinner for the whole family; indeed as Mrs. Cratchit said with great delight (surveying one small atom of a bone upon the dish), they hadn't ate it all at last! Yet every one had had enough, and the youngest Cratchits in particular, were steeped in sage and onion to the eyebrows! But now, the plates being changed by Miss Belinda, Mrs. Cratchit left the room alone—too nervous to bear witnesses—to take the pudding up and bring it in.

23) Suppose it should not be done enough! Suppose it

looking.....all along the carving-knife (鳥の丸煮などを切る) 大庖丁をずつと(先から元まで)見調べて。

the breast=the breast of the goose.

stuffing 鳥料理の詰物。

one murmur of delight 歡喜の聲。(one は皆が一時に發したから)。

22. **were the themes of universal admiration** 一同の賞讃の眼目であつた。即ち、一同の賞讃する處であつたの意。

Eked out 補つたので、即ち、添へたので。

one small atom of a bone 極く小さな一片の骨、(何もかもすっかり食つて残る處僅かに一小骨片に過ぎなかつたが、それにしても餘つたのだ、食ひ切れなかつたのだと面白く言つたのである)。

had had enough=had eaten enough.

were steeped in sage and onion to the eyebrows 眉毛の處まで

鳥の胸に突き刺さうと構へたとき、一同はちつと息を殺して、静かにしてゐた。だが、それを突き刺した時には、そして長い間、出るのを待ちに待つて居た詰物が現はれ出でた時には、食卓の周圍から一時に歡喜の聲が起つて、チビのチムデさへ二人の小クラチットに勵まされて、自分のナイフの柄で食卓を叩いて、はては、萬歳!と弱々しい聲で叫びました。

22. あの様な鷺鳥は決して決してありやしなかつた。ボツベも今迄にこんな鷺鳥が料理されたことがあらうとは信ぜられないと言つた。その軟かいことと言ひ、風味と言ひ、大きくて安い事と言ひ、皆一同の感心する處であつた。この鷺鳥に、林檎のソースと潰した馬鈴薯とを添へたので、兩家族のものが食べても有り餘る御馳走であつた。實際、クラチット夫人が(皿の上に残つた一つの骨のかけらを見遣りつゝ)大喜びで言つた通り、到頭其を食べきれなかつたのだ!兎に角、各自皆たらふく喰つた。そして殊に、小クラチット達に到つては、サルピヤやら葱やらと咽喉元まで詰め込んだ始末、處が今度は、ベリダ嬢が汚れた皿を取換へたので、クラチット夫人は、プツディングを取出して、それを持つて來ようと、——それも、未だ人に見られてはと氣が氣でなく、——一人で部屋を出て行きました。

23. それが、萬一、十分に出來上つて居なかつたとしたら!

サルピヤやら葱やらに浸つて居た。即ち、日本流に言へば、サルピヤやら葱やらを咽喉元まで詰め込んだと言ふ處である、勿論、were steeped in liquor など言ふ場合にはそのまゝ酒浸りになつたでよい。

the plates being changed 汚れた皿と新しい皿と取り換へられると、(プツディングを置く爲めであらう)。

too nervous to bear witnesses=so nervous that she could not bear that anybody should see her take the pudding out. プツディングを取り出すのを見られてはならないと氣が氣でなく。

should break in turning out! Suppose somebody should have got over the wall of the back-yard, and stolen it, while they were merry with the goose—a supposition at which the two young Cratchits became livid! All sorts of horrors were supposed.

Hallo! A great deal of steam! The pudding was out of the copper. A smell like a washing-day! That was the cloth. A smell like an eating-house and a pastrycook's next door to each other, with a laundress's next door to that! That was the pudding! In half a minute Mrs. Cratchit entered—flushed but smiling proudly—with the pudding, like a speckled cannon-ball, so hard and firm, blazing in half of half a quartern of ignited brandy, and bedight with Christmas holly stuck into the top.

24) Oh, a wonderful pudding! Bob Cratchit said, and calmly too, that he regarded it as the greatest success achieved by Mrs. Cratchit since their marriage. Mrs. Cratchit said that now the weight was off her mind, she would confess she had had her doubts about the quantity of flour. Everybody had something to say about it, but nobody said or thought it was at all a small pudding for a large family. It would have

23. **in tur ing out** 取り出す折に。

to get over 乗り越へる。

merry wi h the goose 鷺鳥のことはしやいで居て。

spec' led 斑點のある、(乾葡萄がついてるので)。

half of hal' a quartern 四半ポイントの半分、二勺位、a quartern は one pint [paint] の四分の一、約八勺。

ignited [ig'naitid] brandy プッディングが出来上ると皿にのせブランデーをかけて其に火を點するのがクリスマスの習慣。

24. **the greatest success** 此の上ない成功、(プッディングが今迄で一番よく出来た)。

the weight was off her mind 心の重荷が降りた、(肩の重荷を下したの意)。

取り出す時に若し壊れでもしたら! また皆んなが鷺鳥で有頂天になつてゐる間に、誰かが裏庭の塀を乗り越へて来て、それを盗んで行つてたとしたら、斯う想つただけでも二人の小クラチツクは顔色が青くなつて来た! そしてあらゆる恐怖が想像された。

やあ! 大へんな湯氣だ! プッディングは銅鍋から取り出された。洗濯日の様な香だ! それは布巾であつた。隣り合せの料理屋とカステラ屋のその又隣りの洗濯屋がある様な香だ! それがプッディングであつた。半分間もすると、クラチット夫人が這入つて来た。——顔をほてらして居るが、得意気に微笑みながら——斑點のある砲彈の様にかにも硬く、しつかりして居て、火の點いた、二勺ばかりのブランデーでぽつぽつと燃え立つてゐる。そして、天邊にクリスマスの柁を突き刺して飾り立てたプッディングを持つて這入つて来た。

24. おい、素晴らしいプッディング! ボツブ・クラチットは然も落着き拂つて、妻君に、二人が結婚して以來こんなにうまくお前がこしらへた事はないと言つた。クラチット夫人はやつと心の重荷が降りたから打ち明けますが、粉の分量がどうだつたかしらと思つたんですと言つた。誰も彼もそのプッディングについて何とか、かとか言つたが、然し誰一人として其が大家族のとしては、どう見ても小さなプッディングだなぞとは言ふものもなく考へるものもなかつた。そんなことでもすればそ

had her doubts about.....はどうかしらと思つた。

at all どう見ても、つまりは。

It would have been flat hereby to do so そんなことでもすればそれこそ異端だ、flat は downright で一も二もなく、全くの邪道だ。do so, 上述の様なことを言つたり考へたりすれば。

been flat heresy to do so. Any Cratchit would have blushed to hint at such a thing.

25) At last the dinner was all done, the cloth was cleared, the hearth swept, and the fire made up. The compound in the jug being tasted and considered perfect, apples and oranges, were put upon the table, and a shovelful of chestnuts on the fire. Then all the Cratchit family drew round the hearth, in what Bob Cratchit called a circle, meaning half a one: and at Bob Cratchit's elbow stood the family display of glass. Two tumblers, and a custard-cup without a handle.

26) Thees held the hot stuff from the jug, however, as well as golden goblets would have done; and Bob served it out with beaming looks, while the chestnuts on the fire sputtered and crackled noisily. Then Bob proposed:

"A Merry Christmas to us all, my dears. God bless us!"

Which all the family re-echoed.

"God bless us every one!" said Tiny Tim, the last of all.

He sat very close to his father's side upon his little stool. Bob held his withered little hand in his, as if he loved the child, and wished to keep him by his side, and dreaded that he might be taken from him.

any Cratchit クラチット家の者は誰だつて。

to hint at such a thing そんなことを暖氣に出す。Hint 暗示する、それとなく示す。

25. **in what.....a circle** ボツブは環と言つたけれど實は半圓を作つてゐたのだから半圓のことを言つてゐたのだがさう言ふ形の團樂をなしての意。

half a one one 半圓。

tumbler 水コップ。

custard-cup カスタード用のコップ。

26. **the hot stuff** 熱いもの、熱い飲料、即ち、混合酒のことを指してゐる。

goblet [ˈɡɒblɪt] 臺附のコップ。

served it out それをずつと杯に注いだ。

beaming looks にこにこ顔。

れこそ紛れもない邪道だ。クラチット家の者は誰だつてそんなことを暖氣に出しても耻としてゐたのである。

25. 遂に御馳走はすつかり済んで、卓布は綺麗に片付けられ、暖爐も掃除され、そして、火が起されました。瓶中の混合酒も味をみた處申分なしとあつて、林檎とオレンジが食卓に置かれ、火斗に一掬ひの栗が火にかけられました。それからクラチット家の家族は全部暖爐の周りに集つて、實は半圓のことだつたのだが、ボツブ・クラチットの所謂團樂を作つたのであつた。そして、ボツブ・クラチットの脇の側には家中のコップの御陳列と來た。二箇の水飲コップに手のないカスタードコップが一箇。

26. 此等のものは、それでも、黄金の盃と等しく、瓶から熱いものを注がれました。ボツブはにこにこ顔でそれをずつと注ぎました。その間に火の上の栗はブツブツ、バチバチと音をたて、はちいてゐた。それからボツブはお祝の言葉を述べようと先に立つて言ひました。

「私達皆んなにとつてお目出度いクリスマス。神様、どうか私達をお恵み下さい！」

家族の者は皆んなそれに和して言ひました。チビのチムムは一番お終ひに、「神様、どうか私達一同をお恵み下さい！」と言ひました。

彼は父の直ぐ傍にくつついて、自分の小さい腰掛に掛けてゐました。ボツブは彼の萎びた小さい手を握つてゐた。その様はまるで、その子が可愛くて、自分の側に置いて居たいが、その子を自分の手許から誰かが引離しはしないかと氣遣つてゐる様でありました。

propose 發議する。[to propose (as a toast) Mr. So-and-so. 誰某君に祝盃を擧げようと發議する]。

27) "Spirit," said Scrooge, with an interest he had never felt before, "tell me if Tiny Tim will live."

"I see a vacant seat," replied the Ghost, "in the poor chimney-corner, and a crutch without an owner, carefully preserved. If these shadows remain unaltered by the Future, the child will die."

"No, no," said Scrooge. "Oh, no, kind Spirit! say he will be spared."

"If these shadows remain unaltered by the Future, none other of my race," returned the Ghost, "will find him here. What then? If he be like to die, he had better do it, and decrease the surplus population."

28) Scrooge hung his head to hear his own words quoted by the Spirit, and was overcome with penitence and grief.

"Man," said the Ghost, "if man you be in heart, not adamant, forbear that wicked cant until you have discovered What the surplus is, and Where it is. Will you decide what men shall live, what men shall die? It may be, that in the sight of Heaven you are more worthless and less fit to live than millions like this poor man's child. Oh God! to hear the Insect on the leaf pronouncing on the too much life among his hungry brothers in the dust."

27. **these shadows** それ等の影、(空いた席や、主なき松葉杖を指す)。

none other of my race will find him here 私の一族のものはいもう誰も彼の子が此處に居るのを見ないであらう。(即ち、未來のクリスマス迄は命を保つまいの意)。

what then? ぢやどうしたと言ふのだ? それでいいぢやないかの意。

if he be like to die like=lively 死にさうなのなら、(以下の言葉は前にスクルウヂが寄附金の勧誘者に向つて言つた言葉を其儘に幽霊が引用したのだ)。

28. **if man you be in heart**=if you be man in heart=if you are man in heart. 人間らしい心を持つてゐるなら、人筋があるなら。

adamant ['ædəmənt] 堅石。

27. 「幽霊さん」とスクルウヂは未だ決して感じたことのない興味を感じて言つた。

「チビちゃんのタイムは生きて居られるでせうか。」「私にはあの貧弱な爐邊に一つの空いた席と、主のない松葉杖が大切に保存されてゐるのが見える。若し此等の影が未來の手で變ぜられないなら、あの子は死ぬであらう。」

「いや、いや、」とスクルウヂは言つた。「そりやいけません。親切な幽霊さん! どうかあの子は助かると言つて下さい。」

「あの様な影が未來の手で變ぜられないであのまゝだとすれば、俺の一族のものはいもう彼子が此處に居るのを見られないであらう。それがどうだと言ふのだ? あの子が死にさうなのならいつそ死んだがいい。そして、餘計な人口を減らしたがいい。」と幽霊は答へました。

28. スクルウヂは自分が言つた言葉を幽霊が引用するのを聞いて、頭を下げました。そして、後悔と悲しみの念にたれてた。

「人間よ」と幽霊は言つた。「若しお前が堅い石でなくて、人情を持つてゐるなら——何が餘計なのか、そんな餘計なものが何處にあるかが解らない内は、あんな邪慳なことを口癖にするのは慎まなければいけない。どんな人間を生かし、どんな人間を死なせるなどお前が自分で決め様と言ふのか? 神様の見られる處では、この貧しい人の子供と同じ様なものが幾百萬あつても、それよりもお前はまだもつと値打ちのない生きてる價值のない奴なんだ。おゝ神よ、葉の上の蟲が塵芥の中に居る餓えた兄弟達の間餘計な生命があるなどと言ふのを聞かうとは!」

to hear.....を聞くとは(何たる事だの意)。

the insect on the leaf 葉の上の昆虫、(寓話にある)。

pronouncing on.....について斷言する。

29) Scrooge bent before the Ghost's rebuke, and trembling cast his eyes upon the ground. But he raised them speedily, on hearing his own name.

"Mr. Scrooge!" said Bob! "I'll give you Mr. Scrooge, the Founder of the Feast!"

"The Founder of the Feast indeed!" cried Mrs. Cratchit, reddening. "I wish I had him here. I'd give him a piece of my mind to feast upon, and I hope he'd have a good appetite for it."

"My dear," said Bob, "the children! Christmas Day."

"It should be Christmas Day, I am sure," said she, "on which one drinks the health of such an odious, stingy, hard, unfeeling man as Mr. Scrooge. You know he is, Robert! Nobody knows it better than you do, poor fellow?"

30) "My dear," was Bob's mild answer, "Christmas Day."

"I'll drink his health for your sake and the Day's," said Mrs. Cratchit, "not for his. Long life to him! A merry Christmas and a happy new year! He'll be very merry and very happy, I have no doubt!"

The children drank the toast after her. It was the first of their proceedings which had no heartiness. Tiny Tim drank it last of all, but he didn't care twopence for it.

29. I'll give you Mr. Scrooge = I will drink the health of you Mr. Scrooge. スクルウヂさん私は貴方の健康の爲め祝盃を上げませう。

the Founder of the Feast Founder 設立者 (特に寄贈金をしての)とか基本金醸出者など言ふ意がある。此處では given 位な意。即ち、御馳走の費用を出してくれた人の意。

I'd give him a piece of my mind = I'd tell him my mind 思ふことを言つてやるんだが。

to feast upon 御馳走として食べる様に。

you know he is 此の次に an odious, stingy, hard, unfeeling man を付けて見るとよい。

30. lift her 彼女に倣つて。

didn't care twopence for it twopence [ˈtʌ, əns] ^{ペンス} 二片、これより少

29. スクルウヂは幽霊に非難されて頭を下けて顫へ乍ら、地面に眼を落しました。然し、自分の名前が呼ばれるのを聞くと直ぐにその眼をあげました。

「スクルウヂさん！」とボツブは言ひました。「今日の御馳走は貴方の御蔭です。スクルウヂさん貴方の御健康の爲めに祝盃を上げます！」

「御馳走はあの人の御蔭ですつて、まあ！」とクラチット夫人は赤くなつて叫んだ。「私はあの人が此處へ来て居ればよいと思ひますよ。そしたら思ふ存分、お小言の御馳走をしてやりませうよ。すりやあの人はそれを美味しく食べるでせうよ。」

「おい、子供達が居るぢやないか！クリスマスだよ。」とボツブは言つた。

「確かにクリスマスに違ひありませんよ。スクルウヂさんの様な厭な、吝嗇坊な、残酷な、情知らずの人の爲めに祝盃を上げてやるんだから。貴方はあの人があゝ言ふ人だと言ふことは御存じぢやありませんか、ロバート。貴方位よく知つてる人は誰もいないのですよ、可哀想に！」

30. 「おい、クリスマスだよ、」と、ボツブは穩かに答へました。

「私は貴方の爲めに、又、今日のクリスマスの爲めにあの人の健康を祝つてやりませう。だがあの人の爲めぢやないのですよ。彼の人に命長かれ！クリスマスお目出度う、新年御目出度う、あの人はほんとに愉快で幸福でせうよ、屹度！」

子供達は彼女に倣つて乾盃しました。彼等の行爲で誠意の籠つて居なかつたのはそれが始めてであつた。チビちゃんのチイムは一番後で乾盃しました。が彼はちつともそれに興味を感じ

しもの意、即ち、それには少しも氣を掛けなかつたの意。

Scrooge was the Ogre of the family. The mention of his name cast a dark shadow on the party, which was not dispelled for full five minutes.

31) After it had passed away, they were ten times merrier than before, from the mere relief of Scrooge the Baleful being done with. Bob Cratchit told them how he had a situation in his eye for Master Peter, which would bring in, if obtained, full five-and-sixpence weekly. The two young Cratchits laughed tremendously at the idea of Peter's being a man of business; and Peter himself looked thoughtfully at the fire from between his collars, as if he were deliberating what particular investments he should favor when he came into the receipt of that bewildering income. Martha, who was a poor apprentice at a milliner's then told them what kind of work she had to do and how many hours she worked at a stretch, and how she meant to lie a-bed to-morrow morning for a good long rest, to-morrow being a holiday she passed at home. Also how she had seen a countess and a lord some days before, and how the lord "was much about as tall as Peter;" at which Peter pulled up his collars so high that you couldn't have seen his head if you had been there. All this time the chestnuts and the jug went round and round; and by and by they had a song about a lost child travelling

for full five minutes 丸五分間。

31. after it had passed away, it は a dark shadow を指す。

Scrooge the Baleful 有毒なものスクルウヂ、毒虫めのスクルウヂと言つた意。Baleful の次には whom が略されてる。

being done with 片付いてること。

a situation in his eye 眼をつけてる一地位、心當りの務め口、in his eye=in contemplation.

full five-and-sixpence five の次には shillings が略されてる。たつぶり五志半、(一志は十二片だから (cf. full ten miles たつぶり十哩)。

what particular investments he should favour どんな特別な投

なかつた、スクルウヂはその一家の食人鬼であつた。スクルウヂの名前が口に出されると、一座のものには暗い影が投げられた。そして、その暗い影は丸五分間も消えずに居た。

31. その影が消え去つて終つた後は、彼等はスクルウヂと言ふ毒蟲めが片付いたと安心するだけで、以前の十倍も陽氣であつた。ボツブ・クラチットはピーター君には心當りの働き口があつて、若しその職にありつけたら、一週にたつぶり五志半遣入ると言ふ様なことを皆のものに話して聞かせた。二人の年のいかぬクラチット共はピーターが實業家にあると思ふのも可笑しいと笑ひこけました。そして、ピーター御自身は、その目の廻る様な収入を得る様になつたら、特に何に投資したものかと熟考してでも居る様に、カラーの間から暖爐の火を考へ深げに見つめてゐた。それから、婦人帽子店のつまらない奉公人だつたマーサは、何んな種類の仕事を自分はしなければならぬかと言ふことや、また、續け様に何時間働かねばならぬかと言ふことや、明日は休で自分の家に居るのだから、明朝はゆつくり骨休めに朝寝坊する積りだと言ふことを皆んなに話しました。又、彼女は先日ある伯爵夫人と一人の貴公子とを見たがその貴公子は「丁度身の丈恰好がピーター位だつた」と話しました。此を聞いて、ピーターは非常に高く彼のカラーを引張り上げました、て諸君はたとへその場に居たとしても彼の頭を見ることは出来なかつたでせう。此の間栗と瓶とは始終ぐるぐる廻つてゐた。間もなく彼等は雪の中を旅して行方知れずなつた

姿に手をつけようか、(どんな事に金を遣つたものかと言ふのを少し仰々しく言つて面白味をつけたのである)。

at a stretch 一息に、續け様に。

to lie a-bed to-morrow morning for a good long rest ゆつくり骨休めに明朝は朝寝坊する。

much about as tall as Peter 丁度身の丈恰好はピーター位。

in the snow, from Tiny Tim, who had a plaintive little voice, and sang it very well indeed.

32) There was nothing of high mark in this. They were not a handsome family; they were not well dressed; their shoes were far from being water-proof; their clothes were scanty; and Peter might have known, and very likely did, the inside of a pawnbroker's. But, they were happy, grateful, pleased with one another, and contented with the time; and when they faded, and looked happier yet in the bright sprinklings of the Spirit's torch at parting, Scrooge had his eye upon them, and especially on Tiny Tim, until the last.

33) By this time it was getting dark, and snowing pretty heavily; and as Scrooge and the Spirit went along the streets, the brightness of the roaring fires in kitchens, parlors, and all sorts of rooms, was wonderful. Here, the flickering of the blaze showed preparations for a cosy dinner, with hot plates baking through and through before the fire, and deep red curtains, ready to be drawn to shut out cold and darkness. There all the children of the house were running out into the snow to meet their married sisters, brothers, cousins, uncles, aunts, and be the first to greet them. Here, again, were shadows on the window-blind of guests assembling; and there a group of handsome girls, all hooded and fur-booted, and all

32. **of high mark** = very noteworthy 特に言ふべき。

their shoes were far from being water proof 彼等の靴は水が入らぬどころぢやなかつた。(破れ靴だつたので水がどしどし入る様なのであつた)。

were pleased with one another 互に仲がよかつた。圓滿だつた。

the time クリスマスの季節。

the last = the last moment.

33. **hot plates baking through and through before the fire** 暖爐の前で充分に焼かれてるほやほやの皿のもの、hot plates 熱い皿のもの(皿そのものでなく皿にのせる御馳走のこと)。

ready to be drawn 直ぐに引き下される様にしてある。

子供の歌をチビちやんのチムが唄ふのを聞いた。チムは悲しげな小さい聲をして居て、それをほんとに上手に唄ひました。

32. 之には特に言ふ程のこともなかつた。彼等は立派な家族でもなかつたし、美しく着飾つても居なかつたし、彼等の靴は水が入らぬどころぢやなかつた。彼等の着物は少ししかなかつた。ピーターは質屋の内部を知つてゐたか知れない。否どうも知つてゐるらしかつた。然し、彼等は幸福であり、感謝の念に満ちて居り、互に圓滿でクリスマスの季節に満足してゐた。そして、彼等の姿が薄らいで行き別れ際に幽霊の松明の輝かしい滴りの中に彼等が尙一層幸福さうに見えた時に、スクルウヂは彼等をながめ、特にチビちやんのチムを最後まで見てゐました。

33. この時分には、もう、邊が暗くなつて、可なりひどく雪が降つて居た。そして、スクルウヂと幽霊とが街路を通つてゐた時に臺所やら、客間やら、あらゆる種類の部屋部屋にはゴーゴー音を立て、燃えてる暖爐の火の輝かしさつたら驚くべきものであつた。此處ではゆらめく焔の光で、温い氣持のよい晩餐の用意をするのが見え、暖爐の前で充分に焼かれてる熱い皿のものやら、寒さと暗をふせぐ爲めに、直ぐと下りる様にしてある深紅色のカーテンやらが見えた。あちらには、その家の子供達がみんな、そのお嫁に行つた姉さん達や、兄さん達や、従兄やら、伯父やら、叔母やらを出迎へて、吾先に拶挨拶しようと雪の中へ走り出して居た。またこつちには、集つてゐる客の影が窓の日蔽に映つてゐた。そしてあちらには、何れも頭巾を被り毛皮の長靴履いた一群の美しい娘さん達が、皆んな一緒にべち

were shadows on the window-blind of guests assembling 集つて来る客の影が窓の日蔽に映つてゐた。

chattering at once, tripped lightly off to some near neighbor's house; where, woe upon the single man who saw them enter—artful witches, well they knew it—in a glow!

34) But, if you had judged from the numbers of people on their way to friendly gatherings, you might have thought that no one was at home to give them welcome when they got there, instead of every house expecting company, and piling up its fires half-chimney high. Blessings on it, how the Ghost exulted! How it bared its breadth of breast, and opened its capacious palm, and floated on, outpouring, with a generous hand, its bright and harmless mirth on everything within its reach! The very lamplighter, who ran on before, dotting the dusky street with specks of light, and who was dressed to spend the evening somewhere, laughed out loudly as the Spirit passed, though little kened the lamplighter that he had any company but Christmas!

35) And now, without a word of warning from the Ghost, they stood upon a bleak and desert moor, where monstrous masses of rude stone were cast about, as though it were the

tripped lightly off 軽々と足を運んで行つた。

woe upon the single man 獨身の男は禍なるかな。

artful witches 手管のある妖女達、此は girls のこと。

they know it it は woe upon 以下のこと。

in a glow 眞赤になつて上氣して、此は enter にかゝる。

34. **friendly gatherings** 親しい人達の集會。

if you had judged from....., you might have thought that....., 斯う斯う言ふことから判断したのであつたら..... 斯う斯う言ふ様に想つたかもしれないが(事實はさうでなくて反對であつたの意)。

instead of every house expecting company どの家も客を待ち設けなぞしてゐないで。

its fires it は every house を指す。

Blessings on it=May the blessings of God be on every house!

on everything within its reach 幽霊の手の届く範囲内にあるあ

やべちや饒舌り乍ら、近所の家へと軽々と足を運んで行つた。そこへ、彼女達が眞赤になつて行くのを見た獨身の男こそ禍なるかなだ、——手管のある妖女達、彼女等はそれをよく知つてゐるのだ。

34. 然し、諸君にして、若し親しい人達の集りへ行く途中の人数から判断したのであつたら、どの家でも、友を待ち設けたり、煙突の半分の高さ迄も火を燃え上らせたりなどしないでそこへ着いても、誰一人として内に居て出迎へてくれるものはないだらうと想はれるかもしれない。何の家にも此の家にも祝福あれ、幽霊はどんなに喜んだことだらう!如何に幽霊が胸一杯あらはにして、大きな掌を開き、手の届く範囲内にあるあらゆるものの上に、寛大な手でもつて、その輝かしくして害なき快樂を振り撒きながら、ふはふはと昇つて行つたことでせう! 薄暗い街に灯を點々とつけつつ、彼等の前を駈けつた點燈夫ですら、何處かで今宵を過す爲め着飾つてゐるたが、幽霊が通り過ぎた時には、高らかに笑つた。その點燈夫はクリスマスの外に伴者があらうとは少しも知らなかつたのであつたけれども。

35. 處で、幽霊から一言の警告もなしに、もう、彼等は寂寞荒涼たるある野原の上に立つて居た。其處は恰も巨人の墓場ででもある様に荒くれた石の怖ろしく大きな塊があちこちに轉らゆるものの上に。

The very lamplighter 點燈夫でさへ。

ran on before (幽霊とスケルウヂとの) 前を走つて行つた。

though little kened 少しも知らなかつたけれども、ken=know 古語であるが唯スコットランドで用ひられてゐる。

any company but Christmas クリスマスの外の伴にはスケルウヂがゐるのであるが此は點燈夫の眼には見えなかつたから彼は少しも知らなかつたのだ。

burial place of giants; and water spread itself wheresoever it listed or would have done so, but for the frost that held it prisoner; and nothing grew but moss and furze, and coarse rank grass. Down in the west the setting sun had left a streak of fiery red, which glared upon the desolation for an instant like a sullen eye, and frowning lower, lower, lower yet, was lost in the thick gloom of darkest night.

36) "What place is this?" asked Scrooge.

"A place where Miners live, who labor in the bowels of the earth," returned the Spirit. "But they know me. See!"

A light shone from the window of a hut, and swiftly they advanced towards it. Passing through the wall of mud and stone, they found a cheerful company assembled round a glowing fire. An old, old man and woman, with their children and their children's children, and another generation beyond that, all decked out gayly in their holiday attire. The old man, in a voice that seldom rose above the howling of the wind upon the barren waste, was singing them a Christmas song—it had been a very old song when he was a boy—and from time to time they all joined in the chorus. So surely as they raised their voices, the old man got quite blithe and

35. **the burial-place of giants** 巨人の墓所 (Dolmens とか cromlechs とか言つた様な巨大な墓石のことを言つてゐる。此等のものは英國のあちこちに見られる。後期石造時代の巨大な墓石であつて、巨人の墓だと想はれてゐる。)

wheresoever it liste 1 それが思ふまゝに何處へでも、it は water 即ち、流るゝままに何處へでも。

would have done so = would have spread itself.

but for the frost 結氷してゐなかつたら、(……であつたらう)(が結氷してゐたから……であつた)。

the frost that held it prisoner 水を虜にして置く結氷、流れない様にする結氷。

upon the desolation 荒涼たる景色の上に。

36. **in the bowels of the earth** 地の内部で、bowels [ˈbaʊəlz]

つて居た。そして、水は流るゝ儘に何處へでも擴がつてゐた。いやさう言ふ風に擴がつても居たであらうが、然し氷つてゐたので、水は流れることが出来なかつたのであつた。そして、苔と、はりえにしだと、蔓つた雑草の外には何も生えてゐなかつた。西空に低く、沈みゆく太陽は火の様な赤い一條の光を残してゐたが、それは一瞬の間陰惨な眼の様に、荒涼たる景色の上にきらきら輝いてゐたが、それも段々低く低く墮れながら、眞暗な夜の文目も分かぬ闇中に消え失せて終つた。

36. 「此處は何う言ふ處ですか」とスクルウヂは尋ねた。

「鑛夫達の住んでる所だ、彼等は地の底で働いて居るのだ」と幽霊は答へた。「然し彼等は俺を知つてるよ。御覽！」

燈火が一軒の小屋の窓から射して居た。で二人はその方へと足早に進んで行つた。泥土と石の壁を通りぬけると、燃え盛つてゐる火の周りに集つてゐる愉快さうな連中が見えた。よほよほに年取つた爺さん婆さんが、其の子供達や、子供の子供達や、そのまた次の代の子達と一緒に、祭日の晴着を着て美しく飾り立てゝ居た。その爺さんは荒れはてた地上を吹きすさぶ風の音に消され勝な聲で、皆のものにクリスマスの歌を歌つてやつてゐた。——それは爺さんの子供の時に流行つた極く古い歌であつた。皆の者は時々聲を和して歌つた。皆が聲を高めると屹度

脇、内部、(此の意味の時(は常に複数)。

another generation beyond that そのまた次の時代の子達、即ち爺さんから言へば曾孫。that は their children's children.

that seldom rose above the howling of the wind 風の吹きすさぶ音より高く聞えることは滅多にない。即ち、吹きすさぶ風の音に消され勝な意。

blithe [blɪð] 快活な、元氣な。

loud; and so surely as they stopped, his vigor sank again.

57) The Spirit did not tarry here, but bade Scrooge hold his robe, and passing on above the moor, sped—whither? Not to sea? To sea. To Scrooge's horror, looking back, he saw the last of the land, a frightful range of rocks, behind them; and his ears were deafened by the thundering of water, as it rolled and roared, and raged among the dreadful caverns it had worn, and fiercely tried to undermine the earth.

Built upon a dismal reef of sunken rocks, some league or so from shore, on which the waters chafed and dashed, the wild year through, there stood a solitary lighthouse. Great heaps of sea-weed clung to its base, and storm-birds—born of the wind one might suppose, as sea-weed of the water—rose and fell about it, like the waves they skimmed.

38) But even here, two men who watched the light had made a fire, that through the loophole in the thick stone wall shed out a ray of brightness on the awful sea. Joining their horny hands over the rough table at which they sat, they wished each other Merry Christmas in their can of grog; and one of them: the elder, too, with his face all damaged and scarred with hard weather, as the figure-head of an old ship might be: struck up a sturdy song that was like a Gale in itself.

39) Again the Ghost sped on, above the black and heaving

so surely as = whenever.....する時は屹度、.....する時は何時でも。

37. **Built upon.....through** 迄の文句は light-house の修飾。
some league or so 数里そこそこ、league [li:g] 三哩の距離單位(一里八丁)。

as sea-weed of the water = as sea-weed was born of the water.

38. **in their can of grog** 酒杯を舉げて、grog (は水を割つた火酒、殊に船員などの飲む酒、can 金屬製の耳つき大コップ (cf. we drank his health in a cup of ale. 我等は麥酒の杯を舉げて彼の健康を祝した)。

the elder, too 然も年長者の方、too = moreover.

爺さんも元氣が出て聲を高めたが、皆が止めると屹度爺さんの元氣は沈んでしまふのであつた。

37. 幽靈は此處に停滯して居らずに、自分の着物をスクルウヂに掴まへさせ、その沼地の上を通り過ぎて、急いで行つたのは——何處だらう? 海へではないか? さうだ海へだ。スクルウヂは振り返つて見ると驚いたことに、自分等の後には怖ろしい岩の連つた陸地の端が見えた。そして、潮はその穿つた恐ろしい洞窟の中で逆捲き返すやら、怒號するやら狂奔して、地を下より烈しく掘り覆さうとしてゐたが、その潮の轟きで彼の耳も聞えなくなつて終つた。

岸から二三里そこそこ離れた處で、一年中荒れ通しに波が激し、波に揉まれてゐる物凄しい暗礁の上に、淋しくも一つの燈臺が建つてゐた。その礎には堆く海藻が絡まりついて、海鳥は——丁度海藻が水から生れる様に、風から生れたかと想はれるが——其等が掠め飛ぶ波と同じ様に、その燈臺の周りを舞ひ上つたり下つたりして居た。

38. 然し、此處でさへも、二人の燈臺守が火を燃してゐて、それが厚い石の壁に開いてる風窓を通つて物凄しい海上に輝かしい一條の光をなけてゐた。彼等は粗末なテーブルについてゐたが、そのテーブル越しに、荒くれた手を握り合せ、酒杯を舉げて、互ひにクリスマスをお祝ひした。そして、その内の一人が——然も年長者の方の、古い船の舳^{へび}についてる人形の様に、荒い雨風に傷められて傷痕のついた顔をしてゐる方が、——まるきり大風の様な、逞しい歌を唄ひ出した。

39. 再び幽靈は、暗澹として、波の盛り上る海上を、急ぎ

the figure-head of an old ship 古い船の船首についてる人形。

struck up = began to sing.

in itself.. in its own nature.

sea—on, on—until, being far away, as he told Scrooge, from any shore, they lighted on a ship. They stood beside the helmsman at the wheel, the look-out in the bow, the officers who had the watch; dark, ghostly figures in their several stations; but every man among them hummed a Christmas tune, or had a Christmas thought, or spoke below his breath to his companion of some by-gone Christmas Day, with home-ward hopes belonging to it. And every man on board, waking or sleeping, good or bad, had had a kinder word for another on that day than on any day in the year; and had shared to some extent in its festivities; and had remembered those he cared for at a distance, and had known that they delighted to remember him.

40) It was a great surprise to Scrooge, while listening to the moaning of the wind, and thinking what a solemn thing it was to move on through the lonely darkness over an unknown abyss, whose depths were secrets as profound as Death: it was a great surprise to Scrooge, while thus engaged, to hear a hearty laugh. It was a much greater surprise to Scrooge to recognize it as his own nephew's and to find himself in a bright, dry, gleaming room, with the Spirit standing smiling by his side, and looking at that same nephew with approving affability!

39. **at the wheel** 舵輪の處に居て働いてる。
in their several stations 彼等夫々の位置に在る。
below his breath 低い聲で。
belonging to it = attaching to it.
it = Christmas Day.

40. **It was a great surprise to Scrooge** 此の文句を一度繰返して居るのはその間に長い文句があつて、始めだけではだれるからである。it は to hear a hearty laugh. をうけてる。
whose depths were secrets as profound as death その奈落の深さは死と同じ様に深い秘密であつた。
to recognise it の it は a hearty laugh.

續け——ずん、ずん進んで、——遂に、幽霊がスクルウチに言つた様に、どの岸からも遙かに離れて居たので、彼等は一艘の船の上に降りた。二人は、舵輪を手にした舵手や、船首に居る見張番や、當番の船士の側へ行つて立つたりした。それぞれ自分の位置に就いてゐる彼等の姿は、暗く、幽霊の様であつた。然し、それ等の者は何れも、クリスマスの歌を口吟んだり、或は、クリスマスのことを考へたり、或は、過ぎ去つたクリスマス——それにはホームに歸りたいといふ希望が附隨してゐた——のことを低い聲で仲間に物語つてゐたが。そして、その船上のものは、起きてゐるものも、寝てゐるものも、善いものも、悪いものも、誰も彼も、みんな、一年中のどの日よりも他人に對して一層親切な言葉を使つてゐて、ある程度迄は今日の祝を共に楽しんでゐたし、それに、誰も彼も、自分が心にかけてゐる遠方の人達のことを想ひ出してゐたし、又、その遠方の人達も自分のことを想ひ出して喜んで居ると言ふことを承知して居た。

40. スクルウチにとつては大へんな驚きであつた。風の呻きに耳を傾けたり、その深さは死の如く深い秘密である處の未知の奈落の上の物寂しい闇の中を通つてずんずん進んで行くと言ふことは何と言ふ嚴かなことだらうと考へたり、斯うしたことに氣を取られてゐる時に、腹の底からの笑ひ聲が聞えたことはスクルウチにとつては非常なる驚きであつた。が尙ほ更に非常に驚いたことには、それが自分の甥の聲だと分つたし、また、自分は輝かしい、乾燥した、明るい部屋の中に居て、自分の傍には幽霊が微笑みながら立つて居り、また、その同じ甥を幽霊は御機嫌斜ならず、じつと眺めて居るのに氣付いたのであつた!

nephew's = nephew's laugh.

with approving affability 御機嫌斜ならず、**approving** 嘉する **affability**. 愛想よきこと。

"Ha, ha!" laughed Scrooge's nephew. "Ha, ha, ha!"

41) If you should happen, by any unlikely chance, to know a man more blest in a laugh than Scrooge's nephew, all I can say is, I should like to know him too. Introduce him to me, and I'll cultivate his acquaintance.

It is a fair, even-handed, noble adjustment of things, that while there is infection in disease and sorrow, there is nothing in the world so irresistibly contagious as laughter and good-humor. When Scrooge's nephew laughed in this way: holding his sides, rolling his head, and twisting his face into the most extravagant contortions: Scrooge's niece, by marriage, laughed as heartily as he. And their assembled friends being not a bit behind hand, roared out lustily.

"Ha, ha! Ha, ha, ha, ha!"

42) "He said that Christmas was a humbug, as I live!" cried Scrooge's nephew. "He believed it too!"

"More shame for him, Fred!" said Scrooge's niece, indignantly. Bless those women; they never do anything by halves. They are always in earnest.

She was very pretty: exceedingly pretty. With a dimpled, surprised-looking, capital face; a ripe little mouth, that

41. **by any unlikely chance** さう言ふ機會は有りさうにもないがさうした機會で。

a man more blest in a laugh もつと笑ひに恵まれた人、即ち、もつと天性よく笑ふ人。

I'll cultivate his acquaintance 彼と懇意になる様につとめたい。

extravagant contortions 法外なしかめ面。

Scrooge's niece, by marriage 結婚による、スクルウヂの姪、とはスクルウヂの義理の姪、即ち、スクルウヂの甥の妻のこと。

lustily 活發に。

42. **as I live**=as surely as I live 確かに。

more shame for him 彼にとつて(さう信じてるなら)尙更恥づべきだ。即ち、そりや尙更よくないの意。

Fred=Alfred.

「はつ、はつ！」とスクルウヂの甥は笑つた。「はつ、はつ、はつ！」

41. 萬一諸君が、(そんな機會はありさうにもないが)、スクルウヂの甥よりももつと笑ひに恵まれてる男を御存知であるなら、私が申し上げることは、私も亦、その人を知り度いと言ふことだけです。私にその人を紹介して下さい。私はその人と懇意になる様につとめませうよ。

一に病氣や悲しみに感染力がある様に、世の中には笑とか上機嫌とか言ふもの位に、どうしても感染させずには置かぬものはないと言ふのは、物事の片手落のないで公平な貴い調節である。スクルウヂの甥が横腹を抑へたり、頭をぐるぐるさせたり、度外ずれなしかめ面に顔を歪ませたり——斯んな様子をして笑ふと、スクルウヂの姪になるその妻も彼と同じ様に心から笑ひこけた。それから、其處に集つて居た友人達も少しも後れは取らず、どつと聲を上げて笑ひ崩れた。

「はつ、はつ！はつ、は、は、は」

42. 「叔父さんはクリスマスなんて馬鹿らしいと言ひましたよ、確に！」とスクルウヂの甥は叫んだ。「あの人は、然も、さう信じてるんですよ！」

「それなら尙の事いけないわね、フレッド！」とスクルウヂの姪は腹立たしさうに言つた。いまいましい女達だ。彼女等は何でもいゝ加減にして置かない。常に一生懸命になつてやる。

彼女は非常に美しかつた。——秀れて美しかつた。壓のあるびつくりした様な様子をした、素敵な顔をして、接吻される様

Bless those women=Damned の euphemism (婉曲語法) でいまいましいに當る呪の語。

never do anything by halves 何でもいゝ加減にはせぬ。

a ripe little mouth 赤い唇をした小さい口、ripe lips 赤い唇。

seemed made to be kissed—as no doubt it was; all kinds of good little dots about her chin, that melted into one another when she laughed; and the sunniest pair of eyes you ever saw in any little creature's head. Altogether she was what you would have called provoking, you know; but satisfactory, too. Oh, perfectly satisfactory.

43) "He's a comical old fellow," said Scrooge's nephew, "that's the truth; and not so pleasant as he might be. However, his offences carry their own punishment, and I have nothing to say against him."

"I'm sure he is very rich, Fred," hinted Scrooge's niece. "At least you always tell me so."

"What of that, my dear!" said Scrooge's nephew. "His wealth is of no use to him. He don't do any good with it. He don't make himself comfortable with it. He hasn't the satisfaction of thinking—ha, ha, ha!—that he is ever going to benefit Us with it."

44) "I have no patience with him," observed Scrooge's niece. Scrooge's niece's sisters, and all the other ladies, expressed the same opinion.

"Oh, I have!" said Scrooge's nephew. "I am sorry for him; I couldn't be angry with him if I tried. Who suffers by his ill whims! Himself, always. Here, he takes it into

dots 點々、此處ではくぼみの點々。

provoking 小癢に障るやうな聲。

satisfactory = charming 美しい。

altogether = taken altogether 全體から見れば、一口に言へば。

43. **his offences carry their own punishment** 彼の罪にはその罪の報が来る。悪い事をして居れば自然その報がある。

44. **what of that?** それが何うした?

ill whims 悪い氣まぐれ。

here = here, for instance まあ、例へば、まあ早い話がの意。

に造られたと思はれる様な——誰かにさうであつたのだが——赤い可愛らしい唇をして居た。顎の邊には、色々な可愛らしい小さなくぼみがあつて、笑ふ時には、それが一つに溶け合ふのであつた。それから、どんな小女の顔にも見られない様な實にばつさりした二つの眼を持つてゐた。一口に言へば、小癢に障るやうな顔だが中々美しい、いや全く申し分のない美しい顔だ。

43. 「叔父はへんな爺さんだよ」とスクルウヂの甥は言つた。「そりや本當の所だよ。愉快にやらうと思へば出来るんだにのさうしないんだよ。然し、あの人の罪にはそれだけの報があるのだから、何もあの人を悪く言ふことはない。」

「屹度叔父さんは大金持なんですわね、フレッド」とスクルウヂの姪はそれとなく言つた。「少くとも、貴方はいつも私にさう仰有いますね」

「それが何うしたのだね、お前？」とスクルウヂの甥は言つた。「叔父さんの財産は實の持ち腐れたよ。それを何の役にも立てないのだ。それで自分身分が氣持よくなる様にもしないのだ。あの人は、——はつ、はつ、はつ！何れは俺達を好くしてやらうと考へて満足することもしないのだ。」

44. 「妾は叔父さんには我慢出来ませんわ」とスクルウヂの姪は言つた。スクルウヂの姪の姉妹達や他の婦人方も皆んな同じ様にさうだと言つた。

「いや、私は我慢出来ると」とスクルウヂの甥は言つた。「私は叔父が氣の毒だ。私は腹を立てようとしても叔父さんには腹を立てられやしない、あの人の悪い氣まぐれで誰が苦しむのか？何時だつて、あの人自身なのだ。早い話があの人は俺達に對して、悪い感情を抱くと、もう、此所へ来て俺達と一緒に御

he takes it into his head to dislike us 私達に對して嫌だと言ふ感情を抱く。

his head to dislike us, and he won't come and dine with us. What's the consequence? He don't lose much of a dinner."

"Indeed, I think he loses a very good dinner," interrupted Scrooge's niece. Everybody else said the same, and they must be allowed to have been competent judges, because they had just had dinner; and, with the dessert upon the table, were clustered round the fire, by lamplight.

"Well! I'm very glad to hear it," said Scrooge's nephew, "because I haven't great faith in these young housekeepers. What do you say, Topper?"

45) Topper had clearly got his eye upon one of Scrooge's niece's sisters, for he answered that a bachelor was a wretched outcast, who had no right to express an opinion on the subject. Whereat Scrooge's niece's sister—the plump one with the lace tucker: not the one with the roses—blushed.

"Do go on, Fred," said Scrooge's niece, clapping her hands. "He never finishes what he begins to say! He is such a ridiculous fellow!"

Scrooge's nephew revelled in another laugh, and as it was impossible to keep the infection off: though the plump sister tried hard to do it with aromatic vinegar: his example was unanimously followed.

much of a dinner 大した dinner.

competent ('kɒmpɪtənt] **judges** 十分資格のある審査員。

dessert [dizɜ:t] 食後の果物、菓子。

these young housekeepers 近頃の若い主婦連。

45. **had got his eyes upon one** 一人に眼をつけて居た。one は a sister.

wretched ['retɪd] みじめな。

the plump one=the plump sister 丸々と肥えた者。

tucker 十七、八世紀頃に流行した婦人の半襟の様なもの。

revelled in another laugh またも笑つて夢中になつて面白がつた。

to keep the infection off 感染を防ぐこと。

as it was の it (は to keep the infection off. to do) it の it も同様。

飯を食べようとはしない。その結果は何うです！大へんな御馳走を食べ損つたと言ふ譯ぢやないがね。」

「ほんとに、あの方は大へん結構な御馳走を食べ損つたぢやありませんか」とスクルウヂの姪は遮つて言つた。他の者も皆んな同じことを言つた。何しろ、彼等はたつた今御馳走を食べたばかりで、食卓の上には食後の茶菓を置いて、ランプの光の下で暖爐の周りに集つて居たのだから、充分資格のある審査員だとしなければならぬ。」

「うん！さう仰つて下さつて私もほんとに嬉しい」とスクルウヂの甥は言つた。「それもね、私は近頃の若い主婦達にや餘り信頼してないんだから。トツパー、君は何う思ふかね？」

45. トツパーはスクルウヂの姪の姉妹の中の一人に明かに眼をつけて居ました。と申すのも、彼が次の様な返事をしたからでありました。それは、獨身者はみじめな見棄られ者で、さう言ふ問題について意見を發表する権利がないと言ふのでありました。此を聞いて、スクルウヂの姪の姉妹で——レースの半襟をつけた丸々と肥えた方なので、薔薇をつけて居る方ではないのが——顔を赤くしました。

○スクルウヂの姪は手を叩きながら言ひました。「さあ、お話を続けなさいな、フレッド。話し出したことを何時だつて終まで言つて終はないのですもの！本當に可笑しな人ですね！」

スクルウヂの甥はまたもや笑ひ夢中になつて面白がつた。そして、其に感染するのを防ぐことは不可能であつたので、——丸々と肥えた方の妹などは香醋の香をかいでそれに感染すまいと一生懸命に試みたけれども——其處に居たものは誰も彼もその御手本に倣つたのでありました。

aromatic vinegar [æro'mætɪk 'vɪnɪgə] 香醋。

unanimously [ju(:)'nænɪməslɪ] 満場一致して。